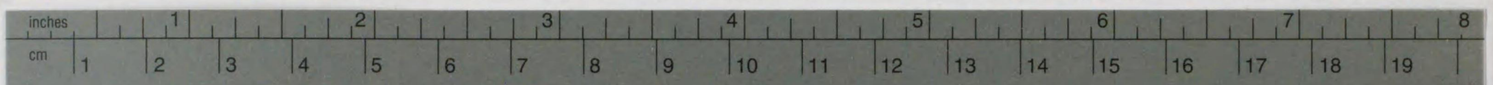
Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

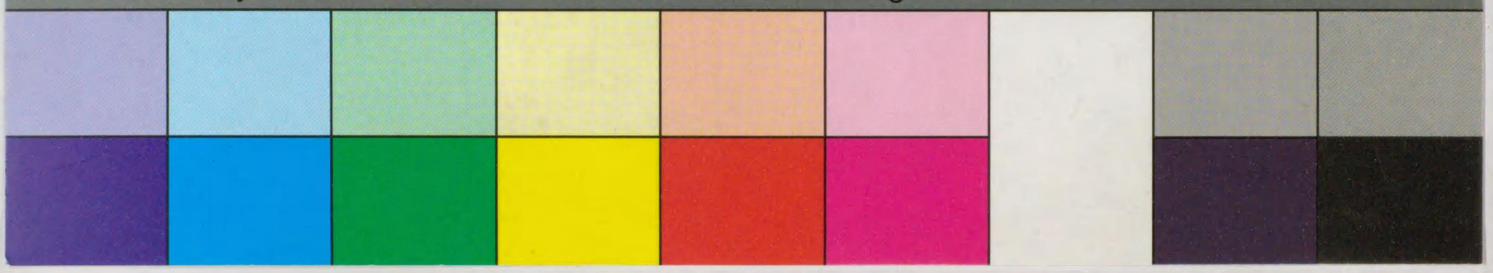
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



534
534-39
12005014987779

SANSEIDO
KANDA TOKYO

東洋歷史詳解

下卷

文學士 高桑駒吉 著

東京 共立社刊行

東洋歷史詳解

文學士 高桑駒吉 著

下卷

東京 共立社刊行

東洋歷史詳解 下卷 目次

第三篇 近古史

第一期 蒙古の勃興より元の滅亡に至る

第四十章 蒙古の勃興 元の太祖の征伐……五二一—五三〇

〇蒙古の勃興…五二一—〇太祖の南征…五二三—〇太祖の西征…五二五—〇子弟の分封…五二一

八—〇宋金西夏の形勢…五二九

第四十一章 太祖の南征 拔都の西征……五三一—五四〇

〇太宋の南征…五三一—〇宋元の攻戰…五三三—〇高麗の降服…五三四—〇波斯の征服…五三

五—〇拔都の西征…五三七—〇欽察汗國の建設…五三九

第四十二章 憲宗の南征 旭烈兀の西征……五四一—五四九

〇大汗嗣立の爭…五四一—〇大理の征服…五四二—〇吐蕃及び交趾の降服…五四四—〇憲宗の

南征…五四五—〇旭烈兀の西征…五四六

第四十三章 世祖の一統及び外征……五五〇—五六一

○宋の滅亡…五五〇—〇元の東侵…五五三—〇緬國の征服…五五七—〇占城安南の征服…五五七—〇爪哇征伐…五五九—〇海外諸蕃の服屬…五五九—〇蒙古大帝國の版圖と其の統治法…五六〇—〇東西の交通…五六一

第四十四章　世祖の治と海都の亂　權臣の專恣……五六二—五七二

○世祖の治…五六二—〇海都の亂…五六三—〇西南夷の征伐…五六六—〇武宗仁宗の更立…五六七—〇權臣の專恣と元室の紛擾…五六八

第四十五章　元末の擾亂と群雄の興起……五七三—五八四

○元室衰亡の原因…五七三—〇群雄の興起と擾亂…五七四—〇朱元璋の强盛…五七八—〇元の內訌…五七九—〇元の滅亡…五八二

第四十六章　諸汗國の盛衰……五八五—六〇〇

○窩濶台汗國…五八五—〇察合台汗國…五八七—〇伊兒汗國…五八九—〇欽察汗國…五九四

第四十七章　元代の高麗及び印度……六〇一—六一一

○高麗と元との關係…六〇一—〇元代の印度…六〇四

第四十八章　元の制度　儒學及び文藝　歐亞の交通及び貿易……六一二—六三一

○元の官制…六一二—〇法制…六一三—〇兵制…六一三—〇學制…六一六—〇元の儒學…六一六—〇元の詩文…六一七—〇元の戲曲及び小說…六一九—〇元の史學…六二一—〇元の科學及び工藝…六二一—〇元の道教…六二三—〇元の喇嘛教…六二四—〇元の回教…六二六—〇元の基督教…六二七—〇音樂と書畫…六二八—〇歐亞の交通及び貿易…六三〇

第四十九章　解說……六三二—六八三

○木華黎…六三二—〇耶律楚材…六三三—〇曲出律…六三三—〇札蘭丁…六三五—〇朮赤…六三六—〇拔都…六三七—〇郝經…六四二—〇張世傑…六四二—〇陸秀夫…六四二—〇文天祥…六四三—〇伯顏…六四三—〇張弘範…六四四—〇劉秉忠…六四四—〇高麗の忠烈王…六四五—〇阿剌罕…六四五—〇阿合馬…六四五—〇阿塔海…六四六—〇海都…六四六—〇合贊汗…六四七—〇月即別汗…六四八—〇趙復…六四八—〇姚樞…六四九—〇許衡…六四九—〇劉因…六四九—〇金履祥…六五〇—〇吳澄…六五〇—〇元好問…六五一—〇趙孟頫…六五一—〇虞集…六五二—〇楊載…六五二—〇范梈…六五三—〇揭傒斯…六五三—〇薩都剌…六五三—〇郭守敬…六五四—〇李治…六五五—〇八思巴…六五五—〇邱處機…六五五—〇プラノ・カルピニ…六五六—〇ルブルク…六五八—〇マルコ・ポロ…六五九—〇モンテ・コルヴィノ…六六一—〇オドリック…六六二—〇マリニョリー…六六三—〇イブン・バッタ…六六四—〇サマルカンド…六六五—〇ウルゲンヂ…六六六—〇寬田吉思海…六六六—〇大和嶺…六六七—〇喀喇和林、和林、黑林…六六七—〇蔡州…六六八—〇薩來…六六八—〇不里阿兒、孛烈兒、馬札兒、涅迷思…六六九—〇鄂州…六六九—〇上都…六六九—〇八吉打…六七〇—〇タブリズ…六七〇—〇厓山…六七〇—〇襄陽…六七一—〇ザイト

ン…六七二―〇ハンバリッグ…六七二―〇フリルタイ…六七二―〇金帳、白帳、青帳…六七三―
〇木剌夷…六七三―〇蒙古文字…六七六―〇書籍の印刷と活版術…六七七―〇交鈔…六七九―
〇色目人…六七九―〇漢人、南人、蠻子…六八〇―〇高麗の儒學文藝及び佛教…六八〇―〇蒙
古時代に於ける波斯の文藝…六八二

第二期　明の太祖の一統より滅亡に至る

第五十章　明の太祖の一統　成祖の遠略……六八四―六九九
〇明の太祖の一統…六八四―〇太祖の治績…六八七―〇明初の封建…六八八―〇胡藍の獄…六
八九…〇靖難の役…六九一―〇安南の征服…六九三―〇南海諸國の朝貢…六九五―〇成祖の北
伐…六九八

第五十一章　高麗朝鮮の興亡　元末明初の倭寇……七〇〇―七一二
〇高麗の衰微…七〇〇―〇高麗と北元及び明との關係…七〇一―〇高麗の滅亡…七〇三―〇朝
鮮の興起…七〇六―〇太祖及び太宗の業…七〇七―〇高麗朝鮮の倭寇…七〇八―〇明初の倭寇
…七一〇

第五十二章　帖木兒朝の興亡……七一三―七二五
〇帖木兒の興起…七一三―〇中西兩亞細亞及び伊兒干國の征服…七一三―〇歛察汗國の征服…
七一四―〇印度侵掠…七一六―〇オスマンリ土耳古の擊破…七一七―〇支那征伐の企圖…七一
九―〇帖木兒の治績…七一九―〇帖木兒朝の分裂…七二一

第五十三章　明の中世　邊境の寇……七二六―七四二
〇漢王高煦の叛と宣宗の治…七二六―〇瓦剌の入寇と土木の變…七二
八―〇英宗の復位と宦官俊倖の跋扈…七三〇―〇孝宗の治と朝政の紊亂…七三二―〇大禮の儀
…七三六―〇哈密の興復…七三七―〇韃靼の分裂と小王子の入寇…七三八―〇俺答の入寇…七
四〇

第五十四章　交趾の叛服　倭寇の盛衰……七四三―七五二
〇大越の形勢…七四三―〇緬甸の形勢…七四六―〇暹羅の形勢…七四八―〇日明の交通…七四
九―〇倭寇の盛衰…七五〇

第五十五章　萬曆朝鮮の役　滿洲の興起……七五三―七六二
〇明及び朝鮮の疲弊…七五三―〇第一朝鮮の役…七五四―〇第二朝鮮の役…七五六―〇朝鮮役
の結果…七五七―〇清の太祖の創業…七五八

第五十六章　明の衰亡……七六三―七七三
〇東林の黨議…七六三―〇魏忠賢の橫暴…七六六―〇礦稅の害と叛徒の蜂起…七六八―〇張獻
忠李自成の蜂起…七六八―〇明の滅亡…七七〇―〇清の太宗及び世祖の侵略…七七一

第五十七章　明代の文化　外國交通及び通商……七七四―七八八
〇明の官制…七七四―〇明の兵制…七七五―〇明の稅制及び役法…七七六―〇明の法制…七七

七一〇明の選擧制…七七八一〇明の學制…七七九一〇明の詩文…七八〇
一〇明の小說と戲曲…七八一一〇明の史學及び科學…七八二一〇明の佛
敎…七八三一〇明の道敎…七八三一〇明の喇嘛敎…七八四一〇明の基督敎…七八五一〇明の工
藝…七八六一〇明の外國交通及び通商…七八七

第五十八章　莫臥兒朝の興亡……七八九—七九七

○バベルの創業…七八九一〇フマユンとスル朝…七九〇一〇アクバル大帝の業…七九一一〇莫
臥兒帝國の盛衰…七九三一〇波斯と印度…七九五

第五十九章　葡萄牙西班牙の東略　天主敎の東流……七九八—八〇六

○葡萄牙人の東洋航路發見…七九八一〇西南印度の侵略…七九九一〇印度總督の設置…八〇〇
一〇支那及日本との通商…八〇二一〇西班牙人の東略…八〇四一〇天主敎の東流…八〇四

第六十章　解　說……八〇七—八三六

○徐達…八〇七一〇湯和…八〇七一〇常遇春…八〇八一〇傅友德…八〇八一〇沐英…八〇八一
○齊泰…八〇八一〇黃子澄…八〇九一〇方孝孺…八〇九一〇鄭夢周…八一〇一〇アンゴラ…八
一一一〇夏原吉…八一二一〇楊榮…八一二一〇楊士奇…八一三一〇楊溥…八一三一〇于謙…八
一三一〇胡宗憲…八一四一〇兪大猷…八一五一〇戚繼光…八一五一〇勘合印信…八一五一〇李
舜臣…八一六一〇李如松…八一八一〇楊鎬…八一八一〇袁崇煥…八一八一〇張居正…八一九一
〇顧憲成…八一九一〇高攀龍…八二〇一〇鄒元標…八二〇一〇趙南星…八二一一〇葉向高…八
二一一〇楊漣…八二二一〇左光斗…八二三一〇閹賊…八二三一〇碧蹄館…八二三一〇八股文…
八二三一〇薛瑄…八二四一〇吳與弼…八二四一〇胡居仁…八二四一〇陳獻章…八二五一〇王陽
明…八二五一〇宋濂…八二六一〇王禕…八二七一〇劉基…八二七一〇高啓…八二七一〇李東陽
…八二八一〇李夢陽…八二八一〇何景明…八二九一〇徐禎卿…八二九一〇李攀龍…八二九一〇
王世貞…八三〇一〇歸有光…八三〇一〇沈周…八三〇一〇文徵明…八三一一〇董其昌…八三一
一〇利瑪竇…八三一一〇龍華民…八三三一〇 湯若望…八三三一〇 耶蘇會…八三四一〇バニバ
ト…八三五一〇ゴア…八三六

第四篇　近世史

第一期　清の一統より英吉利佛蘭西の北清征伐に至る……八三七—八四八

第六十一章　清の一統　聖祖高宗の業……八三七—八四八

○世祖の一統　奠都…八三七一〇聖祖の業…八三八一〇三藩の平定…八三九一〇台灣の征服…
八四〇一〇尼布楚條約の締結…八四〇一〇準噶爾の親征…八四一一〇西藏の鎭定…八四二一〇
世宗の西北征伐…八四三一〇高宗の業…八四三一〇金川準噶爾回部…八四四一〇緬甸暹羅…八
四五一〇安南…八四七一〇廓爾喀台灣…八四八一〇衰替の徵…八四八

第六十二章　清人の學說　文藝　制度……八四九—九六五

○考證學起る…八四九一〇聖祖高宗の奬學…八四九一〇詩文…八五一一〇清の小說戲曲…八五

二一〇清の史學…八五四—〇清の科學…八五四—〇清の書畫…八五五—〇清の宗教…八五六—
〇清の中央政府官制…八五九—〇清の地方官制…八六一—〇清の兵制…八六二—〇清の學制…
八六三—〇清の稅制…八六四—〇清の法制…八六四

第六十三章　東洋に於ける和蘭、英吉利、佛蘭西の競爭　英領印度の建設……八六六—八七二

〇和蘭の經略…八六六—〇英吉利の經略…八六七—〇印度に於ける佛蘭西殖民地の建設…八六
八—〇印度に於ける英佛の競爭…八七〇—〇英領印度の建設…八七二

第六十四章　清朝衰勢の兆　白蓮教匪　苗匪　海盜の諸亂　回部の亂……八七四—八八一

〇清朝衰勢の兆…八七四—〇苗匪…八七四—〇教匪の亂…八七五—〇海寇の亂…八七八—〇回
部の亂…八八〇

第六十五章　鴉片戰爭　長髮賊の亂　英吉利佛蘭西の北淸侵伐……八八二—八九五

〇鴉片貿易と英淸の交涉…八八二—〇鴉片戰爭の顚末…八八五—〇長髮賊の亂起る…八八九—
〇長髮賊の平定…八九一—〇アロー號事件…八九二—〇英佛の北淸侵伐…八九四

第六十六章　解　說……八九六—九六四

〇史可法…八九六—〇劉宗周…八九七—〇鄭芝龍…八九八—〇鄭成功…八九九—〇睿親王多爾
袞…九〇一—〇吳三桂…九〇二—〇孔有德…九〇三—〇彭春…九〇四—〇薩布素…九〇四—〇
索額圖…九〇五—〇ボヤルコフ…九〇五—〇ハバロッフ…九〇六—〇トルブジン…九〇七—〇
ゴロヴィン…九〇七—〇噶爾丹…九〇八—〇噶爾丹策零…九〇九—〇阿睦爾撒納…九一〇—〇岳鍾琪…九一一—〇傅恒…九一一—〇帳廷玉…九一一—〇阿桂…九一二—〇兆惠…九一二—〇明瑞…九一三—〇アラウン・パヤ…九一三—〇コンスタンチン・ファウルコン…九一四—〇鄭昭…九一五—〇阮文惠…九一六—〇ゼーランヂア…九一七—〇ブロヴィデンチア…九一七—〇サン・ドミンゴ九一七—〇アルバジン…九一八—〇清の中央政府官制…九一八—〇閻若璩…九二四—〇胡渭…九二四—〇毛奇齡…九二四—〇李光地…九二五—〇惠棟…九二五—〇戴震…九二五—〇錢大昕…九二六—〇段玉裁…九二六—〇王念孫…九二七—〇王引之…九二七—〇阮元…九二七—〇朱彝尊…九二七—〇崔述…九二八—〇紀昀…九二八—〇侯方域…九二九—〇魏禧…九二九—〇汪琬…九二九—〇錢謙益…九二九—〇吳偉業…九三〇—〇王士禎…九三〇—〇查愼行…九三〇—〇趙執信…九三一—〇施閏章…九三一—〇宋琬…九三一—〇沈德潛…九三一—〇趙翼…九三二—〇袁枚…九三三—〇李漁…九三三—〇金聖歎…九三三—〇王鳴盛…九三四—〇顧祖禹…九三四—〇梅文鼎…九三四—〇王時敏…九三四—〇王鞏…九三五—〇惲恪…九三五—〇滿洲八旗…九三五—〇四庫全庫九三六—〇ヤン・フィダン・ファン・リンスコーテン…九三七—〇ロバート・クライヴ…九三八—〇ワーレン・ヘスチングス…九四〇—〇英吉利東印度會社…九四一—〇バタヴィア…九四二—〇ブラッシー…九四二—〇アルコットの戰…九四三—〇バクサル…九四四—〇淸室の內訌…九四四—〇額勒登保…九五五…〇德楞泰…九四六—〇畢沅…九四六—〇楊遇春…九四七—〇李長庚…九四七—〇長齡…九四八—〇伊里布…九四九—〇サー・ヘンリー・ポッチンヂァー…九四九—〇洪秀全…九五〇—〇楊秀淸…九五一—〇石達開…九五二—〇曾國藩…九五二—〇李鴻章…九五三—〇左宗棠…九五五—〇曾格林

沁…九五六—〇捻匪の亂…九五六—〇ワード…九五八—〇バーゼヴイン…九五八—〇ゴルドン…九五九—〇エルジン伯…九六〇—〇バークス…九六一—〇シーマウル…九六一—〇南京條約…九六二—〇天津條約…九六二—〇北京條約…九六三—〇香港…九六四—〇太沽…九六四

第二期　露國の東方侵略より世界大戰の終結に至る

第六十七章　露國の東方侵略　清露の關係　英露の衝突……九六五—九七七

〇露國の東方侵略…九六五—〇清露の關係…九六七—〇日露の交渉…九六九—〇新疆の亂と伊犂事件…九七〇—〇露西亞の中央亞細亞經路…九七三—〇英露と波斯の關係…九七三—〇英露と亞富汗斯坦との關係…九七四—〇英領印度の固定…九七六

第六十八章　安南、暹羅、緬甸　清佛の交戰……九七八—九八四

〇安南の一統…九七八—〇暹羅、安南、柬埔寨の關係…九七八—〇安南佛蘭西の交涉…九七九
〇安南佛蘭西の交戰…九八〇—〇清佛蘭西の交戰…九八一—〇英吉利の緬甸併呑…九八二—〇暹羅と英佛の關係…九八三

第六十九章　日清鮮の關係　日清戰役　日露と朝鮮の關係……九八五—九九六

〇朝鮮の國情…九八五—〇基督敎徒の迫害と米佛軍艦の來襲…九八六—〇日本と朝鮮との關係…九八七—〇琉球問題と台灣事件…九八八—〇朝鮮の變亂…九八九—〇日清戰役…九九一—〇日露と朝鮮の關係…九九四—〇列國の清國壓迫と利權獲得…九九五

第七十章　北清事變　日露戰爭……九九七—一〇〇八

〇北清事變…九九七—〇露西亞の滿洲占領…九九九—〇日英同盟の締結…一〇〇一—〇日露戰役…一〇〇三—〇日英同盟の擴張と日佛及び日露協商…一〇〇六

第七十一章　日本の韓國併合　清朝の滅亡　世界大戰……一〇〇九—一〇二四

〇日本の韓國保護…一〇〇九—〇日韓協約…一〇〇九—〇日本の韓國併合…一〇一一—〇日本の朝鮮統治…一〇一三—〇清朝の滅亡…一〇一五—〇中華民國の建設…一〇一七—〇世界大戰と日獨開戰…一〇一七—〇青島陷落後の日支交涉…一〇二〇—〇日本西伯利亞出兵…一〇二一—〇戰亂終結と講話成立…一〇二三

第七十二章　解　說……一〇二五—一〇三六

〇ムラヴィエフの事業…一〇二五—〇イグナチエフ…一〇二五—〇阿古拍伯克…一〇二六—〇曾紀澤…一〇二七—〇カウフマン…一〇二八—〇スコベレッフ…一〇二八—〇ドスト・モハメッド…一〇二八—〇シェル・アリ…一〇三〇—〇アブゾル・ラーマン…一〇三〇—〇アガ・モハメッド…一〇三一—〇タルフージー侯…一〇三一—〇阮福暎…一〇三一—〇カイバル越…一〇三一—〇ビニヤウ・ド・ベエーヌ…一〇三二—〇クールベー…一〇三二—〇ファヤ・チャクリ…一〇三四—〇チャラロンコルン…一〇三四—〇劉永福…一〇三五—〇諒山…一〇三五

諸表

○蒙古領土擴張表…五六〇—五六一—〇明初封建表…六八九—〇鄭和の出使航海表…六九七—
○鄭和の歴訪地表…六九七—〇二十四史…八五〇—八五一

系譜

○西夏の王系…五三〇—〇金の帝系…五三三—〇南詔及び大理の王系…五四三—五四四—〇宋
の帝系…五五二—五五三—〇元の帝系…五八二—五八三—〇蒙古諸汗系統…五八三—五八四—
○窩濶台汗世系…五八六…〇察合台汗世系…五八八—五八九—〇伊兒汗世系…五九四—〇欽察
汗世系…五九八—六〇〇—〇奴隷王朝世系…六〇六—〇キルジ朝世系…六〇九—〇ツグラク朝
世系…六一一—〇安南の王系…六九五—〇高麗の王系…七〇四—七〇六—〇帖木兒朝の世系…
七二四—七二五—〇韃靼(北元)汗世系七四一—七四二—〇大越の王系…七四五—七四六—〇莫
氏の世系七四六—〇愛新覺羅氏世系…七六〇—〇明の帝系…七七〇—七七一—〇スル朝世系…
七九一—〇莫臥兒朝の世系…七九五—七九七—〇準噶爾汗世系…八四二—〇緬甸の王系…八四
六—〇大越鄭氏王系…八四七—〇—廣南王系…八四七—八四八—〇暹羅の王系…〇九八四—〇
朝鮮王系…一〇一三—一〇一五—〇清の帝系…一〇一六—一〇一七

地圖

第十圖 南宋金夏元疆域圖 拔都行軍略圖 成吉思汗及窩濶台支那行軍略圖……五三〇…五三一
第十一圖 蒙古大帝國(西紀十三四世紀)……五六一…五六二
第十二圖 明代亞細亞(西紀十五六世紀)……六九九…七〇〇
第十三圖 帖木兒帝國圖……七二五…七二六
第十四圖 第十七世紀の亞細亞(清朝初期)……八三六…八三七
第十五圖 第十八世紀の亞細亞(清朝隆盛時代)……八四八…八四九
第十六圖 現代亞細亞(西紀二十世紀初期)……九九七…一〇〇八

附錄

一、東洋歷史詳解年表……一——三七

東洋歷史詳解

第三篇 近古史

第一期 蒙古の勃興より元の滅亡に至る

第四十章 蒙古の勃興 元の太祖の征伐

蒙古の勃興 **蒙古の起原** 蒙古（Mongol）は唐の世契丹の北に散處せし室韋諸部の一なる蒙兀（Monggol）兩河の源なる不兒罕（Bulkhan 今の肯特山の一支必爾喀嶺）山の邊の後にして斡難（Onon）、怯綠連（Kerulen）兩河の間に遊牧し、世々遼金に隷屬せしが、其の部酋合不勒（Khabuluk）の時金の撻懶の遺族を助けて兀朮の軍を破り、西紀一一四四年金と和し始めて汗と稱し、其の子孫は乞顏（Kiyan）氏といへり。

其の勃興 合不勒の孫也速該（Yesugay）に至り傍近の諸部を併呑して頗る強大となりしが、後塔

塔兒（Tartar）部の殺す所となり、諸子皆幼なるを以て部衆皆離散し、其の支族泰赤烏（Taijut）部に附くもの多し。然るに也速該の妻月倫（Hoelun）賢にして勇あり、長子鐵木眞（Temutchin）を立てゝ其の部衆の一半を歸服せしめたり。鐵木眞十三歳にして嗣立し長ずるに及びて雄才大略あり、深く其の部下を愛し厚く勳功を賞せしかば、名聲日に熾にして來り從ふもの漸く多く兵勢また頗る振へり。**傍近諸部族の征服**　當時蒙古部の近隣には塔塔兒、泰赤烏、扎只剌（Jajerat）、乃蠻（Naiman）、蔑里乞（Merkit）、克列（Kerait）等の諸部あり、就中強盛なるものは塔塔兒、克烈、乃蠻の三部にして塔塔兒は北境に逼まり、克烈は南境に據り、乃蠻は西境に接し、鐵木眞は其の中央にありて未だ志を得ざりしが、既にして鐵木眞先づ強敵泰赤烏を破るに及び、微弱なる諸部族は其の威に恐れて來り降るに至れり。後塔塔兒の金に叛くや金は兵を發して之を討ち、且つ近隣の諸部族に命じ兵を率ゐて來り會せしむ、鐵木眞乃ち兵を發して金軍に會し大に塔塔兒を破りしかば、金は鐵木眞を察兀禿魯（Chautorum 招討使の義）に任じぬ。會〻克烈部長汪罕（Wangkhan）其の弟に逐はれて流寓せしに、鐵木眞之を憐み助けて汗位に復せしめ、共に締盟して西紀一一九六年蔑里乞を襲破し、次で乃蠻の內訌に乘じて兵を加へ、また西紀一二〇二年塔塔兒を伐て大に之を破れり。是に於て諸部族多く鐵木眞に歸し、西紀一二〇三年之を推して蒙古部長となし

成吉思汗（Chingiskhan）と號す、蓋し強大なる君主の義なり。時に乃蠻及び衛拉特（Werat）の二部塔塔兒と同盟して力を協せ、成吉思汗を襲はんと謀りて軍を進めしが、機を失ひ利あらずして歸りぬ。**內外蒙古の統一**　既にして汪罕成吉思汗の强盛を嫉みて隙を生じ之を襲ひしが、成吉思汗親から兵に將として克烈を伐ち大に之を破れり。然るに乃蠻部長太陽汗（Tayan Khan）も また成吉思汗の勢益〻盛なるを憂ひ、衛拉特及び蔑里乞の餘衆を糾合し遙に塔塔兒と結びて之を夾擊せんとせしが、成吉思汗機先を制して西紀一二〇四年杭海山（Khangai 杭愛山）に逆擊し、大に之を破りて太陽汗を擒殺せしかば、其の子曲出律（Khuchluk）は蔑里乞部長脫脫（Tukhta）と共に遠く西に遁走しぬ。是に於て成吉思汗は塔塔兒を伐て悉く其の部族を服し、殆ど內外蒙古の地を併合するに至りしかば、更に西紀一二〇五年西夏を襲ひ其の財貨を掠奪して還るや、諸部の君長を斡難河の源に招集して大聚會（Kuriltai フリルタイ）を開き、九旒の白旗を樹てゝ大汗の位に卽く、之を元の太祖となす、時に年四十五、實に西紀一二〇六年十二月なり。

太祖の南征　**西夏の降服**　太祖曩に西夏を伐ち其の北邊の力吉里寨（ラクリ）、經落思城（タルス）等を抜き、大に財貨を掠めて還りしが、既にして西夏は其の主李純祐從弟李安全に廢せられ、安全自立して國亂れしかば太祖此の機に乘じて屢〻西夏を襲ひ、西紀一二〇九年遂に靈州に侵入するや安全大に

恐れ其の女を納れて降を請へり。是に於て畏兀兒(Uigur)、柯耳魯(Karluk)の二部もまた風を望んで來り服し、天山附近より伊犂(Ili)河流域一帶の地悉く蒙古の版圖に入りければ、太祖更に全力を盡くして金に向へり。**金の衰運と蒙古の侵寇**　時に金は章宗既に死して其の叔父允濟立ちしも柔弱にして將士の心を失ひ、西北諸州は皆蒙古に降り山東また盜賊蜂起して國勢大に衰ふ。是に於て太祖は西紀一二一〇年兵を進めて直隸、山西を席捲し長驅して居庸關に逼まり、次で將を遣はして遼東を取り親ら西京(大同府)を攻めしが拔く能はず、西紀一二一一年また攻めて紫荊關を破り古北口を取り、遂に居庸關を拔きて燕京に逼まりければ、金の大臣胡沙虎等其の主允濟を弑して章宗の庶兄宣宗を擁立し、蒙古軍を拒がんとせしが兵勢挫折して如何ともする能はず、太祖乃ち燕京を圍み悉く河北河東九十餘郡を下して金帛子女牛羊馬畜を掠む。宣宗窮蹙爲す所を知らず遂に允濟の女及び童男女金帛各〻五百、馬三千を納れて和を請ひ、太祖之を諾して居庸關を出で虜にせる所の男女數十萬人を殺して北に還りぬ。**金の南遷**　然るに宣宗は燕京の蒙古に近く且つ兵弱く財乏しきを以て之を守る能はざるを知り、群議を排して都を汴京に遷せしかば太祖は己れを疑ふものとなし、また南侵を圖り明安(Mingan)を遣はして燕京を圍ましめ、西紀一二一五年之を陷れて守將完顏承暉を殺し宮室を燒き人民を殺戮せり。此の役遼の遺族にして金に仕へし耶律楚材

蒙古に降り、是より任用せられて太祖を輔け贊畫せる所頗る多し。太祖更に撒沒哈(Samukha)をして西方より潼關を攻めしめしも拔く能はず、乃ち關南より汝州に出でゝ汴京の近傍に進み戰利あらずして退きしが、黃河以北の地は悉く蒙古に沒するに至れり。**木華黎金を伐つ**　時に金主和を請ひしが議遂に成らず、會〻蒙古に內亂起りければ太祖は北に還りて蔑里乞を驅逐し、禿馬特(Tumat)及び吉里吉思(Kirgiz)等の諸部を鎭撫し次で西征の議を決せしかば木華黎(Mukhali)を遼東より召還して王爵を授け、征金の都督となして併略を完うせんことを託し、親ら大軍を率ゐて西征の途に上りぬ。此の間金は蒙古軍の退くに乘じて河北の地を復せしが、西紀一二一七年木華黎また來り侵して之を略し、宣宗使を遣はして和を請ふを聽かず遂に濟南に入りて東平を陷れ河を渡りて西し、西夏の兵五萬を率ゐて延安を攻め鄜延等を侵し、是より後數年戰爭絕えざりしが西紀一二二三年木華黎死するに及び侵寇暫く中止せり。

太祖の西征　**西遼の故地を併す**　太祖の乃蠻を滅ぼすや太陽汗の子曲出律は蔑里乞部長脫脫と共に也兒的石(Irtysh)河上に奔り、後共に東して蒙古を擊ちしが太祖の破る所となり、脫脫は戰死し曲出律は遁れて西遼に投ぜり。西遼の主直魯克曲出律を納れて之を款待し、妻はすに其の女を以てし國政に與からしめしに、西遼は既に衰微して羈屬往々叛くものありしかば、曲出律

密に花剌子模王ムハメッドと謀りて内外相應じ、西紀一二一一年直魯克の出獵せるを窺ひ兵八千を伏せて之を擒にし、シール河を界として西遼の地を分割しぬ。是に於て曲出律父の讐を報せんと欲し、蒙古が金を伐ちて西顧の遑なきに乗じ、柯耳魯を破り畏兀兒を伐ち進んで蒙古の虚を衝かんとせしかば、太祖は哲別（Chebe）を遣はして之を擊破し、曲出律奔りて巴答哈傷（Badakhshan）に至り殺され、西遼の故地は蒙古に入りて遂に花剌子模と境を接するに至れり。**花剌子模の盛衰**　花剌子模王ムハメッドは曲出律に應じ西遼を滅ぼしてシール河以南の地を取り、次でトランス・オクサナを襲うて其の主オスマン（Osman）を殺し、撒麻耳干（Samarkand）を奪ひて茲に都し、更にゴール朝の内亂に乗じて阿富汗斯坦に入り、西紀一二一五年全く之を平定せしかば其の版圖東は印度河より西はカスピ海に至り、北はシール河より南は波斯灣に達しぬ。會〻八吉打の哈利發ナシル・ウッヂン自己の權威を強めんと欲し、ゴール朝に勸めて花剌子模を夾擊せんとして果さず、ムハメッドはゴールを陷れし時其の文書を發見して大に怒り、西紀一二一七年哈利發を廢立せんとし親ら兵を率ゐて八吉打に進みしが、途にして大雪に苦しみまた土寇興るに遭ひ志を達する能はずして還り兵氣大に沮喪せり。加ふるに當時花剌子模の國内には宗派の爭絶えず　して統一を缺き、またムハメッドの母ツルカン可敦（Turkan Khaton）はカスピ海の東北岸に住

める土耳古族の康里（Kanli）部の人にして權を專にし、多く同鄉の人士を任用せしかばムハメッドの勢威頗る徴にして國内爲めに統一を缺けり。**太祖の花剌子模討滅**　蒙古と花剌子模と境を接するに及び太祖花剌子模を取る志あり、會〻蒙古の隊商訛打剌（Otrar）に至りて其の知事に殺され財物を掠めらる、太祖乃ち使を花剌子模に遣はして詰問せしめしに、ムハメッド其の一人を斬り一人を凌辱しぬ。是に於て太祖は西征の議を決し木華黎に命じて金の征伐に當らしめ、西紀一二一八年親ら大軍を率ゐ其の四子朮赤（Juchi）、察合台（Chagatai）、窩濶台（Ogotai）、拖雷（Tului）及び將軍哲別、速不台（Subtai）等と共に西征の途に上り、也兒的石河源の地より阿力麻里（Almalik）に至りて畏兀兒及び柯耳魯の衆を併せ、西紀一二一九年の末訛打剌に達して花剌子模の境に入り、是より全軍を四分して進み、到る處を侵掠して西紀一二二〇年不花剌を陷れ、次で撒麻耳干を陷れて掠奪と破壞とを極めたり。是より先きムハメッドは蒙古軍のトランス・オクサナに入れるを聞きて呼羅珊（Korassan）に遁れ巴里黑（Balk）にありしが、哲別、速不台の追躡に遭ひ八吉打に逃れんとして得ず、遂にカスピ海の一孤島に遁れ西紀一二二一年二月病んで死せり。ムハメッドの長子札蘭丁（Jelal ud-din）曩に哥疾寧に遁れ兵を募りて恢復を謀り、蒙古の前軍を破りしが太祖の來り伐つを聞き退て印度河畔に陣す、太祖乃ち追擊して之を破りければ札蘭丁遂に印度

河を渡りて遁れ、デリーに入りて奴隷王朝の主アルタムシ（Altamish）に賴れり。太祖更に八剌（Bela）をして之を追はしめしに、暑氣烈しきを以て引き還りしかば印度河に沿うて軍を旋し、吐蕃を經て蒙古に還らんとせしが道路の險難を以て更に不花剌に向ひ、西紀一二二三年撒麻耳干に達し翌年歸途に就きて西紀一二二五年蒙古に歸りぬ。**蒙古軍の露西亞侵入**　此の間哲別、速不台の二將はムハメッドを追躡して寛田吉思海（カスピ海）の西岸に至り西伯利亞（Siberia）の西南部に住する土耳古族の一派欽察（Kipchak）部が曩に蔑里乞の餘衆を納れたるに報いんと欲し、大和嶺（高加索山）を踰えて之を伐つや、欽察大に驚きて援を斡羅思（Oros 露西亞）の諸侯に請ふ。是に於て乞瓦（Kiev）の太公密赤思老（Mistislav）等南露西亞の諸侯連合して欽察を助け、蒙古軍を阿里加（Kalka）河畔に邀へ擊ちしが、二將大に之を破り附近の地方を劫掠してドニエプル（Dnieper）河に至り、更に流を下りてクリミア（Crimea）に入り、次で不里阿兒（Bulgar）を擊破して軍を旋し、カスピ海北岸の河速（Asi）及び東北岸の康里を平らげて西紀一二二四年東に歸れり。

子弟の分封　太祖既に西域を定むるや其の大領土を子弟に分與し、（一）長子朮赤に康里欽察等諸部の地即ち露西亞の南より今の吉利吉思曠原に至る一帶の地を與へ、（二）次子察合台に畏兀兒よりアム河に至る西遼の故地を與へ、（三）第三子窩濶台に杭愛山より阿爾泰山に至る乃蠻の故地を與へ、第四子拖雷に蒙古本土を與へ、（四）蒙古の東南より女眞の地に至るまでは四弟に分與し、（五）支那に於ける領地とアム河より西南の地とは封王を置かずして達魯花赤（Darugachi）即ち斷事官に管轄せしめたり。

宋金西夏の形勢　三國の關係　西夏はもと金に臣服せるを以て蒙古の侵伐を受くるや、援を金に請ひしに應ぜざりしかば蒙古に降り、金を怨んで屢〻其の西邊を侵しぬ。時に金は蒙古に破られ西夏の侵寇を受けて國勢全く衰へけれども、宋は之に乘じて既約の歲幣を納めざるに至れり。然るに金の宣宗は元の太祖西征の虛に乘じ、兵を南方に出し宋を伐て勝たず、次で宣宗死し其の子哀宗立ち使を宋に遣はして和を請ひ、また西夏と兄弟の約を結びて漸く平和を保ちぬ。此の間宋は金と戰ひて互に勝敗あり、三邊歲として騷擾せざることなく、內は史彌遠政を專にして國勢大に衰へしが、西紀一二二四年寧宗死するやまた太宗十世の孫理宗を擁立して威を振へり。**西夏の滅亡**　西紀一二二五年元の太祖西征より還り二年を經てまた西夏を伐つ、時に西夏は宋金の加盟を恃み外備を設けざりしかば、靈州忽ち陷り其の主李德旺憂憤して死し、姪李峴嗣ぎ力守すること二ケ月にして遂に出で降る、西夏は李元昊帝と稱せしより十主百九十六年にして亡び、其の

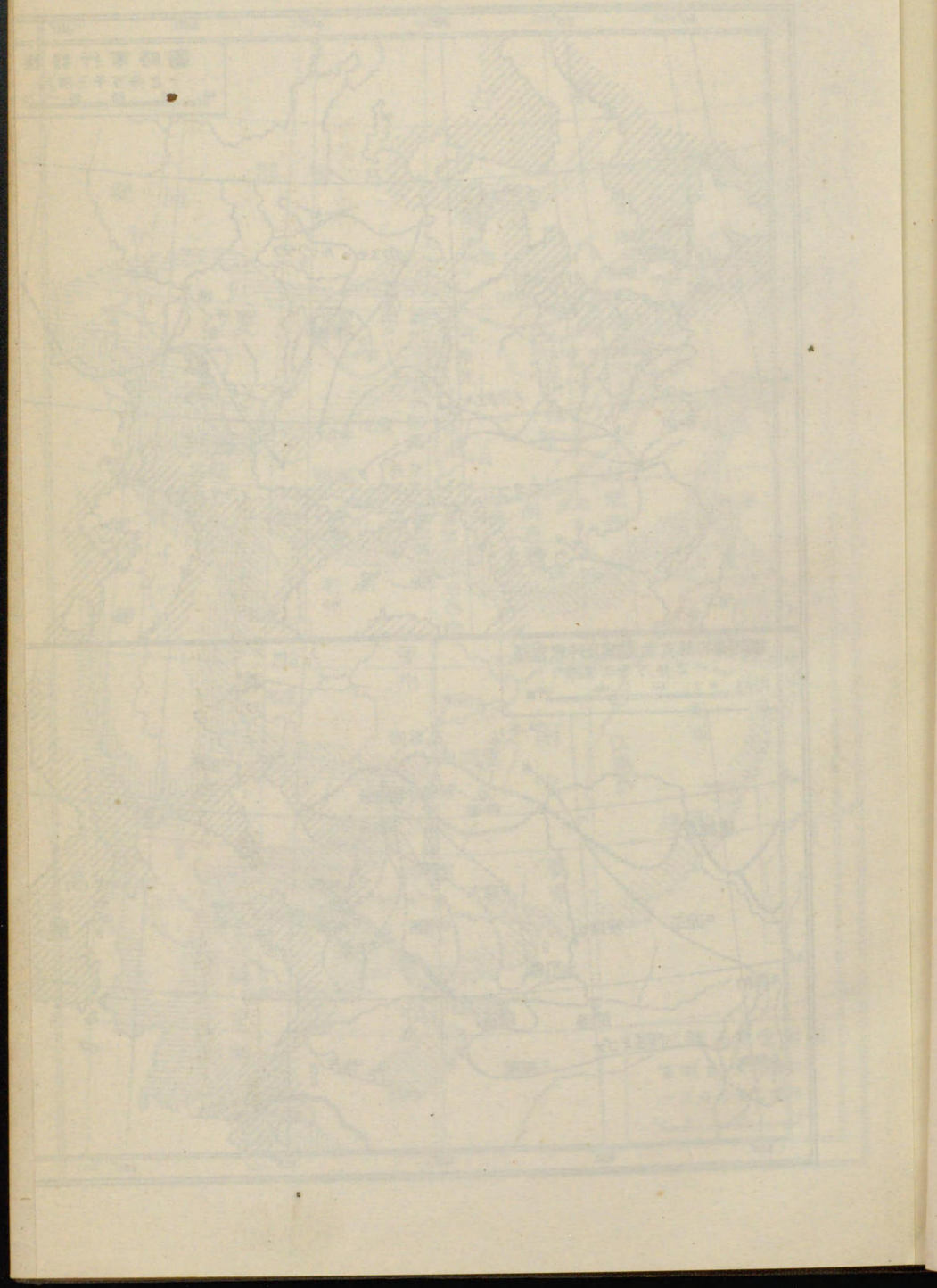
地悉く蒙古に入る、時に西紀一二二七年なり。是に於て太祖また金を滅ぼさんと欲し、西方より汴京に向はんとせしが、途にして病に罹り六盤山（甘肅省平涼府固原州西）に死す、時に年六十六、群臣喪を奉じて還り怯綠連河の源に葬れり（西紀一二二七年）。

西夏の王系

拓跋思恭　仁福（思恭の族）……李繼捧（仁福四世の孫）

拓跋思忠……太祖李繼遷（思忠四世の孫）―太宗德明―

1 景宗元昊 一〇三二
2 毅宗諒祚 一〇四九
3 惠宗秉常 一〇六九
4 崇宗乾順 一〇八七
5 仁宗仁孝 一一三九
6 桓宗繼祐 一一九四
7 哀宗安全 一二〇六
8 神宗遵頊 一二一一
某―彦宗―
獻宗德旺 一二三
清平郡王―南平王峴 一二三七
10



第十圖

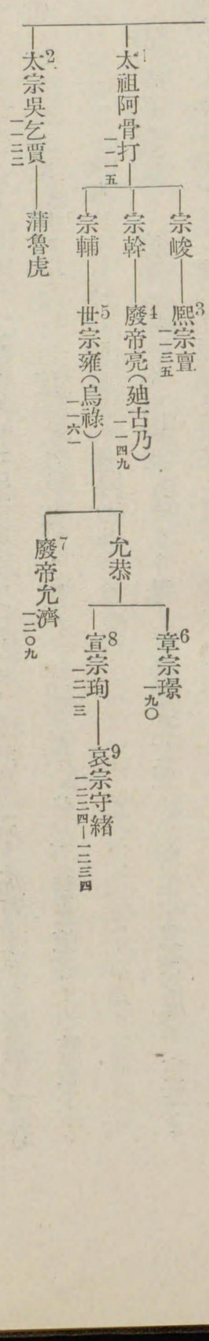
崇宗乾順 一〇八七
越王仁友 7 哀宗安全 一二〇六
某 彥宗 8 神宗遵頊 一二二一
獻宗德旺 一二二三
清平郡王 10 南平王峴 一二三七

第四十一章　太宗の南征　拔都の西征

太宗の南征　**太宗の即位**　太宗名は窩濶台、太祖の第三子なり。蒙古には大聚會（フリルタイ）ありて大汗を選定する規定なりしかば、太祖の諸子中には定まりたる儲嗣なく、唯太祖は最も窩濶台を愛して之を立てんと欲する意志を顯はしたるのみなりしが、太祖の死後二年拖雷諸王諸將を怯綠連河の源に集めて大聚會を開き、窩濶台を奉じて太汗の位に卽かしむ、之を元の太宗となす、時に西紀一二二九年なり、次で西紀一二三五年斡兒垣（Orkhon）河の西なる和林卽ち喀喇和林（Karakorum）に都を奠む。**金を討つ**　太宗既に位に卽き太祖の遺志を紹ぎ、金を滅ぼさんと欲し、西紀一二三〇年弟拖雷と共に兵を率ゐて陝西に入り鳳翔を下しぬ。初め太祖死するに臨み遺命して曰く、「金の精兵潼關にあり、南は連山に據り北は大河を限るを以て遽に破り難し、故に道を宋に假るに若くはなし、宋金は互に世襲の敵なり必ずよく我に許さん、則ち兵を唐鄧に下し直に汴京を擣け、汴急なれば必ず兵を潼關に徵さん、然して數萬の衆を以て千里赴き援へば、人馬疲弊して至ると雖も戰ふ能はず、之を破ること必せり」と、此の時また漢中を經て南方より汴京を衝くを勸むるも

のありければ、使を宋に遣はして道を借らんことを求めしに、宋は之を許さずして其の使を殺せり。太宗乃ち拖雷をして河南に向はしめ、西紀一二三二年親ら黄河を渡り速不台をして汴京を圍ましむ。既にして拖雷漢中を略し更に四川の北部を侵して宋の地を取り、次で饒風關を略して漢水の上に陣す。時に金は兵十餘萬を潼關に駐めまた兵十五萬を鄜城に備へて敵に當らしめしが、是に至り兵一萬を潼關に留めて其の餘を汴京に召集せしかば、太宗遂に潼關を取り拖雷また太宗の軍と合して鄜城を攻め、金軍の汴京に向て退くを追撃して之を鐵嶺（河南省陝州盧氏縣北）に屠殺し進んで洛陽を攻む。金の哀宗大に恐れ使を遣はし質を納れて和を請ひ、太宗之を許して北に還りしが、既にして金人蒙古の使者を殺せしかば和また破れたり。**宋元の連盟と金の滅亡**　是に於て蒙古の使王檝宋に至り荊湖の制置使史嵩之により金を夾撃せんことを請ふや、宋の朝臣多く之を賛して復讐をなすべしといひ、趙范其の不可なるを述べしが用ひられず、理宗遂に嵩之に命じて約を結ばしめ、蒙古は金を滅ぼせる後河南の地を還さんことを許しぬ。時に汴京は糧盡き援絶えて危急旦夕に逼まり、哀宗出でゝ歸德に奔りしがまた糧盡きて蔡州（河南省汝寧府）に走れり。此の間洛陽陷り金の守將崔立は遂に汴京を以て降り、金の太后皇后及び皇子は皆蒙古軍に獲られ、次で宋將孟珙は兵四萬を以て蔡州城の東南を圍み、蒙古軍は其の西北を圍めり。哀宗遂に位を宗族完顔承麟に讓りしが、糧盡き城陷るに及び哀宗は自剄して死し承麟は捕斬せらる。金は太祖より是に至るまで九代百二十年にして亡ぶ、時に西紀一二三四年なり。

金の帝系（九代、百二十年）



宋元の攻戰　**宋中原の恢復を圖る**　金の亡ぶるや宋將趙范等之に乘じて北方を恢復せんことを請ひ、朝臣之を非とするものありしが宰相鄭清之其の說を賛せしかば、理宗遂に之を納れ趙范を黄州に移して兵を進めしめ、知廬州全子才に命じ淮西の兵一萬を合せて汴京に赴かしむ。既

にして金の故將李伯淵等崔立を殺し汴京を以て宋に降りければ、宋軍汴京に入り次で洛陽に赴きしに蒙古の守兵之を避けて去り宋軍また洛陽に入りしが、糧食足らず且つ蒙古軍の來るを聞きて遁れ歸れり。**元宋を侵す**　是に於て元の太宗使を宋に遣はして盟を破れるを責め、次で其の子濶端(Khutan)、曲出(Khutchu)等をして三道より南伐せしめ、曲出及び胡士虎は宋兵を驅逐して江淮に逼まり濶端は四川に入りて連りに宋の州郡を陷れ、宋將孟珙、杜杲、呂文德等よく防戰すと雖も蒙古軍の勢熾にして宋の疆域日に蹙まれり。

高麗の降服　高麗は將軍崔忠獻既に李氏を誅して勢威甚だ強く、神宗、熙宗、康宗、高宗を擁立して權を專にし、其の子崔瑀また父に繼ぎて國政を執り、專橫を極めしかば國民離叛するもの多く、外難相次で起るも遂に禦ぐ能はざるに至れり。**大遼の侵寇**　曩に蒙古の金を伐つや遼の遺族金山、金始の二王子恢復を圖り、大遼攸國王と稱して河朔に據りしが蒙古の伐つ所となりて東に向ひ、衆九萬餘を率ゐて鴨綠江を渡り高麗の北邊を侵掠しぬ。時に高麗の將卒皆老羸にして戰に堪へず賊勢益〻盛なりしが、會〻西紀一二一八年元の太祖其の將哈眞(Hathim)を遣はし蒙古兵一萬東眞(此の時金の宣撫使蒲鮮萬奴遼東に據り東眞と號す)兵二萬と共に來り援け、翌年高麗の將趙冲及び金就礪と兵を合せて契丹兵を伐ち之を降せり。**元高麗を伐つ**　是に於て高麗は蒙古と好を通せしが、西紀一二二五年蒙古の使者歸途鴨綠江を渡て金人の殺す所となるや、蒙古は高麗の之を殺せるを疑ひ太宗位に即くに及び西紀一二三一年撒里台(Saritai)をして之を伐たしめし。高宗大に驚き使を遣はし上表して臣と稱し方物を獻せしめしが、會〻蒙古の過ぐる所殘滅せざるなし。高宗遂に意を決して江華に遷しぬ。會〻蒙古の派遣せる達魯花赤を殺すものあり撒里台之を責むるや、高宗して都を江華に遷しぬ。會〻蒙古の派遣せる達魯花赤を殺すものあり撒里台之を責むるや、高宗遂に意を決して江華の防禦を嚴にし撒里台を射殺せしかば、西紀一二三六年蒙古また唐古をして來り攻めしめ全國兵禍を被ふるに至り、高宗遂に其の族子永寧公綽を王子と稱して禿魯花(蒙古語質子の義)となしまた臣と稱す、時に西紀一二四一年なり。

波斯の征服　**波斯の騷亂**　太祖の西域を定むるや達魯花赤を置きて之を監治せしめ、また其の四子に命じ各〻兵千人を出してアム河以南を駐守せしめしが、蒙古の大軍東に歸るに及び波斯また亂るゝに至れり。是より先き花剌子模王ムハメッドの第三子ギアト・ウッヂン(Giath ud-din)遁れてマザンデラン(Mazanderan)にあり、蒙古軍の去るに乘じ亦思法杭(Ispahan)に入りてイラック・アジェミ(Irak Ajemi)、呼羅珊及びマザンデランを奪ひしが、柔弱にして衆を馭する能はず、曩に印度に遁れたる其の兄札蘭丁の西歸を思ふもの多し。**札蘭丁の西歸**　時に札蘭丁はデリーにありて其の王アルタムシの女を娶りしが、波斯の亂れたるを聞き兵を率ゐて印度河

を渡り、途中多く其の兵を失ひ僅に四千人を率ゐてケルマン（Kerman）に達し、到る處歡迎を受けて遂にイラックに入り、ギアト・ウッヂンを逐ひて其の軍を領しぬ。是に於て先づ哈利發ムスタンシル（Mustansir）を伐て怨を報いんと欲し、西紀一二二五年兵を率ゐ八吉打に逼まりて哈利發の軍を破りしが、北に轉じてタブリズ（Tabriz）を陷れ、次でグルジア（Georgia）に侵入して阿蘭、レスグ（Iesgh）、欽察等諸部を擊破し、翌年亦思法杭に歸り次で撒耳柯思（Cherkes, Circasia）の南部に侵入せしが、蒙古軍の來り伐つを聞きて兵を旋せり。西紀一二二八年蒙古の大軍來りて亦思法杭に逼まるや、札蘭丁奮闘して敗れしが會〻太祖の訃信至り蒙古軍急に退き歸りしかば、哈利發ムスタンシルと和を講じて波斯可汗の尊號を受け、亡父ムハメッドの尸を亦思法杭に迎へて墓を建つ、時に西紀一二三〇年なり。**札蘭丁の敗亡**　時に元の太宗位に即き西域未だ定まらざるを以て綽兒馬罕（Churmagun）に命じ西征せしむるや、札蘭丁援を的迷失吉（Damascus）、アミド（Amid 今のディアルベクル Diardekr）等の諸君長に求めしも得ず、一旦小亞細亞に遁れて蘆眉（Rum）に賴り恢復を圖らんと欲し、途に蒙古軍に會して悉く其の兵を失ひ、クルド（Kurd）の山中に遁れ遂に土人の刺殺する所となる、時に西紀一二三一年なり。是に於て蒙古軍は西進してアミド、メソポタミア（Mesopotamia）、エルビル（Erbil）、ケラト（Khelat）等を攻陷し、次でアゼルバイジャン（Azerbaijan）を討平し、更にグルジア及び大アルメニア（Armenia）に侵入して到る處を蹂躙し、またチフリス（Tiflis）、カルス（Kars）を陷れて殺掠を極め、西紀一二三六年に至り全くアム河以西の地を平定せり。

拔都の西征　**西征の理由**　元の太祖の其の子弟親族を封ずるに當り、長子朮赤をアラル海及びカスピ海の北より遠西の地、即ち太祖の所謂蒙古馬蹄の踐み至るまでの地に封ず、故に朮赤の封疆定まらず、亞細亞歐羅巴二洲に於て其の欲する所の地を併呑して玆に其の邦國を起さゞるを得ざりしなり。然るに朮赤はカスピ海の北に遊牧して東に歸らず幾許もなくして死せしかば、太宗は金を滅ぼせる後西紀一二三五年大聚會を開きて宋、高麗、乞失迷耳（Kashmir）、印度の攻伐を議定するや、更に歐羅巴征服の議を決しぬ。**蒙古軍の西征**　是に於て太宗は朮赤の子拔都（Batu）を統帥となし其の兄斡魯朶（Orda）、弟昔班（Shiban）、唐古忒（Tangut）、己の子貴由（Kuyuk）、合丹（Hadan）、弟濶列堅（Kulkan）、孫海都（Kaidu）、察合台の子拜達兒（Baidar）、孫不里（Buri）、拖雷の子蒙哥（Mangu）、撥綽（Bujee）を將となし、速不台を先鋒となして西紀一二三六年二月西征の途に上らしむ。全軍五十萬按台（Altai）山の麓に沿ひて也兒的石河源を過ぎ吉里吉思曠原を經て沿道の諸部族を服し、速不台先づ不里阿兒（Bulgar）を討平し、蒙哥撥綽は欽

察の地に入りて其の別部の酋長八赤蠻（Patchiman）を斬り、ヴォルガ（Volga）河邊の諸部族を下して悉くカスピ海以北を定め、西紀一二三七年冬遂に斡羅思（Oros）即ち露西亞に侵入せり。

歐羅巴侵入　かくて拔都は斡魯朶、別兒哥（Berke）、合丹、不里、濶列堅等の諸將を率ゐて北に向ひ、烈也贊（Riazan）を屠り次でモスコウ（Moscow）を陷れ長驅してウラヂミル（Vladimir）に向へり。ウラヂミル大公ゲオルギイ（George）大に驚き都城を出でゝシッチ（Sitti）河に退きければ、拔都はウラヂミルを陷れ次でシッチ河に進んでゲオルギイと共に其の軍を鏖殺し、更に進んでノヴゴロド（Novgorod）を取り、南に轉じて乞瓦（Kiev）を燒き斡羅思の內地を蹂躙しぬ。是に於て西紀一二四〇年拔都は其の軍を二分し、親ら一軍を率ゐて馬札兒（Magyar）即ち匈牙利に向ひ、拜達兒、海都をして一軍を率ゐて孛烈兒即ち波蘭（Poland）に向はしむ。かくて海都は孛烈兒に侵入して其の都クラカウ（Krakow）を焚掠し、其の王ボレスラフ（Boleslav）を走らして更に涅迷思（Niemitz）即ち獨逸を侵し、シレジア（Silesia）に亂入して到る處を掠略せしかばシレジア侯ハインリッヒ（Heinrich）二世、ミスチスラフ・フォン・オッペルン（Mistislav von Oppeln）、モラヴィア（Moravia）侯ヂーポルド（Diepold）三世の子ボレスラフ（Boleslav）、チュートン（Teuton）騎士團の首領ポッポー・フォン・オステルナ（Poppo von Osterna）等連合して兵二萬を以て蒙古軍を禦ぎしが、蒙古軍は西紀一二四一年四月九日之をリーグニッツ（Liegnitz）の東南ワールスタット（Wahlstadt）に擊破してハインリッヒを斬り、更に東南に轉じてモラヴィアに入り、ボヘミア（Bohemia）王ヴェンチェスラフ（Venceslav）の派遣せるヤロスラフ・フォン・ステルンベルグ（Yaroslav von Sternberg）をオルミュッツ（Olmütz）に攻めて勝たず、退きて馬札兒に向ひ拔都の軍に合せり。此の間拔都は西紀一二四一年馬札兒に侵入し、其の王ベラ（Bela）四世の軍をサヨ（Sayo）河に擊破してベラをダルマチア（Dalmatia）に逐ひ、國都ペスト（Pest）を陷れ禿納（Danube）河を氷渡してグラン（Gran）を屠り、其の別軍は更に墺地利（Austria）に入り、伊太利（Italy）のヴェネチア（Venice）に逼まれり。**蒙古軍の東歸**　是に於て歐羅巴諸國震撼し羅馬法皇グレゴリオ（Gregorio）九世は檄を飛ばして十字軍を起さんとせしが、會〻西紀一二四二年四月太宗の訃信軍中に到りしかば拔都は直に軍を纏め、諸將に凱旋の命を下して東に歸らしめたり。

欽察汗國の建設　太宗の凶聞蒙古の西征軍中に達するや、拔都は諸將に東歸を命じ自ら合丹と軍を合せて東し、斡羅思の南部を過ぎ高加索山北に至りて駐まること數月、欽察の叛者を平らげ、西紀一二四三年春ヴォルガ河畔に至り、諸軍を散遣して征服地を整治し、後ヴォルガ河の

下流薩來（Sarai）に斡耳朶（Orda）即ち帳殿を建てゝ金斡耳朶（SiraOrda）と名づけ、東は吉利吉思曠原より西はカルパト（Karpatia）山に至る地及び南北斡羅思の諸王侯を統治し、亞細亞歐羅巴二洲に跨る大國を領せり、之を金斡耳朶即ち金帳（Golden Horde）國といひ、また欽察の地に居るが故に欽察汗國ともいふ。また拔都の兄斡魯朶はカスピ海の北康里の地に居りて白帳（Ak Orda）と號し、弟昔班（Shiban）はウラル（Ural）河の東に居りて青帳（KoekOrda）と號し、皆金帳の汗に隷屬せり。

第四十二章　憲宗の南征　旭烈兀の西征

大汗嗣立の爭　定宗の即位　初め太宗第三子曲出（Kiuteku）を嗣となせしが、支那の軍中に死せしかば其の子失烈門（Shiramun）を立てんと欲す、然るに西紀一二四一年太宗死するや皇后脫列哥那（Turakina）己の生める貴由（Kuyuk）を西征より迎へ立てんと謀り制を稱すること四年、丞相鎭海を免じて斃倖を用ひ多く太宗の舊人を黜けしかば、耶律楚材は遂に憂を以て死するに至り人心大に動搖しぬ。貴由既に至るに及び后之を立てんと欲し拔都の來るを待ちしが、拔都病に託して至らざりしかば、遂に西紀一二四六年春諸王を會して貴由を立つ、之を定宗となす。**定宗の死**　定宗即位の後數月太后脫列哥那死せしかば斃倖を誅して再び鎭海を丞相となし、西紀一二四七年兵を遣はして高麗を征し、察罕（Chagan）をして宋を伐たしめ、宴只吉帶（Ilchikadai）に命じて波斯を征せしめたり。定宗もと拔都と隙あり故に之を討たんと欲し、西紀一二四八年疾に託して葉密爾（Emil）河邊に西巡せしが、未だ別失八里（Bishbalik）に達せずして途に死す、年四十三、在位僅に三年なり。**嗣立の爭と憲宗の即位**　定宗死するや皇后斡兀立海迷失（Oghul

(Gaimish) 暫く喪を發せず、親ら制を稱して太宗の孫失烈門を立てんとせしに、拔都及び諸王大臣等聽かず遂に拖雷の子蒙哥を推して位に即かしむ、之を憲宗となす、時に西紀一二五一年なり。是に於て失烈門及び其の兄弟皆平らかならず其の黨と亂を作さんとせしかば、憲宗先づ不平黨の首領を誅して失烈門等を黜け、次で濶端、海都等太宗の子孫を分遷して喀喇和林より逐ひ、漸く衆心を定むるを得たり。**憲宗の征伐**　かくて繼承の內訌始めて平らぎ大勢漸く定まるや、憲宗また太宗の例に倣ひ大擧征戰の議を決して大に版圖を擴めんとし、弟忽必烈(Khubilai)に命じ漠南軍國の事を總べしめて南征せしめ、また弟旭烈兀(Hulagu)をして西方亞細亞を征せしめ、次で弟阿里不哥(Arikbukha)を喀喇和林の留守となし、憲宗親ら出でゝ宋を征せり。

大理の征服　**南詔大理と改む**　大理は唐の南詔なり、南詔は酋龍の後勢漸く振はず、五代に至り後晉の時西紀九三七年段思平其の王となるや國號を大理と改め、次で宋の中世に至り段氏一時絶えて高氏之に代はりしが、既にして段氏また興り大理王と號す、時に西紀一一〇五年なり。**忽必烈大理を征服す**　此の間宋は力を西北の防禦に盡くせるを以て大理と通ぜざりしが、後憲宗蒙古の大汗となり宋を伐たんと謀りて弟忽必烈に漠南の軍事を總治せしむるや、忽必烈先づ甘肅(甘肅省洮州)より出でゝ雲南(雲南省麗江府)を伐てり。かくて忽必烈は兀良哈台(Uriangkhatai 速不台の子)に命じ兵を率ゐて臨洮(甘肅省洮州)より**四川**の西北に入り、山谷を經行して金沙江に至り革囊及び栰を以て之を濟り、摩沙蠻雲南省麗江府)を降し進んで**大理城**(雲南省大理府)に薄まり大に其の兵を破りて大理王段興智を虜にしぬ。時に西紀一二五三年なり、是より大理は元の版圖となれり。

南詔及び大理の王系

1、細奴邏……六二九
2、邏晟……六七四
3、晟邏皮……七一二
4、皮邏閣……七二八
5、閣邏鳳……七四九
6、鳳迦異……七七九
7、異牟尋……七七九
8、尋閣勸……七九九
9、勸龍晟……八〇五
10、勸利晟……八〇六
11、晟豐祐……八二四
12、酋龍(世龍)……八六〇
13、隆舜……八七七
14、舜化眞……八九七
15、鄭買嗣……九〇二
16、鄭旻嗣……九一〇
17、鄭隆亶……九二六
18、趙善政……九二八
19、楊子眞……九二八
20、段思平……九三七
21、段思英……九四五
22、段思良……九四六
23、段思聰……九五三
24、段素順……九六九
25、段素英……九八五
26、段素廉……一〇〇九
27、段素隆……一〇一八
28、段素眞……一〇二六
29、段素興……一〇四一
30、段思廉……一〇四四

31、段連義……一〇七五
32、段義貞……一〇七七
33、段壽輝……一〇八〇
34、段正明……一〇九九
35、高昇泰……一〇九九
36、段正淸……一一〇五
37、段正嚴……一一〇八
38、段正興……一一四七
39、段智興……一一七三
40、段智連……一二〇〇
41、段智祥……一二〇七
42、段祥興……一二三九
43、段興智……一二五一
44、段實……一二六一
45、段忠……一二八三
46、段慶……一二八四
47、段正……一三〇七
48、段隆……一三一七
49、段俊……一三三一
50、段義……一三三二
51、段光……一三三三
52、段功……一三四五
53、段寶……一三六六
54、段明……一三八一
55、段世……一三八二
（一三八二年明に滅ぼさる）

吐蕃及び交趾の降服

忽必烈吐蕃を服す　吐蕃は藥宗弄贊以來歷代深く佛教を信じ其の教國内に流布せしが、唐の玄宗の天寶年間北印度の僧巴特瑪撒巴々（Padma-Saṃbhava蓮花生上師）吐蕃に來り、其の國情に適する一種の密教を唱へて喇嘛（Lama）教といへり。爾來喇嘛教年と共に其の勢を加へて僧侶の威漸く國王を凌ぐに至り、西紀第十世紀の頃朗達爾瑪（Lang Dharma）王を弑せしかば、其の後國王は皆此の教に歸依して安全を圖り、喇嘛の勢力益〻增長して喇嘛は遂に國政を左右するに至り、西紀一二五三年蒙古軍の大理を服し勢に乘じて吐蕃に侵入せる時喇嘛扮底達（Pandita）の威權旺盛なりしかば、忽必烈は扮底達と和し兀良哈台をして諸部族を平らげしめ、扮底達の姪八思巴（Phagspa）を伴うて還れり。

交趾の征伐　兀良哈台既に吐蕃を平らげ更に南進して雲南に入り、白蠻、烏蠻、鬼蠻の諸部を降し、次で羅羅斯、阿伯、阿魯の諸部を服して悉く西南夷を平らげ進んで交趾を侵しぬ。交趾は是より先き西紀一二二五年陳叟李氏に代はりて國を安南と號し、勇武にして屢〻宋の南境を侵しまた古城を破り、制度を改革して國勢頗る盛なり。兀良哈台使を遣はして降を勸むるや陳叟之を囚へ、蒙古軍を洮江（富浪江）に拒で敗れ遁れて海島に入りければ、其の都城交都を屠りしが炎暑に堪へずして師を班す、時に西紀一二五七年なり、然るに陳叟は蒙古の再征を恐れ翌年遂に歲幣を納れて和を結べり。

憲宗の南征

初め忽必烈憲宗の命により漠南の軍事を總治するや、府を金蓮川（直隸省宣化府赤城縣獨石口北）に開き碩學姚樞を聘して治國の道を諮り、次で關中河南に封ぜらるゝや樞の言に聽きて專ら域内の治平を圖りぬ。此の時に當り宋は理宗尙ほ位にあり、外は孟珙、余玠等四川を保ちて北方を守備せしが、内は賈似道權を專にして國勢大に衰ふ。憲宗親ら宋を伐つ　是に於て憲宗は宋を滅ぼさんと欲し、少弟阿里不哥を喀喇和林の留守となし、西紀一二五七年親ら大軍を率ゐ三道に分れて

四川より宋を侵すや、宋の諸城風を望んで降れり。既にして忽必烈の軍は河南より江を渡て鄂州（湖北省武昌府）を圍み、兀良哈台の軍は交趾より北上して邕桂の境を過ぎ潭州（湖南省長沙府）を圍む。時に憲宗合州（重慶府四川省）を圍みしが守將王堅固守して降らず、會〻憲宗病んで城下に死す、或はいふ飛矢に中て死すと、年五十一、時に西紀一二五九年なり。**賈似道の請和と世祖の即位**　是より先き宋の理宗は賈似道をして漢陽に至り鄂州の聲援をなさしめしに、賈似道蒙古軍の盛なるを見て密に使を遣はし、臣と稱して地を割き幣を納れんことを請ひ敢て戰をなさず、忽必烈聽かずして鄂州を攻むること益〻急なり。既にして賈似道憲宗の死を聞き再び使を遣はして和を請ひ、忽必烈も憲宗の訃を聞きまた阿里不哥の喀喇和林にありて憲宗の諸子及び察合台の子孫等に推されて大汗たらんとするを聞き、遂に賈似道の請を許して（一）江北の地を割き、（二）歲幣銀絹各〻二十萬を納れしむるを約し直に軍を收めて北に還り、開平（直隸省宣化府獨石口東北）に至り小數のフリルタイ會議に推されて大汗の位に即き、元を建て、中統といふ、之を世祖となす、時に西紀一二六〇年三月なり。是に於て世祖は蒙古に入り阿里不哥を擊破して之を降し、次で都を燕京に奠めて之を大都となし、開平を上都となし、國號を立て、元といふ、實に西紀一二七一年なり。

旭烈兀の西征

西征の理由　是より先き波斯は札蘭丁既に敗死せりと雖もエルブルズ（Elburz）山地及びクヒスタン（Kuhistan）地方にイスマイル（Ismail）派の木剌夷（Mulahida）一に暗殺派（Assassin）と稱するイスラム教徒ありて屢〻亂をなし、且つ八吉打の哈利發もまた蒙古に服從せざりしかば、憲宗は弟旭烈兀（Hulagu）に命じて之を征討せしめたるなり。故に旭烈兀西征の命を受け出發に臨みて入謁するや。憲宗勅して「服するものを撫で抗するものを戮せ、先づ木剌夷の教徒を屠くし、然る後哈利發を屈して蒙古の可汗に從はしむべし、之を命となす」といへり。**旭烈兀の進發**　是に於て旭烈兀は西紀一二五三年五月喀喇和林を發して自己の領地に入り十月征途に上る、前鋒に後るゝこと約一年にして天山の北麓を過ぎ、西紀一二五五年九月撒麻耳干に着き、次で柯提（Keh）に至りて波斯總督阿兒渾（Argun）及び呼羅珊（Korassan）諸侯の入謁を受け、波斯諸侯に向けて木剌夷征討に來り會すべき旨を布告し、西紀一二五六年一月アム河を渡りて波斯に進發しぬ。**木剌夷の討滅**　是より先き蒙古軍既にクヒスタンを平らげしが、會〻木剌夷の主阿剌丁（Alai ud-din Muhammed）頓に死して其の子魯兀乃丁（Rokn ud-din Kurshah）立ち、メイムンヂズ（Meimundiz）にありて使を遣はし降を請ひ、旭烈兀之を許し諸城を毀ちて魯兀乃丁自ら來るべしと命せしが遂に至らざりしかば、旭烈兀兵を進めてメイムンヂズを圍むや魯兀乃丁勢窮まりて其の臣と共に出で降る、時に西紀一二五六年十一月なり。是に於て旭烈兀は悉

く木剌夷の諸城を毀ち、次で使を遣はして木剌夷のシリアにあるものを諭し降らしめ、全く平定するに至り魯兀乃丁の請を許して蒙古に入朝せしめ、歸途に於て之を斬らしめしが木剌夷の將士もまた魯兀乃丁出發の後悉く殺され、魯兀乃丁の家族また悉く斬られしかばイスマイル派のイマム（Imam教主の義）の血統遂に斷絶するに至れり。**アッバス朝の討滅**　蒙古が八吉打のアッバス朝を敵視せるは深き理由存せるにあらず、唯其の入朝せざるを責め之をして其の禮を行はしめんとするに過ぎざりしが、アッバス朝は歴代其の軍隊強盛にして從來蒙古の侵寇も其の効なかりしかば、旭烈兀は既に木剌夷を平定せる勢を以て之に向はんとし、西紀一二五七年九月先づ使を八吉打に遣はして哈利發ムスタシム（Mustasim）に降を勸めしに、傲然として之に應ぜざりしかば遂に計を決し三道より八吉打に逼まりぬ。時にムスタシムは兵を出して之を拒ぎしが悉く敗れ、西紀一二五八年一月蒙古の全軍八吉打を圍みて攻撃せしかば、ムスタシム遂に抗守する能はざるを知り使を遣はして降を請ひ、二月に至り其の三子を伴ひ親族官紳三千人を率ゐて降れり。蒙古軍乃ち城に入りて殺掠を行ひ唯ネストリウス派の信徒及び外國人を赦し、他は悉く殺戮して七日間に八十萬人に及べりといふ。次で旭烈兀親ら入城して哈利發の宮殿に至り悉く内帑の金銀珍寶を出さしめ、更に窖藏を掘りて黄金珍異を收得し城を出でゝムスタシム及び其の三子を併せ之を殺し

ぬ、是に於てアッバス朝遂に亡ぶ、時に西紀一二五八年二月二十一日、始祖アッバスより是に至るまで三十七代五百九年なり（アッバス朝の世系は三一三―三一五頁にあり）。**伊兒汗國の建設**　旭烈兀の八吉打を去るや兵三萬人を駐めて之を守らしめ、親らウルミア（Urmia）湖畔に赴きて湖中のタラ（Tala）島に城を築き、八吉打に於て獲たる財寶を藏めまた夥多の分捕物を憲宗に送致し、次でタブリズに至りて茲に都を奠め、更に命を傳へて軍をシリアに進めぬ。西紀一二五九年九月旭烈兀親ら兵を率ゐシリアに侵入してアレッポ（Aleppo）を略し、的迷失吉（Damascus）を陷れ、將に迷思耳（Misr）即ち埃及に侵入せんとせしが、會〻憲宗の訃音至りしかば兵を駐めてシリアを守らしめ、西紀一二六〇年三月親ら其の領内に歸らんと欲し一旦タブリズに歸りしに、會〻迷思耳軍シリアに侵入して蒙古軍を覆滅せしかば、遂に東歸の念を絶ちタブリズに駐まりて伊兒汗（Ilkhan）と稱し、アム河以西波斯、小亞細亞、シリアを領有せり、之を伊兒汗國の建設となす。

第四十三章　世祖の一統及び外征

宋の滅亡　曩に蒙古軍の北に去るや宋の賈似道は臣と稱して歳幣を納れ地を割くを約せるを深く祕し、己の力を以て鄂州の圍を解けりと奏せしかば、理宗其の功を嘉みして厚く賞賜するに至り、賈似道益〻威福を弄びて國難の迫まれるを思はず。元の世祖既に位に即き郝經を宋に遣はして之を告げ、好を修めて所約の履行を求むるや、賈似道姦謀の暴露せんことを懼れ郝經を囚へて還さず、また多く正人を貶黜せしが理宗之を知らず益〻賈似道を寵遇して邸宅家廟を賜ふに至れり。**世祖宋を伐つ**　是に於て世祖大に怒り西紀一二六三年征南大將軍阿珠をして宋を伐たしめ元軍進んで襄陽を圍みければ、守將呂文煥急を臨安に告げしも賈似道之を顧みざりき。西紀一二六四年理宗在位四十一年にして死し、其の子度宗立ち賈似道益〻寵任を得て日に宴樂に耽り群小と狎遊しぬ。既にして元軍また樊城（湖北省襄陽府北）を圍み、宋將范文虎襄陽を救ひ敗れて走り張順また敗死し元軍に降るもの日に多かりしが、賈似道言路を杜絶して帝に告げず以て太平を粉飾せり。西紀一二七三年樊城遂に陷り元兵悉く襄陽に集まるに及び、呂文煥遂に宋廷の援至らざるを知り堅守六年の節を棄てゝ元に降れり。西紀一二七四年度宗在位十年にして死し其の子恭宗立つや、世祖宋の喪に乘じ伯顏をして師を督して之を伐たしめ、鄂州遂に陷りて范文虎等の諸將皆元に降り宋廷震駭す。是に於て賈似道己むを得ず都督府を臨安に置きて勤王の士を募り、自ら出でゝ蕪湖に次し使を馳せて和を請ひしも伯顏之を許さず、江淮の州郡皆元に沒し賈似道揚州に奔りて連りに遷都を請へり。**臨安陷る**　既にして張世傑、文天祥等勤王の兵至り陳宜中相となりて賈似道を斥け、次で之を貶殺して恢復を圖りしも事既に遲く、元軍既に岳州（湖北省岳州府巴陵縣）に入り江陵を侵し潭州を陷る。時に宋の諸關の兵悉く潰えてまた收むべからず、元軍臨安に迫まりしかば謝太后使を元軍に遣はし、臣と稱して歳貢銀絹二十五萬を輸するを約し和を請ひしも伯顏之を許さず、陳宜中計の出づる所を知らず連りに遷都を請ひ太后之を許さゝりしかば夜遁れ、太后遂に璽を奉じて元軍に降れり。伯顏乃ち臨安に入りて府庫を封じ圖書符節を收め、恭宗及び理宗度宗の皇后を執へて北に送りぬ、時に西紀一二七六年三月なり。**宋室の南遷**　是に於て陳宜中、陸秀夫、張世傑等恭宗の兄益王昰を福州に立つ、之を端宗となす、陳宜中左丞相となり張世傑少保となり文天祥等と恢復を圖りしが、既にして元將阿剌罕（Arakhan）來り侵し、陳宜中等端宗、太后、衛王昺を奉じて海に航し、潮州より廣州に至り謝女峽（廣東省廣州府香山縣海中の島）に泊す。時に文天祥、張世傑等連り

に諸州を徇へしが元軍進んで廣州に至るに及び、張世傑端宗を奉じて秀山（廣東省廣州府東莞縣西海中の島）に航し陳宜中をして援兵を占城に請はしめしが遂に歸り來らず、張世傑また漂泊して謝女峽に還りぬ。西紀一二七七年元の都元帥張弘範閩廣に入りて端宗を碉州（廣東省高州府吳川縣南の島）に窮追す、既にして端宗碉州に死し其の弟衛王昺八歳を以て統を繼ぐ、陸秀夫諸臣を勵まし張世傑と共に鋭意恢復を圖りて帝昺を厓山（廣東省廣州府新會縣南の島）に奉ず。時に文天祥潮陽（廣東省潮州府）に屯して群盜を討ちしが、張弘範兵を率ゐて來り戰ひ、文天祥支ふる能はずして海豐（廣東省潮州府海豐縣）に走らんとし、五坡嶺（海豐縣の北）に至りて元の追兵に執へられたり。**宋の滅亡**　是に於て張弘範兵を集めて海陸より厓山に迫まり、張世傑等奮戰して利あらず、陸秀夫遂に帝昺を負ひ海に投じて死し、從死するもの甚だ多く餘舟悉く元軍の獲る所となるもの八百、七日を經て屍の海上に浮べるもの十餘萬に上れりといふ。張世傑再擧を謀らんとして占城に航せしが土豪の防ぐ所となりて廣東に還り、また兵を收めて海陵山（廣東省廣州府海陽縣南の島）に至り颶風に遭ひ舟覆沒して死せり。是に至りて宋の遺族遺臣盡く亡び海内遂に元の統一する所となる、實に西紀一二七九年なり。宋は太祖より帝昺に至るまで十八代三百二十年にして亡ぶ、而して北宋は九代百六十七年、南宋は九代百五十三年なりき。

宋の帝系（十八代、三百二十年）

1 太祖趙匡胤（九六〇）
- 燕王德昭（南宋の理宗九世の祖）
- 秦王德芳（南宋の孝宗六世の祖）

2 太宗光義（九七六）
- 眞宗恒（3、九九八）
  - 仁宗禎（4、一〇二三）
    - 英宗曙（5、一〇六四）
      - 神宗頊（6、一〇六八）
        - 哲宗煦（7、一〇八六）
        - 徽宗佶（8、一一〇一）
          - 欽宗桓（9、一一二六）
          - 高宗構（10、一一二七）
            - 孝宗瑋（11、一一六三）
              - 光宗惇（12、一一九〇）
                - 寧宗擴（13、一一九五）
                - 理宗昀（14、一二三五）（太祖の子燕王德昭九世の孫）
                - 福王與芮
                - 度宗禥（15、一二六五）
                - 端宗昰（17、一二七六）
                - 恭宗㬎（16、一二七五）
                - 帝昺（18、一二七八―一二七九）
- 商恭靖王元汾―濮安懿王允讓―英宗曙（5）

【南宋】

元の東侵

元と高麗日本との關係　高麗は高宗の時質子を送りて蒙古に降り、次で太子倎を遣はして朝見せしめ江華の城を壞る、後高宗死し太子還りて位に即く、之を元宗となす。是より

先き日本の邊民高麗の州縣を侵掠せしかば、元宗立ちて使を日本に遣はし好を修めて之を禁せんことを請ひしが其の患尚ほ息まず、是に於て元宗倭寇のことを蒙古に訴へ且つ日本の伐つべきをいへり。世祖また日本を從へんと欲し西紀一二六七年黑的、殷弘等を日本に遣はし高麗をして嚮導せしむ、元宗乃ち宋君斐、金贊に命じて黑的等と共に日本に赴かしめしに、巨濟島に至り風濤の險を畏れて引き還りぬ。明年世祖また黑的等を遣はし高麗に命じ日本を諭して入朝せしめんとするや、元宗また潘阜を遣はし蒙古主の書及び國書を齎して日本に行かしむ。西紀一二六八年潘阜太宰府に至り太宰府其の書を受けて之を鎌倉に送る、時に鎌倉幕府は北條政村執權たり時宗連署たりしが、其の書辭無禮なるを以て朝廷に奏して返牒を與へず、太宰府に命じて潘阜を追ひ還せり。是に於て世祖高麗に命じて軍須を備へしめ、次で黑的、殷弘を導きて日本に赴き前年の返牒を促さしむ。西紀一二六九年黑的高麗の使者申思佺と共に對馬に至りて島民と爭ひ二人を掠めて去りしが、既にして蒙古主俘虜を送還して來聘を促すこと切なり。時に朝廷答書を作りて將に之を發せんとせしに、幕府蒙古の書辭無禮なるを怒り抑へて之を送らしめざりき。會〻高麗の權臣林衍廢立を謀り元宗を廢して其の弟安慶公湜を奉じ位に即かしむるや、世祖趙璧に命じて兵を平壤に集め往きて其の罪を問はしめしに、林衍既に死して元宗位に復せしが其の餘黨恥維に據りて濱海に寇せしかば、高麗の金方慶蒙古の將忻都と共に討て之を平らぐ、是に於て高麗は武臣跋扈の禍始めて息みしが是より蒙古の專制を受くるに至り、蒙古は慈悲嶺以北の地を收めて其の領土となせり。西紀一二七一年蒙古は國を元と號し、次で趙良弼をして日本に使せしめ兵を發して之を高麗に送り、高麗また康允紹等をして隨ひ行かしむ。趙良弼筑前の今津に至るや太宰少貳武藤經資兵を以て至り、其の國書の謄本を求めて之を鎌倉に送り幕府吏に之を朝廷に獻ぜしが、其の書辭無禮なるを以て答へざることもとの如く、太宰府に命じて趙良弼等を逐はしめ更に鎭西に令して兵備を修めしめき。明年高麗の使また日本に赴き元と通好せんことを勸め、次で元使趙良弼再び太宰府に至りしが共に志を果さずして還れり。**文永の役**　是に至りて世祖遂に意を決し西紀一二七三年忻都、洪茶丘等をして日本を伐たしめ、高麗は金方慶、金洗、金文庇をして之を助けしめ、蒙漢の軍二萬五千、高麗の軍八千、戰艦凡そ九百艘合浦（慶尙道昌原府にあり）より發し、對馬壹岐を取り肥筑の沿海を侵せしが、大風雨に遇ひて戰艦破れ金洗溺死し士卒一萬三千餘人を失ひ、漸く餘衆を收めて逃れ還りぬ、時に我が龜山天皇の文永十一年なり、故に之を文永の役といふ。此の役戰艦器械糧食皆高麗の辨ずる所なるを以て上下其の弊に堪へず、明年金方慶を元に遣はして征東の師を罷めんことを請はしめければ、世祖また杜世忠、何文著等をして日本に赴き修交を求めしむ、杜

世忠等長門の室津に至り太宰府に回航するや、執權北條時宗之を鎌倉に護送せしめ、杜世忠以下五人を龍口に斬れり。**弘安の役**　此の間高麗の元宗死して其の子忠烈王立つ、王太子たる時より元に行きて世祖の女を娶り、後屢〻元に朝して其の意を迎へ船を造り兵を發して日本を伐たんことを請ふ。是に於て世祖は宋を滅ぼせる勢に乘じて日本再征の意を決し、西紀一二七九年宋の降將范文虎の言を用ひ周福、欒忠等をして日本に至らしむ、書辭の不遜なるは言を須たず、時宗其の使を博多に斬らしめ、令して九州の兵備を修めしめたり。時に元は征東行中書省を高麗に置き忠烈王に命じて軍務を典どらしめ、西紀一二八一年忻都、洪茶丘等に命じ蒙漢及び高麗の軍四萬人、戰艦九百艘を率ゐて合浦を發せしめ高麗の金方慶之に從ひ、范文虎は別に江南軍十餘萬人、戰艦二千五百艘を率ゐて江南より發し、全軍凡そ十四萬餘人日本に寇す。かくて肥筑の海上舳艫相銜み攻戰頗る力めしが、會〻颶風大に起りて戰艦覆沒し日本軍之に乘じて掩擊せしかば溺死するもの多く、餘軍僅に遁れて高麗の境に至る、元の兵は十三萬餘人にして生存するもの三萬人、高麗の兵は一萬人にして死するもの七千餘人なり、時に我が後宇多天皇の弘安四年なるを以て之を弘安の役といふ。然るに世祖尙ほ未だ懲りず其の後屢〻高麗に命じて戰艦を修め糧餉を貯へてまた日本を討たんとし、高麗また金有成を日本に遣はして之を招諭せんとせしが拘留せられて還らず、次で世祖死するに及び其の事遂に息めり。

緬國の征服　緬國は今の緬甸（Burma）なり、早くより印度と交通して佛教を奉じ、蒲甘（Pagan）に都して阿羅漢（Arakan）、白古（Pegu）を併せ、また暹國（Siam）を略して勢を振へり。元の大理を征服して雲南を領するや屢〻使を緬國に遣はして朝貢を命せしが、其の王ナラチハパヂ（Narathihapadi）應せざりしかば、西紀一二七七年雲南都元帥納速剌丁（Nassir ud-din）兵を率ゐて緬の界に入り、其の砦三百餘を降せしが炎熱甚しきを以て師を還し、具に其の擊つべき狀を上言せしかば、世祖は西紀一二八二年諸王相吾答兒（Sangtar）に命じ、諸軍を督して之を擊たしむ。西紀一二八三年相吾答兒進んでイラワヂ（Irawadi）河に沿うて入り、諸所に勝て江頭城に據る、元軍遂に水陸兵を進めて之を拔けり。初め阿撒母（Assam）地方に散居せる金齒等の諸部降らんと欲し緬の制する所となりて果さゞりしが、是に至り皆元の威風を望んで來り降りて朝貢するに至りぬ。既にして元軍糧盡きて還り緬王また國都に還りしが、西紀一二八七年遂に降を請ひ歲貢を納るゝを約せり。

占城安南の征服　占城（Champa）は交趾の南に國して東京（Tongking）より

甘埔寨（Camboja）に至る全海岸を包括し、初め元の招諭に應じて内附せしが、後其の險要を恃んで元の使者を執へしかば、世祖怒りて西紀一二八二年唆都（Sagatu）を遣はし、淮浙福建湖廣の軍五千、海船百艘、戰船二千五百艘を發して進討せしむ。明年唆都占城を攻めて之を破り其の王遁れて山谷に入りしが、後其の臣を遣はし陽に歸附を求めて師を緩め潛に執ふる所の使者皇甫傑等百餘人を殺しぬ。唆都漸く其の詐を覺り兵を進めて之を攻め敗れて遂に引き還りしかば、世祖は西紀一二八四年阿塔海（Atakai）に命じ兵一萬五千人、船三百艘を發して再び占城を征せしめ、更に皇子脫歡（Togan）を鎭南王となし雲南より陸路進討して海軍に應援せしむ。

安南の討伐　時に安南は陳叟の孫陳昤位にあり、脫歡路を安南に借り且つ其の糧餉を徵せんとするや、其の國の占城に至る水陸の路共に便ならずと稱して之に應ぜず、兵を發して境上に拒守せしかば、西紀一二八五年脫歡先づ安南を伐ち其の都城を陷れて陳昤を奔らせしが、元軍暑氣の爲めに疫に罹るもの衆く占城に達する能はざるを以て軍を還し、安南軍の追擊する所となりて大に敗れ、唆都以下の將士多く戰死せり。西紀一二八七年世祖また脫歡に命じて安南を征す、時に元軍兵を三道に分ちて水陸竝び進み、其の國都を陷れて陳昤を海上に走らせしが、將士多く疫に罹りて進む能はず諸蠻また叛きて得る所の險扼皆守を失するに至り、遂に軍を還せしが歸路追擊を被ふりてまた大に敗る、時に西紀一二八八年なり。**安南占城の降服**　然るに後幾許ならず陳昤使を遣はして罪を謝し金人を貢せしかば、占城もまた風を望んで來り降れり。次で世祖屢〻使を遣はして安南王に入朝を勸めしも遂に來らず、よりて西紀一二九三年諸王亦里吉解（Hchitai）に命じてまた之を伐たんとせしが、明年世祖死して兵を罷めたり。

爪哇征伐　初め世祖孟淇を遣はして爪哇（Java）を招諭せしに、爪哇人孟淇を執へ其の面に黥して還らしめければ、世祖は西紀一二九二年亦黑迷失（Ikumes）、史弼、高興に命じ、兵三萬に將として之を伐てり。時に爪哇國王其の隣境葛郎（Kalang）國人の殺す所となり、其の女婿土罕必闍耶（Tuhan Pijaya）援を元軍に請ふ、史弼等乃ち攻めて葛郎國王を執へ歸りしが、既にして土罕必闍耶叛きしかば、史弼等力戰して之を却け漸く還るを得たるも、死者三千餘人、貨貝五千餘萬を亡失せり。

海外諸蕃の服屬　世祖また使節を發して南方の諸蕃を招致せしかば、西紀一二八二年以來俱藍（Kulam 印度の南海岸）、馬八兒（Mabar 印度の南海岸）、須門邦（Sommath 印度の西南海岸）、僧急里（Sangkili マラバル海岸のクランガノル Cranganor ボムベイ附近）、南無力（Lambri 蘇門答剌の北岸）、馬蘭丹（Malantan 蘇門答剌の一部）、那旺（Nawang 緬甸の西南ナウェン Nawnge 河附近）、丁呵兒（Tanggala 馬來半島の東岸）、急蘭亦解（Kalantan 馬來半島の東岸）、蘇木都剌（Sumatra）等の諸國相次で朝貢す

るに至り、元の威令遂に南海に遍ねし。世祖また西紀一二九一年楊祥、吳志斗等を遣はして琉球を招諭せしが、明年吳志斗途に死し遂に行を果さずして還りぬ。

蒙古大帝國の版圖と其の統治法　元の世祖の時蒙古帝國の版圖は北亞細亞の北部と南亞細亞の南部とを除き、亞細亞大陸を横貫して歐羅巴に跨り、其の中に蒙古諸王の私領を含めり、即ちアム河以西の西亞細亞一帶の地を領する伊兒汗國、其の北にありて東は吉利吉思曠原より、西は匈牙利の國境に至り、禿納河下流の地、高加索以北を領する欽察汗國、シール河外天山附近一帶の地を領する窩濶台汗國あり、支那本部を中心として遼東、內外蒙古、青海、圖伯特、中央及び東南亞細亞を直領し、高麗及び交趾を羈縻する元室あり、元の世祖は蒙古の大汗を以て此の大帝國に臨み、阿母河行省を建てゝ葱領以西を統べ、嶺北行省を置きて抗愛山以北を制し、阿力麻里元帥府を建てゝ天山北路を監し、別失八里元帥府を設けて天山南路を制し、遼陽行省を置きて滿洲及び朝鮮を督せしめたり、是に至りて蒙古の勢威は其の最頂點に達せりと謂ふべし。

蒙古の征服したる地方

時代	地方
太祖鐵木眞	內外蒙古、滿洲、支那の西北部、天山南北兩路、中央亞細亞、阿富汗斯坦、波斯の東部及び北部、高加索附近。
太宗窩濶台	支那の中央部、朝鮮、西伯利亞の西南部、歐羅巴の東北部。
憲宗蒙哥	支那の西南部、圖伯特、交趾、西亞細亞一帶、印度の西北小部。
世祖忽必烈	支那の南半部、亞細亞の東南部。

領土擴張表

東西の交通　世祖の世に至りて蒙古は空前の一大帝國をなし、所在に割據せし幾多の大小國は悉く亡び、交通往來の危險減少せしかば東西の交通往復頗る頻繁となれり。是に於て西亞細亞及び歐羅巴の商人は陸路中央亞細亞より天山南路を過ぎ、或は西伯利亞の南部より天山北路を經て遠く其の販路を喀喇和林、燕京に擴張し、また波斯、印度との間に於ける海上の交通も頓に頻繁を加へて泉州、杭州の諸港は當時世界第一の貿易場となり、外國人の來りて居住するもの多し。有名なる伊太利人マルコ・ポロ（Marco Polo）及びモロッコ（Morocco）の亞拉比亞人イブン・バツタ（Ibn Batuta）等が支那に遠遊せるは實に元時代にして我が日本の國名の西方に知られたるもまた此の時代なり。加ふるに蒙古の大汗は國の內外人種の異同を問はずして人材を登庸せしかば、中西亞細亞及び歐羅巴人の燕京に來りて其の朝廷に仕ふるもの多く、西方の天文、數學、砲術等は支那に將來せられ、支那の磁石盤、活版術等は西方に傳へらるゝに至れり。

第四十四章　世祖の治と海都の亂　權臣の專恣

世祖の治　**其の治績**　蒙古は太祖太宗の時遼人耶律楚材重く用ひられ國政に參して法制を作り稍〻其の國是を定めしが、世祖は希世の英傑にして漠南軍事都督たる時より啻に外征のみならずまた內治にも意を注ぎ、漢人の才能あるものを引きて幕賓となし、位に即くに及び劉秉忠、許衡等を任用して新に官制を定めしめ、中央政府を燕京に置き中書省、樞密院、御史臺等の諸官衙を設けて政務、兵馬、黜陟を分掌せしめ、諸官の長には必ず蒙古人を用ひ、次官以下には內外人を擇ばず其の才能に就きて博く之を登庸せしかば、契丹、女眞、畏兀兒、圖伯特、康里、中央亞細亞、波斯、亞拉比亞、伊太利、佛蘭西等より陸續來りて仕ふるものあるに至れり。世祖また法制を定め兵制を革め、儒學を尙びて許衡、劉因等の大儒を優遇し、文學を奬め八思巴（Phagspa）に命じて蒙古文字を制せしめ、郭守敬に命じ曆法を改めて授時曆を布き、佛教を崇め基督教を保護し、殊に喇嘛（Lama）教を崇信して八思巴を帝師となせり。**其の失政**　然るに世祖頻に外征の師を出しまた海都の叛亂久しきに及び、國力爲めに消耗せしかば財政恢復の必用を生じ、遂に

第十一圖

を擇ばず其の才能に就きて博く之を登庸せしかば、契丹、女眞、畏兀兒、圖伯特、康里、中央亞細亞、波斯、亞拉比亞、伊太利、佛蘭西等より陸續來りて仕ふるものあるに至れり。世祖また法制を定め兵制を革め、儒學を尚びて許衡、劉因等の大儒を優遇し、文學を奬め八思巴(Phagspa)に命じて蒙古文字を制せしめ、郭守敬に命じ曆法を改めて授時曆を布き、佛敎を崇め基督敎を保護し、殊に喇嘛(Lama)敎を崇信して八思巴を帝師となせり。**其の失政** 然るに世祖頻に外征の師を出しまた海都の叛亂久しきに及び、國力爲めに消耗せしかば財政恢復の必用を生じ、遂に

聚斂の臣を任用して國庫の充實を圖らしむるに至れり。初め世祖波斯人阿合馬（Ahmad）を擧げて財賦の事を掌どらしむるや、阿合馬鐵冶を興し鹽稅を增し天下の戶口を括し藥林椎茶に至るまで遺す所なく、盛に收斂を行ふに至りて遂に士民の怨望を受け王著の殺す所となる。後盧世榮、桑哥（Sanga）相次で任用せられ、交鈔を濫發し鹽鐵椎酤の稅を增し、諸路の錢穀を拘致して財政の急を救ひければ、群臣彈劾して遂に誅せられしが、是より財政益〻紊れて元朝衰微の原因をなせり。加ふるに世祖また喇嘛敎を崇信せしかば喇嘛の跋扈甚しく、農民は之に假託して租を輸さず姦凶は之に附隨して刑を免かるゝに至り、紀綱遂に紊亂して元室傾倒の遠因をなすに至れり。

世祖の晩年　是に於て人民怨望して江南に叛亂相次で起りしが、幸に鎭定して元朝最盛の治を致すことを得たり、帝在位三十五年にして西紀一二九四年死す、太子眞金（Tirkin）早世せしかば王昔帖木兒（Yissu Timur）伯顏と謀りて太孫鐵木兒（Timur）を立つ、之を成宗となす。

海都の亂　**原因**　初め太宗の諸子孫皆憲宗の大汗たるを悅ばざりしかば、憲宗の死後阿里不哥敗れて降るに及び其の主謀者海都は也迷里（Emil）河畔に退きて兵力を養ひ、世祖が宋を攻擊して北顧の暇なきに乘じ、自立して大汗と稱し諸王を誘うて西紀一二六八年遂に亂を作せり、海都は合失（Kashi）の子にして太宗の孫なり、權智人に過ぎ籠絡を善くせしかば諸王之に應ずるも

の頗る多し。**諸汗國の攻爭**　初め察合台死するや其の孫合喇旭烈（KaraHulagu）立ちしが定宗に廢せられ、察合台の子也速蒙哥（IsuMaugn）代はりて察合台汗となり、憲宗の時に至りて合喇旭烈の寡婦倭耳干納（Organah）政權を弄せしが、次で阿里不哥は倭耳干納を却け合喇旭烈の從弟阿魯忽（Algu）を察合台汗となして世祖に抗しぬ。海都叛するに及び世祖は阿魯忽を廢して察合台の曾孫八剌（Borak）を立て、また拔都の孫忙哥帖木兒（Mangu Timur）を欽察汗となし以て海都に備へしに、既にして八剌、忙哥帖木兒共に海都と連合し、察合台、欽察、窩濶台三汗國は海都を戴きて大汗となせり。欽察汗は始祖拔都より二傳して其の弟別兒哥（Berke）に至り、深くイスラム敎を信じて屢〻歐羅巴の基督敎徒を迫害し、また伊兒汗旭烈兀が八吉打（Bagdad）を陷れてアッバス朝を滅ぼせるを怒り、埃及の算端（Sultan）と連合して旭烈兀を夾擊し、是より欽察汗は伊兒汗國と怨を結びて互に攻伐せしが、別兒哥死して忙哥帖木兒嗣ぐに及び海都及び八剌に黨するに至れり。伊兒汗は旭烈兀死して其の子阿八哈（Abaka）立ち、世祖の近親なるを以て元に應援して連りに三汗を破りしが、阿八哈死するや其の子阿魯渾（Arghun）叔父アーマッド（Tigdal Ahmad）と位を爭ひて內訌起り、また海都を控制する能はざるに至りぬ。此の間察合台汗は八剌死して察合台の孫ニクペイ（Nikpei）立ちしが海都を攻めて陣沒し、察合台四世の孫脫哈帖木兒（Tuka Timur）嗣ぎて幾許もなく死せしかば、海都は八剌の子篤哇（Dua）を輔立し、伊兒汗の衰ふるに乘じ共に兵を合せて東の方元を侵せり。**海都の東侵**　是に於て世祖は皇子那木罕（Namugan）を將として昔里吉（ShiLeki憲宗の子）、安童（Autun木華黎の後）等をして之に從はしめ、兵を率ゐ阿力麻里（Almalik）に赴きて海都に備へしめしに、會〻昔里吉叛して海都に內應し那木罕及び安童を執へて元軍に抗せしかば、世祖更に伯顏を支那より召還して昔里吉を斡兒罕（Orkhon）河畔に擊破せしめたり。既にして海都は滿洲吉林地方の諸王（太祖の諸弟の後）を誘ひて世祖を夾擊せんとしければ、世祖は伯顏をして海都を喀喇和林に扼せしめ、親ら兵を率ゐて滿洲に入り諸叛王の連合軍を遼河に破りて一旦上都（直隸省宣化府獨石口東北）に歸り、次で喀喇和林に至り海都を擊て利あらず空しく上都に還りしが、後伯顏海都を誘ひ擊て之を驅逐しぬ。**海都の死と窩濶台汗國の滅亡**　西紀一二九四年世祖死して太孫成宗立つや海都また屢〻入寇し、西紀一三〇一年に至り篤哇と共に大擧して喀喇和林に向ひしに成宗の姪海山（Kaisan）邀へ擊て之を破りしかば、海都遂に志を得ずして退き歸途に死せり。是に於て篤哇は海都の子察八兒（Chapar）を擁立して窩濶台汗となせしが、既にして成宗の主權を認め使を遣はして降を請ひ、諸王の叛せるものまた相次で降り、三十餘年の擾亂始めて平らぐ、時に西紀一三〇三年なり。後察八兒叛きて海山の爲めに也兒的石（Irtysh）河に破られ、奔りて篤哇

に歸せしが篤哇の死後窮蹙して武宗(海由)の時元に降り、窩濶台汗國遂に亡びぬ、實に世祖の死後十六年にして西紀一三一〇年なり。

西南夷の征討　**緬國の鎭定**　初め緬人僧哥倫(Sanggaran)亂を作すや、緬王其の兄阿散哥也(A-sangaya)を執へ次で之を釋せしに、阿散哥也其の黨を率ゐて王を囚殺せしかば、王の次子窟麻剌哥撒八(Kumara Kashapa)奔て燕京に來り愬ふ、成宗乃ち西紀一三〇〇年薛超兀兒(Setugur)等を遣はして之を討平せしめ、次で窟麻剌哥撒八を立て緬王となせり。**八百媳婦金齒及び西南夷の征討**　八百媳婦は緬の東北、雲南の西にあり、其の酋妻八百ありて各〻一寨を領するが故に此の名ありといふ、是より先き緬の叛賊阿撒哥也に應じて邊を擾せしかば、成宗また西紀一三〇〇年雲南行省左丞劉深及び哈剌帶(Karatai)等に命じて之を征せしむ。明年劉深の兵順元(貴州貴陽府)に次し烟瘴を冒せるを以て死者甚だ多く、民を驅て谿谷の間を轉餉せしめ中外騷然たり。是に於て蠻酋宋隆濟。蛇節等兵を連ねて反し劉深遂に糧盡きて還りしが、途に要擊せられて士卒の死傷せるもの甚だ多し。既にして西南夷の諸蠻蛇節の亂により供輸の煩勞を辭となし兵を擧げて反せしかば、西紀一三〇二年陝西行省平章政事也速解(Yesudar)を遣はして之を討平せしめ、次で劉國傑を遣はし宋隆濟、蛇節等を討て之を擒にせしかば餘黨皆平定せり。然るに是より先き征緬の兵

歸途に金齒の遮ぎる所となりて士卒多く戰死せしかば、薛超兀兒に命じ征緬の師を移して之を討たしめしも効なく、是より金齒諸蠻は八百媳婦と結んで賦稅を輸せず官吏を殺し、元威漸く西南に振はざるに至れり。

武宗仁宗の更立　**繼承の爭起る**　蒙古の相續法は必ずしも父子の世襲を認めず、フリタルイ大聚會の決議により宗族中より有力者を推戴して大汗となすを例とせしかば、繼承の際常に爭亂の紛起を免かれず、世祖即位の時既に阿里不哥(阿里不哥)の亂あり海都の叛また之に因す、世祖死するや諸王大統を覬覦せしが名將伯顏世祖の遺命を奉じて成宗を立つ、然るに成宗在位十三年にして西紀一三〇七年死し嗣なく、繼承の爭また起れり。時に成宗の姪海山北邊に居り海都の叛を討て威望あり、然るに皇后卜魯罕(Bulugan)曩に謀て海山の弟愛育黎拔力八達(Ayurbalibatra)と其の母とを懷州(河南省懷慶府)に出せしかば、海山立たば禍を受けんことを恐れて安西王阿難答(Anunda世祖の孫にして忙哥剌Manghala の子)を立てんとし、左丞相阿忽台(Agutai)及び諸王明里帖木兒(Melik Timur 阿里不哥の子)等陰に其の謀に贊せしが、右丞相哈剌哈孫(Karakhass)等は海山を迎立せんとし、其の遠地にあるを以て先づ懷州にある愛育黎拔力八達を迎ふ。**愛育黎拔力八達內難を定む**　是に於て愛育黎拔力八達大都(燕京)に至り阿難答及び明里帖木兒を執へ阿忽台等を誅し、使を遣はして海山を迎ふ

海山嚢に阿爾泰山方面にあり成宗の死を聞きて喀喇和林に還り、次で上都(開平)に至り卜魯罕を廢し阿難答及び明里帖木兒を殺して位に即く、之を武宗となす。武宗既に立ち愛育黎拔力八達を皇太子となし、鋭意治を圖りしが封爵濫に過ぎ且つ蕃僧(喇嘛)寵を專にして果す能はず、在位僅に四年にして西紀一三一一年死す、愛育黎拔力八達乃ち尚書省を罷め舊章を亂りし大臣脫脫(Tukhta)等を貶殺し、老臣十五人を召して庶政を議し遂に位に即く、之を仁宗となす。

權臣の專恣と元室の紛擾　仁宗心を政治に留め先づ吏弊を改めんとし、左右に戒めて職業を勤め妄に僥倖して官を加ふることなからしめ、また始めて科擧を行はしめ進士を分ちて左右兩榜となし、蒙古色目人を右となし漢人南人を左となせり。帝また力めて弊政を除き士民の修廢を抑制せしが、元の執政大臣は歴代皆蒙古人にして專横を極めしかば紛擾屢〻起り遂に元室の衰亡を招くに至れり。鐵木迭兒の專恣　武宗の長子和世球(Kushala)年既に長じ將に太子たるべかりしに、右丞相鐵木迭兒(Timudar)寵を得んと欲して皇子碩德八剌(Shutepala)を太子となさんことを勸め、且つ連りに和世球を讒せしかば、仁宗遂に和世球を出し雲南に封じて周王となす、是に於て和世球其の臣と共に途に兵を擧げて京師に向ひしが、敗れて漠北に奔り察合台汗に投じ碩德八剌遂に立て太子となれり。鐵木迭兒是より勢を恃みて貪虐兇穢甚しきに至り、御史中丞以下四十餘人上奏して其の姦狀を劾せしかば仁宗怒りて之を誅せんとし、太后の救解により之を赦して相を罷めしが、幾許もなくまた起ちて太子太師となりければ、御史中丞趙世延等其の不法を論ぜしも、太后の故を以て果さゞりき。仁宗在位九年にして西紀一三二〇年死し、太子碩德八剌立つ之を英宗となす。鐵木迭兒益〻太后の寵を得て遂に太師となり右丞相に復し、嘗て己を劾奏せるものを殺して怨を報じ、暴横益〻甚しく諸王大臣皆危まざるものなし。是に於て英宗其の專横を悟りて漸く之を疎外し、左丞相拜住(Baidlin)を親任せしかば鐵木迭兒疾と稱して出でず遂に死し、拜住右丞相となれり。**鐵失の弑逆**　拜住政務に勵精して老臣を尊禮し賢良朝に集まりしが、御史大夫鐵失(Tekehi)はもと鐵木迭兒の黨なるを以て自ら安んぜず、遂に知樞密院事也先鐵木兒(Yessen Timur)、諸王按梯不花(Altaibuka)等と逆を謀り、先づ拜住を殺し英宗を弑す、時に西紀一三二三年なり。是に於て按梯不花皇帝の璽を奉じて成宗の姪晉王也孫鐵木兒(Yessun Timur)を北邊より迎へ立つ、之を泰定帝となす。帝即位の初め也先鐵木兒を右丞相となし鐵失を知樞密院事となせしが、諸王買奴(Mamu)の言により也先鐵木兒、鐵失等を誅し按梯不花を流し、次で買奴を泰寧王となし倒剌沙(Tirisha)を左丞相となし、また和世球の弟圖帖睦爾(Tu Timur)を懷王となせり。西紀一三二六年帝は知樞密院事燕帖木兒(Yak Timur)を大都の留守と

なし上都に赴きて死し、太子阿速吉八（Asukipa）上都に即位す、之を天順帝となす、年僅に八歳なり。**燕帖木兒の逆謀及び專恣**　時に燕帖木兒大都にあり逆を謀りて圖帖睦爾を江南より迎へ、右丞相塔失帖木兒（Tash Timur）の來り討てるを破り、上都を攻めしかば倒琲沙遂に皇帝の璽を奉じて降り、帝遁走して終る所を知らず、在位僅に三ヶ月なり。圖帖睦爾乃ち和世琲を迎へ和世琲漠北にありて位に卽く、之を明宗となす。既にして燕帖木兒皇帝の璽を奉じて漠北に至るや、明宗圖帖睦爾を立てゝ太子となし、太子大都を發して帝を迎へ王忽察都（Ongchat）に至りて帝に入見せしが帝暴に死す、蓋し弑に遇へるなり。是に於て圖帖睦爾上都に即位す、之を文宗となす、時に西紀一三二九年なり。文宗燕帖木兒の功勞を思うて右丞相となし、左丞相を置かずして獨り政を專にせしめければ、知樞密院事灣徹伯（Kuchelebe）等其の權勢の盛なるを憂ひて之を誅せんと謀り、事成らずして殺さる。次で文宗在位僅に五年にして西紀一三三二年上都に死するや、燕帖木兒皇子燕帖古思（Yak Tukus）を立てんとせしに皇后宏吉剌（Kungrat）氏聽かず、遺詔によりて明宗の次子卽王懿璘質班（Rinchenpal）を立つ、之を寧宗となす、時に年七歳なり、皇后乃ち皇太后となりて政を攝す。然るに寧宗在位僅に二ヶ月にして死し、燕帖木兒また燕帖古思を立てんとせしが、皇太后の意見によりて明宗の長子妥懽帖睦爾（Toghon Timur）を廣西の靜江（廣西省西江府）より迎へ立つるに決しぬ。既にして妥懽帖睦爾靜江より至るや百官皆途に迎ふ、燕帖木兒既に見へ馬を竝べて徐行し迎立の意を具陳せしに、妥懽帖睦爾畏れて答へざりしかば其の意測るべからずとなし久しく之を立てざりしが、西紀一三三三年燕帖木兒死するに及び妥懽帖睦爾遂に位に卽けり、之を順帝となす、時に年十四歳なり。**伯顏の專權**　順帝位に卽きて伯顏（Bayan）を太師右丞相となし燕帖木兒の弟撒敦（Satun）を太傅左丞相となして共に政を執らしめ、次で撒敦死し燕帖木兒の子唐其勢（Tengis）左丞相となりしが、伯顏獨り政を執りて權を專にしければ唐其勢怒り曰く「天下はもと我が家の天下なり伯顏何を以て我が上に位するや」と、遂に伯顏を殺して帝を廢し諸王晃火帖木兒（Kungha Timur憲宗の孫にして昔里吉の子）を立てんと謀り露はる、伯顏よりて唐其勢を誅し皇后伯牙吾（Bayat）氏を殺す、皇后は燕帖木兒の女なるを以てなり（西紀一三三五年）。是より伯顏國政を專にし自ら諸衛の精兵を領し勢甚だ盛にして漸く不臣の志を抱く、其の養子脫脫（Hutukhta）は伯顏の弟馬札兒台（Machartai）の子なり、伯顏の專恣を見て憂苦し遂に意を決して父師に謀り、帝の近臣世傑班（Shaisupal）、阿魯（Aru）と共に伯顏を斥けんことを議す、會〻伯顏帝に出でゝ畋せんことを請ひしに脫脫帝に說きて行かしめず、世傑班、阿魯と謀り詔を草して伯顏の罪を擧げ、出して河南行省左丞相となし次でまた詔を下して南恩州陽春縣（廣東省肇慶府陽春縣）に安置せし

めしが途に病で死す、時に西紀一三四〇年なり。是に於て脫脫專ら政を執り悉く伯顏の行ふ所を更め、科擧を復し經莚を開きしかば中外翕然として賢相を得たりと稱せしが、時に元室の威既に衰へて朝廷の紀綱振はず、叛徒諸方に起りて海內漸く亂るゝに至れり。

第四十五章　元末の擾亂と群雄の興起

元室衰亡の原因　**(一)繼承の爭と權臣の專恣**　元室の常弊として繼承の際必ず紛擾あり、是れ長子相續法を採らずしてフリルタイ大聚會の決議により後嗣を推戴せるを以てなり。故に國初既に太宗窩濶台の子孫と拖雷の子孫との爭あり、また世祖忽必烈と其の弟阿里不哥との爭ありき、而して成宗以後其の爭一層甚しく權臣擁立の功を恃み交〻起て威福を弄せしかば、帝室漸く微弱となるに至れり。**(二)財政の紊亂と交鈔の濫發**　世祖の時收斂の臣を用ひて財政の急を救ひ、また其の彌縫策として交鈔を行ひしより後其の濫發次第に甚しく、爲めに交鈔の價格益〻下落して順帝の時に至りては全く通用の効力を失ひ、物價益〻騰貴して士民の困乏其の極に達し、遂に亂を懷ふに至りぬ。**(三)漢族の憤慨**　世祖初め史天澤、劉秉忠、許衡等を重用して學校を興し文敎を盛にし、文宗また唐宋の制に倣ひ科擧を設けて士を採り、順帝の時また科擧を復す、故に元朝は漢人才學の士を用ひしこと少なからざりしが、將相の重職は蒙古人に委ね其の下には契丹人、女眞人、唐古特（Tanghut）人、康里（Kanli）人、畏兀兒（Uigur）人、欽察（Kipchak）人、波斯

人等を多く任用し、漢人及び南人は常に其の下僚に用ひらるゝのみなりしかば、夷狄の屈辱を受くるものとして敵愾心を起し、常に報復の念を懐きて機の到るを待てり。(四)**喇嘛教の弊害**　世祖喇嘛教を尊崇せしより喇嘛の勢力強大となりて時に民産を奪ふも官吏は之を逮捕する能はず、姦悪の徒は其の勢に附きて罪網を免かるゝを得しかば賞罰の途廃し、また喇嘛は納税の義務なきが故に農民は其の部民と稱して田租を輸せざりしかば歳入漸く減じ、殊に世祖始めて喇嘛八思巴を帝師に拝せしより歴代の帝王皇后皆帝師に就きて佛戒を受け佛事供養の費貲られず、武宗の如きは深く之を信じて大に舊制を破り、遂に宋の諸陵を發掘するに及び漢族の憤怨を爆發せしめしが、更に順帝の時に至りて其の弊害最も甚しく、國庫益〻缺乏して人民に厚斂せざるを得ざるに至り、方に物價騰貴に苦しめる人民は負擔の重きに堪へずして皆亂を懐ふに至りぬ。(五)**順帝の淫虐**　然るに順帝は即位以來淫樂を事として國政を顧みず、元室の威嚴地に墜ちて盜賊各地に蜂起するも朝廷之を制する能はず、次で兵民十七萬を發して黄河を治するに及んで民心益〻離畔し、豪傑四方に崛起して元室遂に崩壊するに至れり。

群雄の興起と擾亂　順帝即位の後幾許ならず、西紀一三三七年廣東の朱光卿其の黨と衆を聚め反して大金國と稱し、河南の棒胡及び四川の韓法師もまた亂を作し、翌年漳州の李志甫、袁州の周子旺相次で起りしも幾許ならずして皆平定せしが、西紀一三四一年には湖廣の猺賊、一三四三年には遼陽の吾者野人(Ucherghasin)、一三四五年には連城(福建省汀州府連城縣)の羅天麟、靖州の猺吳天保、廣西の峒猺相前後して亂を作し、一三四七年には長江沿岸にもまた盜賊起りぬ。**方國珍起る**　次で西紀一三五一年河の南北の兵民十七萬を發して黄河の故道を治め、人民の困苦を顧みざりしが、西紀一三四八年に至り臺州の方國珍亂を作し勢頗る猖獗にして是より盜賊四方に起りしかば天下また元室を怨まざるものなく、群雄相次で蜂起するに至れり。**韓山童劉福通起る**　初め欒城の韓山童白蓮會を以て衆を惑はし自ら彌勒佛と稱せしが、遂に西紀一三五一年劉福通等と共に兵を擧げ紅巾を以て號となす、既にして韓山童は檻にせられしが福通の勢盛にして潁州を攻破し、遂に朱皐に據り汝南府及び光息二州を陷れて衆十萬に上れり。**李二及び徐壽輝起る**　時に蕭縣の李二も其の黨趙均用、彭早住と兵を起し徐州を攻陷して之に據り、羅田の徐壽輝また鄒普勝、倪文俊と兵を擧げて蘄水及び黄州路を攻陷し、遂に帝と稱して國を天完と號し、更に漢陽、武昌の諸軍を破りまた江州を下しぬ。**郭子興起る**　西紀一三五二年定遠の郭子興また其の黨孫德崖等と兵を擧げ、攻めて濠州(安徽省鳳陽府)を陷れ之に據りて勢頗る盛なり。是に於て順帝各行省に詔し兵を發して諸路の亂をなすものを討伐せしめ、右丞相脱脱諸軍を率ゐて李二を徐州に破りしかば、李

二は遁走し趙均用、彭早住は濠州に走りて郭子興に依りしが、既にして趙均用濠州に據りて王と稱するに及び、郭子興は別に萬人を領して滁州に入り王と稱せり（西紀一三五二年）。**張士誠起る**　西紀一三五三年泰州の張士誠また其の弟士德、士信と共に兵を擧げて泰州を陷れ、遂に高郵に據りて誠王と稱し國を大周と號しぬ。此の年江浙平章政事卜顏帖木兒（Puyan Timur）等兵を會して徐壽輝を討ち、江州を復し進んで蘄州に克ち徐壽輝を蘄水に破りしかば、徐壽輝は僅に身を以て免かれたり。**朱元璋起る**　朱元璋の先世は沛に家し後泗に走り父世珍に至りて濠の鍾離（安徽省鳳陽府臨淮縣）に徙る、元璋年十七父母及び三兄を失ひ孤となりて依る所なく僧となりて諸州に遊食し、後また濠に歸りしに會〻盜賊竝び起りしかば濠城に入りて郭子興に從ひ、次で郭子興の勢衰ふるに及び別に徐達、湯和、費聚と南の方定遠（安徽省鳳陽府定遠縣）を略し、李善長に遇ひ與に語て大に悅び共に滁州を攻めて之を陷る、時に西紀一三五三年なり。**哈麻脫脫に代はる**　西紀一三五四年張士誠遂に揚州を破りまた肝胎及び泗州を降すや、脫脫諸王諸省の軍を總制して之を討ち、進んで張士誠を高郵に攻めて之を破りしかば張士誠の勢大に蹙まれり。然るに平章政事哈麻（Kamar）脫脫と隙あり人をして脫脫を劾せしむるや、順帝遂に脫脫を斥けて淮安に安置し泰不花（Taiita Buka）をして其の軍を總べしめ、後また脫脫を雲南に竄す。是に於て哈麻左丞相となり其の弟雪雪（Tusu）

御史大夫となり、國家の大柄悉く兄弟に歸し元の兵威頓に衰へしが、順帝毫も之を患へず龍舟を造りて內苑に浮べ宮女と遊宴して政事を怠りければ賊勢益〻熾になれり。西紀一三五五年徐壽輝は倪文俊を遣はして汚陽を陷れ劉福通等は韓林兒（韓山童の子）を迎へて主となし小明王と稱して亳州に據り國を宋と號す。既にして知樞密院事答失八都魯（Tash Patoro）宋軍を擊破し遂に亳州を圍みければ、劉福通韓林兒と共に遁れて安豐に走りしが、後劉福通汴梁を攻め遂に兵を分ちて山東を略し、次で汴梁を取り韓林兒を奉じて之に居り、また其の將關先生は遼州を破り塞外の諸郡を掠め、遂に上都を破りて宮闕を燒けり。時に張士誠もまた苗帥楊完者を殺して益〻勢を振ひ、朱元璋は是より先き滁州より計て和州を拔き江を渡り襲うて太平路を取り、江寧、集慶を破り諸將を遣はして鎭江、廣德を下しまた親ら寧國を取り、次で諸將を遣はして江陰及び池徽の諸州を下し威江東に振へり（西紀一三五六年）。**陳友諒起る**　初め汚陽の陳友諒は徐壽輝、倪文俊の兵起るに當り往て之に從ひ、遂に兵を領して元帥となりしが、倪文俊專恣を極め西紀一三五七年徐壽輝を殺さんと謀り克たずして黃州に奔るや、陳友諒釁に乘じ倪文俊を襲殺して其の軍を併せ、明年安慶、龍興を陷れて盡く江西諸路を下し、また其の黨を遣はして信州を陷れ、西紀一三五九年遂に徐壽輝を江州に移し自ら漢陽に居りて漢王と稱せしが、明年徐壽輝を殺して自ら皇帝と稱し國を漢と

號しぬ。**明玉珍起る**　是より先き隨州の明玉珍亂を作し次で徐壽輝に降りて沔陽を守り、之を久うして重慶を取り成都及び嘉定を陷れて蜀に據りしが、陳友諒の徐壽輝を殺すに及び之を討たんとして果さず、西紀一三六二年雲南を取りて自ら隴蜀王と稱し、後また帝と稱して國を夏と號せり。

朱元璋の強盛　**群雄を掃蕩す**　此の間朱元璋は婺州を取りて寧越府と名づけ、次で使を遣はして方國珍を招きしに方國珍遂に溫台慶元の三郡を以て來り附きければ、次で常遇春を遣はし衛處の二州を陷れて之を取れり（西紀一三五九年）。既にして陳友諒其の將張定遠を遣はして安慶を取るや、朱元璋舟師を率ゐて陳友諒の將傅友德等を降し、長驅して江州に向ひ大に陳友諒の軍を破り、遂に江州を拔きて陳友諒を武昌に奔らし、諸軍を下し龍興を取りて江都府となす（西紀一三六一年）。會〻張士誠の將呂珍兵を率ゐて安豐を圍み韓林兒急を朱元璋に告ぐるや、朱元璋往て之を救ひしが未だ到らざるに呂珍既に劉福通を殺して安福に據りければ、朱元璋擊て之を走らし韓林兒を以て歸り之を滁州に居らしむ。時に陳友諒其の疆域日に蹙まるを怒り、大に舟艦を治め銳を盡くして江都を圍みしかば、朱元璋兵を率ゐて之を救ひ大に鄱陽湖に戰て勝ち、陳友諒は流矢に中りて死し長子善兒は執へられ次子理は武昌に走れり（西紀一三六二年）。是に於て西紀一

三六四年朱元璋國を吳と稱して王位に上り金陵（江蘇省江寧府）に都し、自ら將として武昌を攻めて陳理を降しければ、湖廣、江西の諸郡相次で皆朱元璋に降りぬ。次で西紀一三六六年朱元璋また淮安の諸路を下し、明年徐達、常遇春を遣はして張士誠を平江に擊て之を擒にし、湖州、杭州、紹興、嘉興、平江の諸路を歸服せしめたり。**國を明と號す**　朱元璋既に群雄を掃蕩して江南を撫有するに至り、西紀一三六七年遂に徐達、常遇春に命じ兵二十五萬を率ゐ北侵して元を伐たしめ、また湯和を遣り慶元を攻めて方國珍を降し、西紀一三六八年帝位に即きて國を明と號し、次で湯和をして福建を陷れしめ廖永忠をして廣東を取らしめ、楊璟をして廣西を併さしめたり。

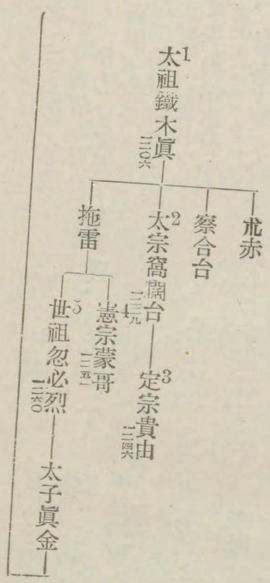
元の內訌　**察罕帖木兒の功績**　元は西紀一三五六年右丞相哈麻廢立を謀りて誅せられ、樹思盥（Chaksukan）右丞相となりて政を執り、宦者朴不花（Pukbukha）と相表裏して姦をなし、四方の警報及び將士の功狀を壅塞して通せず、順帝また淫樂に溺れて政務を顧みざりしかば益〻禍亂を養成せしが、外には察罕帖木兒（Chagan Timur）ありて善く兵を用ひ、關陝河東を平らげ遂に汴梁を復して河南を定め、また山東を復し韓林兒の將田豐を降せしが、後幾許ならず田豐また叛きて察罕帖木兒を殺せしかば、其の子擴廓帖木兒（Kuku Timur）兵を領して賊を討じ遂に田豐等を誅し、悉く山東を平らげ兵を引きて河南に歸りぬ（西紀一三六二年）。**擴廓帖木兒孛羅帖木兒**

の攻爭と元廷の紛爭　是より先き答八失都魯の子孛羅帖木兒（Polo Timur）父の死後代はりて其の軍を領し、石嶺關以北を守りて大同に居り、察罕帖木兒は石嶺關以南を守りて河南に居りしが、山西晉冀の地はもと察罕帖木兒の平定せる所なるに、孛羅帖木兒の兵大同に駐まるを以て之を併據せんと欲し、是より二人相善からず孛羅帖木兒屢〻察罕帖木兒の地を侵し、次で察罕帖木兒の殺さるゝに及びまた其の子擴廓帖木兒の地を侵すに至り、西紀一三六三年遂に其の將を遣はし陝西を襲うて之に據らしめしが、擴廓帖木兒の將に破られて降れり。時に丞相搠思監の姦曲著るしきに至り遂に監察御史燕赤不花（Yakchi Bukha）等の劾奏する所となりて免ぜられしが、宦者朴不花もまた內は皇太子愛猷識里達臘（Ayur Shiridara）に侍し、外は搠思監と結托して驕恣不法なりしかば、監察御史也先帖木兒（Yessen Timur）、傅公讓等其の姦邪を劾奏し、御史大夫老的沙（Ratesha）また之を上聞せしに、皇太子皇后と共に老的沙を忌みて帝に僭し、帝の母舅の故を以て雍王に封じて外に出さしめければ、老的沙大同に奔りて孛羅帖木兒に依り其の軍中に留まれり（西紀一三六三年）。**愛猷識里臘達羅孛帖木兒の攻爭**　是に於て搠思監皇太子の旨を受け朴不花と謀り孛羅帖木兒老的沙と不軌を謀ると誣告し、其の官爵を削り兵柄を解かんとせしに、孛羅帖木兒命を受けざりしかば、擴廓帖木兒に詔して之を討たしめんとす、孛羅帖木兒之を聞き禿堅帖木兒（Tuker Timur）を遣はして闕に向はしむ、官兵逆戰して利あらず、皇太子遁れて古北口の外に走れり。帝已むを得ず搠思監、朴不花二人を執へて之を殺すを聽るし、孛羅帖木兒の官爵を復するに及び禿堅帖木兒兵を引きて大同に還りぬ。既にして皇太子宮に還り憤恚已まず擴廓帖木兒に命じて孛羅帖木兒を討たしむ。是に於て禿堅帖木兒また老的沙と大擧して闕に向ひ先鋒居庸關に入る、皇太子拒ぎ戰ひて利あらず冀寧に走り、孛羅帖木兒京師に入りて左丞相となり次で右丞相に進みて國政を專にせり（西紀一三六四年）。皇太子また大に諸路の兵を發して擴廓帖木兒と共に孛羅帖木兒を討ち、孛羅帖木兒迎へ戰ひて大に敗る、時に孛羅帖木兒荒淫度なく酗酒人を殺し喜怒測られず、威順王の子和尙（Khoshan）遂に帝の密旨を受けて孛羅帖木兒を刺殺し、併せて老的沙、禿堅帖木兒を誅せしかば、帝は皇太子を召し皇太子は擴廓帖木兒と共に京師に還りぬ（西紀一三六五年）。**擴廓帖木兒叛す**　是に於て擴廓帖木兒左丞相となり河南王に封ぜられて南方平定の命を受けしが、功を恃んで專橫なりしかば帝其の異志あるを疑ひ皇太子をして天下の軍馬を總制せしめ、其の兵柄を奪ふに及び西紀一三六七年遂に太原に據て叛けり。然るに此の時明軍既に山東河南を定め將に京師に迫まらんとせしかば、帝は擴廓帖木兒の官爵を復し南下して之を拒がしめんとせしが事遂に成らず、既にして元軍到る處に敗れ明軍日に迫まり來れり。

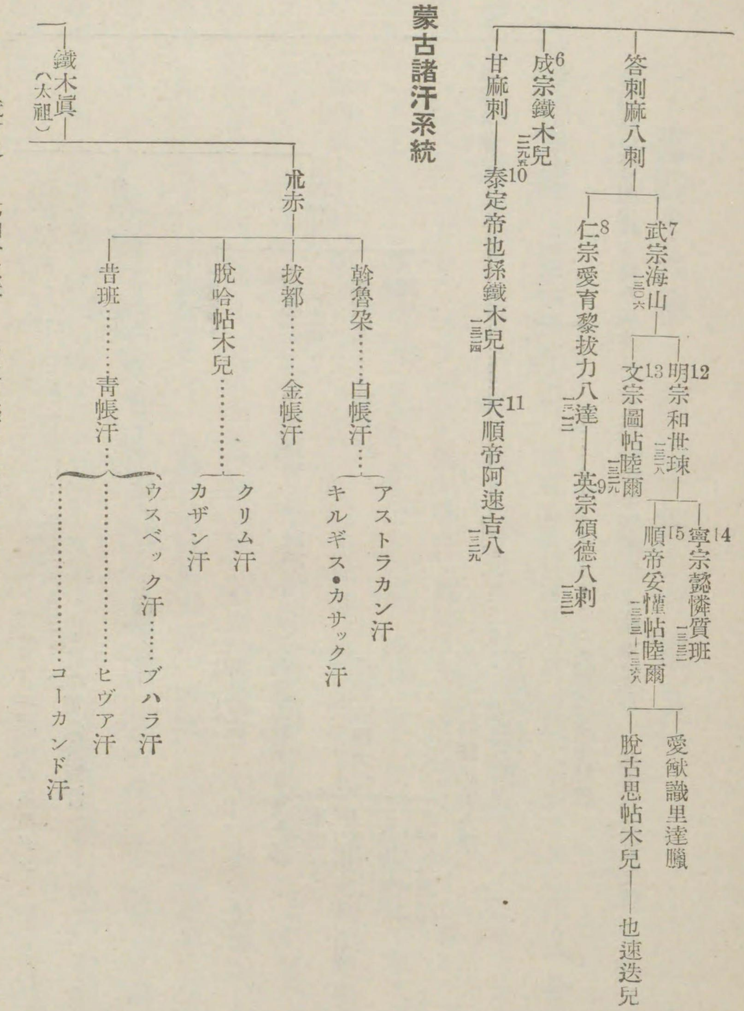
元の滅亡

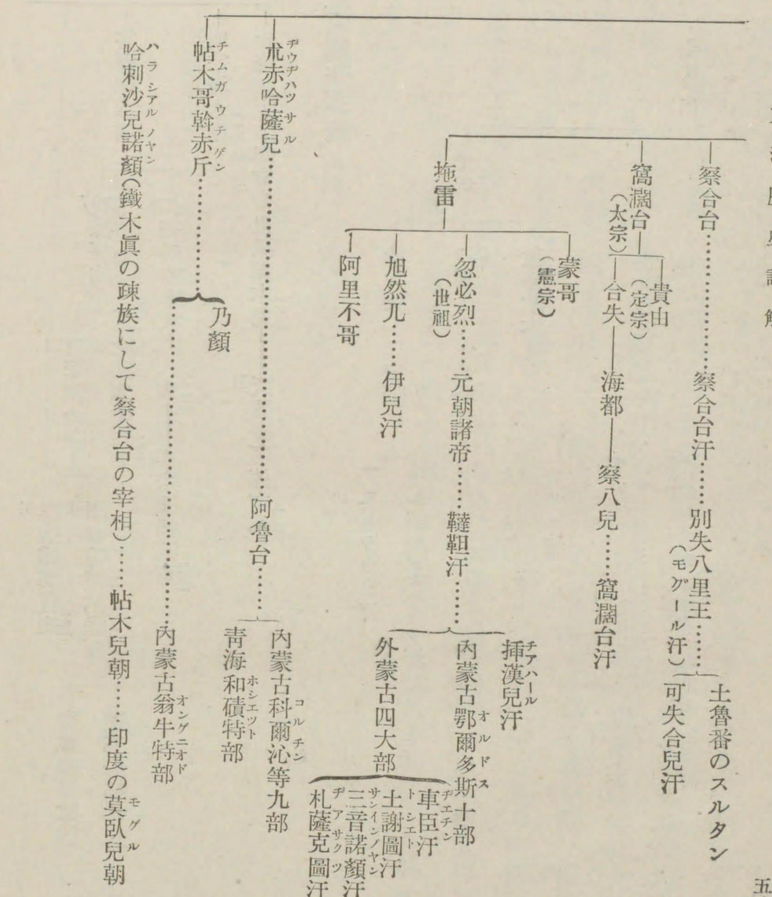
是より先き朱元璋は徐達、常遇春等を遣はし兵二十五萬を率ゐて北伐せしめ、淮水より河水に入り沂州に克ち嶧州及び益都を取りければ、萊州の諸郡相次で降り山東悉く明に歸す（西紀一三六七年）。是に於て西紀一三六八年徐達、常遇春等諸將を臨清に會し、進んで河北に入り通州を陷れて大都に逼まりければ、順帝遂に后妃及び皇太子と兵を避け夜半に建德門より出で北走して上都に赴き大都遂に陷れり。常遇春等追擊して北河に至り其の皇孫を擒にして還る、是に於て元亡ぶ、時に西紀一三六八年七月なり。元は太祖の即位より世祖支那を一統するに至るまで五代七十四年、而して世祖の一統より順帝に至るまで十代八十九年、合計十五代百六十三年にして亡べり。

元の帝系（十五代、百六十三年）



蒙古諸汗系統





第四十六章　諸汗國の盛衰

窩濶台汗國　**海都以後の形勢**　蒙古帝國は海都の死後叛王相次で元に降り、世祖以來三十餘年の擾亂一時鎭定せしが、既にして察合台汗篤哇（Dua）の子也先不花（Yessen Bukha）等と窩濶台汗察八兒（Chapar）の子弟等と釁を構へて戰起り西北また亂る。かくて西紀一三〇六年兩軍忽氈（Khojend）と撒麻耳干（Samarkand）との間に戰ひ、察八兒先づ敗れ次で戰て篤哇敗るゝに及び和議成りしが、後幾許ならず篤哇察八兒の不備に乘じて之を攻め、其の所領怛邏斯（Talas）、フェナケット（Fenaket シール河畔にあり）等を蹂躙しぬ。時に海山阿爾泰地方に鎭し、また察八兒の所部を也兒的石（Irtysh）河に襲うて其の家族營帳を執へ餘衆悉く潰えしかば、察八兒僅に三百人を以て篤哇に奔り潰衆また篤哇に歸せり。**窩濶台汗國の滅亡**　西紀一三〇六年篤哇死して其の子款徹（Kunjuk）立ち二年ならずして死し、脫哈帖木兒（Tuka Timur）の弟タリク（Taliku）嗣ぎしに、篤哇の子怯伯（Kuebek）飮宴に乘じ之を刺殺して自立せしかば、察八兒其の兄弟と怯伯を襲ひ敗れて伊犂河を渡り元に歸す、時に西紀一三一〇年にして武宗の至大三年なり。是に於て海都の舊地

は察合台汗に併せられ、窩濶台汗國遂に亡びぬ。後仁宗の時察八兒汝寧王に封ぜられ、其の子完者帖木兒（Kunjuk Timur）を經て孫忽剌台（Khulatai）に至り、泰定帝の死後其の太子の爲めに兵を起して文宗の兵を拒ぎ、敗死して終る所を知らず、窩濶台汗の後遂に絶えたり。

窩濶台汗世系

- 窩濶台（太宗）
  - 貴由（定宗）
    - 忽察（Khuja Ogul）
    - 腦忽（Naghu）
    - 禾忽（Kughu）
  - 濶端（Kutan）—翊戴（Yukutai）
  - 濶出（Kuchu）…失烈門（Shiramun）
  - 哈喇察兒（Karajar）
  - 合失（Kashi）—海都（Kaidu）
    - 察八兒（Chapar）—完者帖木兒（Kunjuk Timur）…忽剌台（Khulatai）
    - 烏魯斯（Urus）
    - 達喀察兒（Toghachar）
    - 禿曲滅（Tikumet）
  - 合丹（KadanOgul）—キプチアク・オグル（Kipchak Ogul）
  - 蔑里（Melik）

察合台汗國　**八剌以後の形勢**　察合台汗は八剌（Borak）の時海都に黨して世祖に叛きしが其の子篤哇に至りて成宗に降り、西紀一三〇六年篤哇死して款徹立ち二年ならずして死し脱哈帖木兒の弟タリク嗣ぎイスラム敎徒なりしかば、即位以來領内に其の敎を弘布するを以て任とせり。然るに察合台家の諸王は篤哇の子を立てんと謀り、西紀一三〇九年篤哇の第三子怯伯其の黨と宴飲に乘じタリクを刺殺して自立しぬ。既にして窩濶台汗國亡びて其の地は多く察合台汗に歸し、諸將議して怯伯の兄也先不花（Yissun Bukha）を立てんとす、時に也先不花元の朝廷にあり、怯伯歡んで之に應じ也先不花歸りて主權を得たり。　**元及び伊兒汗國との關係**　會〻元の武宗死して仁宗立ち武宗の長子和世㻋（後の明宗）太子たらざるを怨みて兵を擧げ、敗れて漠北に奔り阿爾泰山の西北に至り察合台汗に投ずるや、也先不花之を元に納れんとして仁宗の師と戰ひしが、敗れて其の東境を略せられしかば西に向て地を擴めんと欲し呼羅珊に侵入す。時に伊兒汗國はウルジアイツ（Uljaitu）位にあり、察合台軍を邀へ擊ちて之を破りければ、也先不花志を得ずして引き還り、察合台汗の國勢是より振はず、次で也先不花死して弟怯伯立ち、西紀一三二〇年伊兒汗不賽因（AbuSaid）と和を講じて好を通ぜり。　**東西分裂**　既にして察合台汗國東西に分裂し、東部は初め可失合兒（Kashgar）に都し後葉爾羌（Yarkand）及び阿克蘇（Aksu）に都してモグリスタン

(Moghulistan) 即ち支那土耳其斯坦及び中央亞細亞の東北部を領し、西部は撒麻耳干(Samarkand)に都して河間の地 (Mavar-un-Nahr) 即ちトランス・オクサナ (Trans Oxana) を領しぬ。かくて西部は怯伯の後位を嗣ぐもの皆庸暗にして政權全く宰相 (Amir) の手に歸し、廢立數〻行はれて四十年間に十五汗代はり立ち、叛亂相次で起りしかば河間の諸酋長は皆獨立するに至れり。西紀一三六〇年東部の主にして篤哇の孫なるトグルク・チムル (Toghluk Timur) 西部に侵入して之を併合せしが、其の死後西部の宰相帖木兒 (Timur) 勢を得て獨立し、西紀一三八〇年遂に東部を併合して察合台汗國を一統しぬ。

察合台汗世系

1 察合台
- 2 合剌旭烈 (KaraHulagu)—5 ムベレック・シアー (Mubarek Shah)
- モアツガン (Mcatugan)
  - イッスン・ヅア (Yissun Dua)—6 八剌 (Borak)—9 篤哇 (Dua)
  - 不里 (Buri)—カダミ (Kadami)
    - 3 也速蒙哥 (Isu Mangu)
      - 8 脫哈帖木兒 (Tukha Timur)
        - 11 タリク (Talik)
      - オラク・チムル (Orak Timur)—ヤッスル (Yassur)—21 カザン (Kazan)
    - 拜迭兒 (Baidar)—4 阿魯忽 (Algu)

—サルバン (Sarban)—7 ニクパイ (Nikpai)
- 10 欵徹 (Kunjuk)—プラッド (Pulad)—20 ハマッド (Muhammad)—アヂル (Adil)
- 13 也先不花 (Yissun Bukha)
- 12 怯伯 (Kuebek)
  - イミル・ホージア (Imil Khoja)—トグルク・チムル (Toghluk Timur)
    - 14 イルチ・カダイ (Ilchi Kadai)—ヅルヂ (Durji)—カビル (Kabil)
    - 15 篤來帖木兒 (Dure Timur)—ブズン (Buzun)
    - 16 塔兒石里 (Tarmashirin)—サンジアール (Sanjar)
  - スルグ・オグル (Surgu Oghul)—バヤン・クリ (Bayan Kuli)
  - アブカン (Abukan)
    - 17 ジンキシアイ (Jinkishai)
    - 19 也先鐵木兒 (Yissun Timur)—チムル・シアー (Timur Shah)

伊兒汗國　**旭烈兀の晚年**　初め欽察汗別兒哥 (Berke) はイスラム敎を信奉せるを以て旭烈兀が八吉打の哈利發を討滅し、また東羅馬と好を通じて基督敎徒を保護するを怒り、遂に旭烈兀に對して戰を宣し、ノガイ (Nogai) を將として伊兒汗國に侵入せしめければ、旭烈兀は西紀一二六

二年兵を率ゐてノガイをデルベンド（Derbend）に破りしが、既にしてテレク（Terek）河畔に敗れ西紀一二六三年四月タブリズに歸りぬ。時に埃及の軍隊をエウフラト河方面に出すことを約せしかば、是より旭烈兀はデルベンド方面に欽察軍を防ぎシリア方面に埃及軍と戰ひしが、既にして旭烈兀冬陣をチアガツ（Chagatu）河畔に營むに當り、西紀一二六五年二月四十八歳を以て死せり。**阿八哈の事蹟**　是に於て旭烈兀の長子阿八哈（Abaka）マザンデラン（Mazanderan）より至り、宗族諸王宿將等の會議を開き遺言によりて位に即き、次で東羅馬皇帝ミカエル・パラエオロゴズ（Michael Palaeologos）の女マリア（Maria）を娶りて妃となす。是より東羅馬は益〻伊兒汗と親しむに至りしが欽察汗は之を喜ばず、西紀一二六六年ノガイまたデルベンドを越えて入寇し、次で別兒哥また大擧して來りしかば、阿八哈親ら將として之を防ぎしに、別兒哥はチフリス（Tiflis）に至りて死し欽察軍遂に引き還りぬ、是に至りて欽察と伊兒汗との交戰終りを告ぐ。是より先き西紀一二六五年元の世祖は海都を攻撃すべき條件を以て察合台汗八剌にトランス・オクサナを與へしが、四年を經て八剌は海都と和し其の援助を得て呼羅珊を侵し尼沙不耳に進みしかば、阿八哈は直に進撃して西紀一二七〇年之を哈烈（Herat）附近に破り、阿八哈は身を以て免かれ數月を經て病んで死せり。此の間埃及の算端ビバルス（Bibars）別兒哥と同盟を結びルスの勢益〻盛となり、アルメニア王ハイトン（Hayton）を屈して多數の城地を割讓せしめ遂に全力を傾注してアレッポより北に向ひ、西紀一二七七年蒙古軍をアブリスチン（Abulistin）に破りケーザリア（Caezarea）に入りしが、小亞細亞の諸王侯阿八哈を畏れて來り合せざるを以て的迷失吉（Damascus）に退き、會〻病んで死し埃及亂るゝや阿八哈は兵を率ゐてシリアを侵せしが敗れて還り、西紀一二八二年遂に死せり。當時利害を共にする基督教徒と蒙古との關係親密にして英吉利王エドワルド（Edward）一世は西紀一二七四年書を阿八哈に送り羅馬法王ニコラス（Nichlas）三世また西紀一二七八年フランシスコ派（Franciscan）の宣教師五人を阿八哈及び元の世祖に派遣して布教せしめたりといふ。**阿魯渾の簒立**　阿八哈死するや其の弟チグダル・オグル（Tigudar Oghlu）選ばれて立ち、イスラム教に改宗してアーマッド（Ahmad）と稱せしが、阿八哈の子阿魯渾（Arghun）簒奪の志あり遂に諸將に勸められて兵を擧げ、西紀一二八四年アーマッドを執へ之を殺して位に即けり。阿魯渾また基督教徒に對して大に好意を表し、西紀一二九一年には十字軍に應援して聖地恢復を助けしが、また羅馬法王及び歐羅巴諸國と使節を通じて交はりしかば、西紀一二八九年羅馬法王ニコラス四世はフランシスコ派の僧正モンテ・コルヴイノ（Joan de Monte Corvino）に親書を齎らして阿魯渾を訪はしめ、次で支那に赴きて布教に力めしめき。西紀一二九一年阿魯

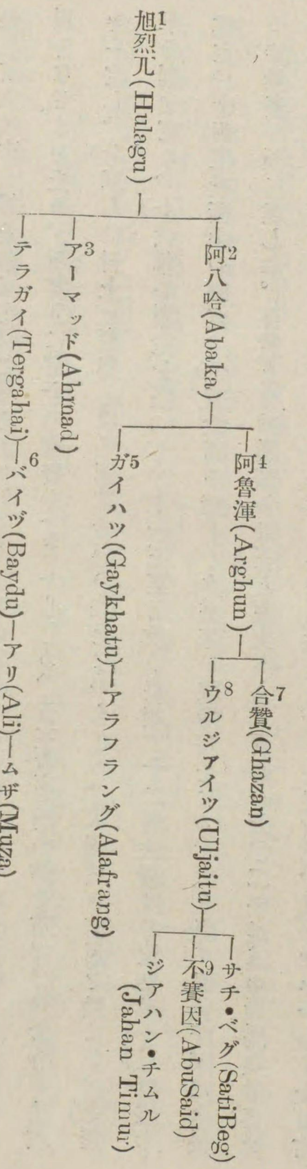
渾死して諸將其の弟ガイハツー(Gaykhatu)を立てしに、庸暗にして奢侈を好み財政紊れて諸將の望を失ひ、旭烈兀の孫バイヅ(Baypu)兵を擧げて叛き、遂にガイハツーを執へ之を殺して位に即きしが、阿魯渾の子合贊(Ghazan)また兵を擧げバイヅを捕殺して位に即く、時に西紀一二九五年なり。**合贊の治**　合贊もと佛教を崇信せしが位に即くやイスラム教を奉じて國民の信望を收め、令を下して基督教、猶太教、佛教の會堂寺院を破壞せしが、後之を止めて諸教徒を保護しぬ。西紀一二九九年合贊埃及の內訌に乘じてシリアを侵略せしが、埃及の援軍至るや蒙古軍退却してシリアはまた埃及軍の恢復する所となれり。此の間トランス・オクサナの察合台汗クトルク・ホージア(Kutluk Khoja)兵を出して波斯に侵入し、到る處を劫掠して引き還りぬ。西紀一三〇一年合贊再びシリア征伐の途に上りしが效を奏せずして退き還り、西紀一三〇三年またエウフラト河を渡り多少の勝利を得て引き還り、次でまた兵を出さんとせしが病起り、其の起たざるを知るや遺言して位を弟ウルジアイツ(Uljaitu)に讓り、西紀一三〇五年五月を以て死せり。合贊賢明にして政を親らし、信仰に篤く武勇に秀で、常に士氣を鼓舞し、蒙古語の外亞拉比亞、波斯、印度、迦濕彌羅、圖伯特、支那、希臘等の諸國語にも多少通じ、說史を好み、工藝を愛し、博物醫學に通曉し、學者を優遇し人を相るに長じ、公平を重んじ慈惠を好み、自ら奉ずること質素なりきといふ。其の

憲政改革の主もなるものを擧ぐれば、(一)財政紊亂の後を受け府庫の充實を計ると同時に稅法を改良して人民の負擔を輕くし、(二)從來行はれたる高利の貸金を禁じ、(三)使節妄りに往來して沿道の累をなせるを止め、(四)妄りに宿舍の徵發をなさゝらしめ、(五)王璽濫用の弊を防ぎ、(六)命令の法式を一定し、(七)軍人に封土を割與し以て軍隊給與の缺乏なからしめ、(八)國境の防備を嚴にし、(九)禁軍の制を定め、(十)武器の製造を盛にし、(十一)王室財政の整理、(十二)司法制度の改良、(十三)群盜の鎭定、(十四)度量衡法の制定、(十五)飮酒の禁、(十六)婚嫁の取締等是なり、故を以て伊兒汗國は合贊の時最盛の極に達しぬ。合贊また歐羅巴の帝王と親交あり、西紀一三〇二年には東羅馬皇帝アンドロニコス(Andronicos)使を遣はして公主を合贊に嫁せんことを提言し、且つオスマンリ土耳古(Osmanli Turk)の侵寇を阻止せんことを請ひ、英吉利王エドワルド一世また使を遣はして合贊をタブリズに訪はしめたりといふ。**ウルジアイツと不賽因**　合贊死するや其の弟マホメッド・フダバンダ(Mahomed Khudabanda)立ちウルジアイツ(幸運の義)と號してスルタニア(Sultania)に都し、次で呼羅珊に侵入せる察合台軍を擊退し、東羅馬皇帝アンドロニコスと婚を通じて之を援け、また西歐羅巴の帝王と使聘を通じぬ。西紀一三一六年ウルジアイツ死して其の子不賽因(AbuSaid)嗣ぐ。年僅に十二なるを以て姊の夫チウバン(Chupan)政を攝せしが、貴族漸く跋扈して命を拒み國勢

大に衰ふ、後不賽因長じてチウバンを殺し、其の女八吉打可敦(Baghdad Khatun)を奪ひ立てゝ妃となせり。西紀一三三四年欽察汗月即別(Uzbeg)デルベンドより侵入せんとする報あり、不賽因之に對して兵を進めんとせしが翌年病んで死し、嗣なきを以て是より伊兒汗國遂に分裂せり。

伊兒汗國の末路　不賽因の死後内亂相踵で起り呼羅珊、シリア等皆離叛するに至り伊兒汗の勢大に衰へて版圖分裂せしが、後帖木兒の中央亞細亞に起るや波斯に侵入して悉く伊兒汗の領土を併呑せり。

伊兒汗世系



欽察汗國

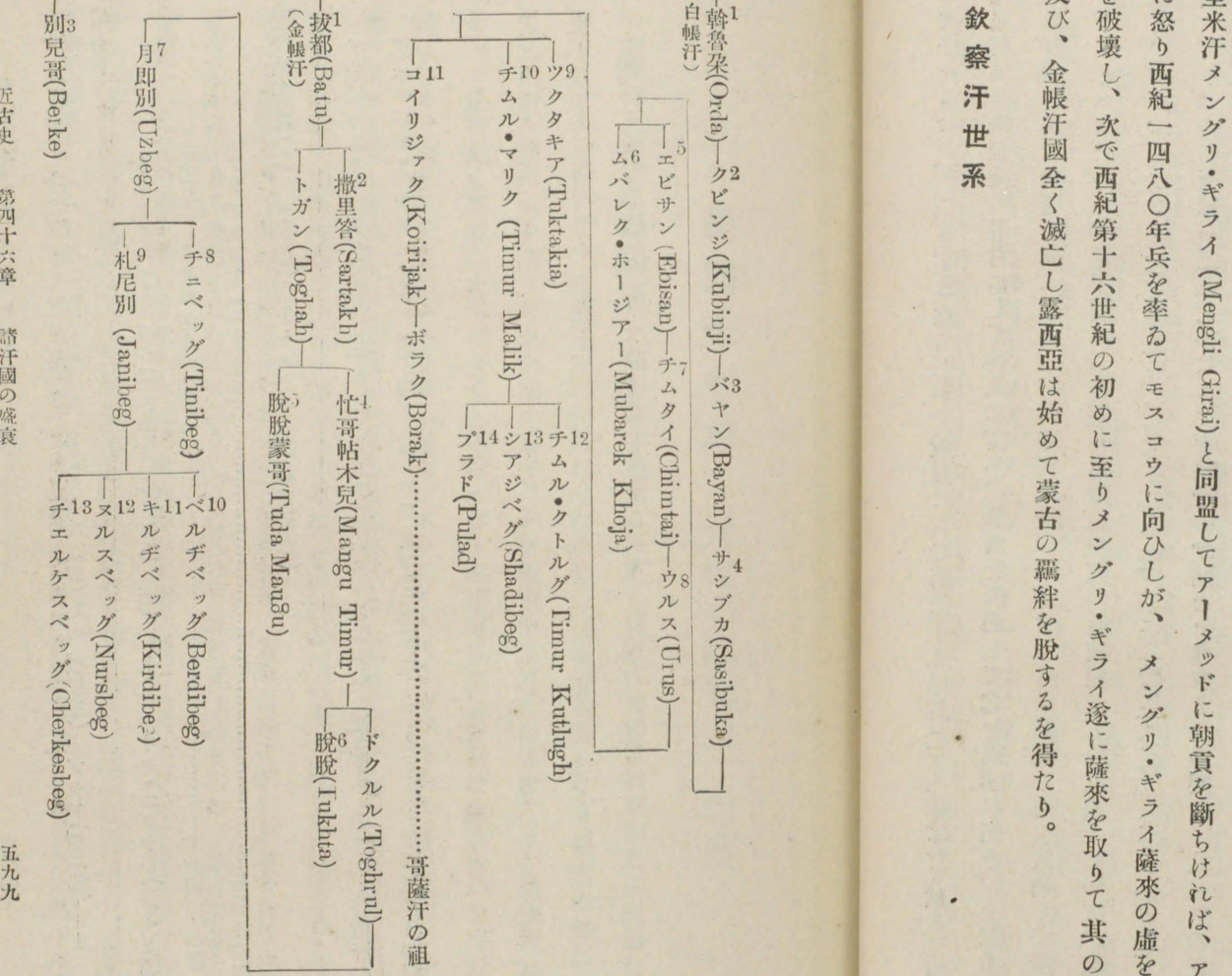
別兒哥及び忙哥帖木兒の事蹟　金帳汗は拔都西紀一二五五年死し其の子撒里答(Sartak)嗣ぎしが幾許もなく死し拔都の弟別兒哥(Berke)高加索地方より入りて嗣ぎ、欽察國全部にイスラム教を奬勵しまた自ら之を奉じぬ、故に是より薩來はイスラム教の中樞となり、また碩學の淵叢となれり。別兒哥また稅法を定め一般行政を整理し治績頗る見るべきものあり、然かも其の一代の大事件は波蘭の再征と旭烈兀との攻爭なり。西紀一二五八年ノガイ(Nogai)、ツラブカ(Tulabukha)の二將波蘭に入りてクラカウ(Cracow)を陷れ、オッペルン(Oppeln)のビトム(Bythom)に進み多數の基督教徒を虜にして引き還りぬ。旭烈兀及び其の子阿八哈との攻爭及び埃及の算端との交聘は前項伊兒汗國の記事中に述べたり。別兒哥の施政寬大なりしかば露西亞方面は平穩なりき、故にノヴゴロド(Novgorod)の太公アレクサンドル・ネヴスキイ(Alexander Nevski)よく蒙古に歸服して入朝四回に及べり。西紀一二六六年別兒哥兵を率ゐ伊兒汗國を侵してチフリスに死し、拔都の孫にしてトガン(Toghan)の子なる忙哥帖木兒立ち、窩濶台汗海都及び察合台汗八剌と通じ八剌を援けて伊兒汗阿八哈を擊ち、デルベンドを越えて侵入せしが八剌敗れて還れるを聞き軍を旋しぬ。一二八〇年忙哥帖木兒死して其の弟脫脫蒙哥(Tuda Mangu)立ち、次で其の姪ッラブカ立ち西紀一二八五年波蘭、リトワニア(Lithwania)、匈牙利に兵を出し、また一二八九年伊兒汗と戰ひしが共に著るしき成功なく、西紀一二九一年忙哥帖木兒の子脫脫(Tuktu)自立してま

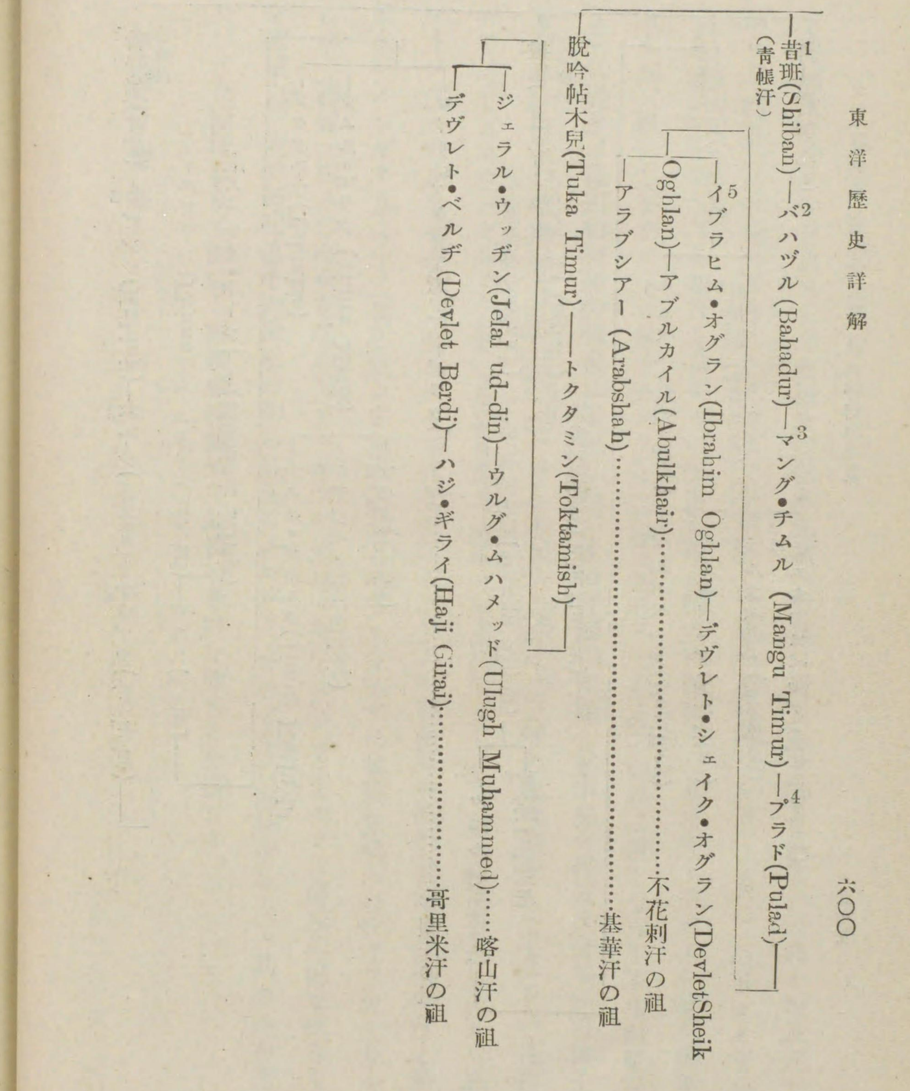
た伊兒汗と衝突せしが、ガイハツ立ちて伊兒汗となるに及び和を結べり。**月即別及び札尼別の治**　西紀一三一三年脱脱死して其の兄トグルル (Toghrul) の子月即別 (Uzbeg) 嗣ぐ、豪邁にして雄略あり、在位二十八年の間内はよく露西亞を服せしめ、外は伊兒汗と攻爭し、東羅馬及び埃及と使を通じて親交を修め、また公主を埃及の算端に嫁して姻戚關係を結べり、故に拔都別兒哥及び後のトクタミシ (Toktamish) と共に欽察の著名なる君主と稱せらる。會ゝトウエル (Tuer) 侯アレクサンドル命を拒むや、月即別モスコウ (Moscow) 侯イヴアン (Ivan) 一世に命じて之を伐たしめ。トウエルを陷れてアレクサンドルを逐ひ、其の弟コンスタンチン (Constantin) を立てゝトウエル侯となし、イヴアンを太公に任じて先づ露西亞全國の租稅を徵集し、然る後之を金帳汗に納むる特權を與へしかば、是よりモスコウ太公の權勢露西亞に盛なるに至れり。月即別またイスラム教を尊崇して其の僧侶學者を優遇せしが、また希臘教を保護し加持力教の布教を許しぬ。要するに月即別の時は金帳汗の威權赫々として國運隆盛を極め、露西亞の諸侯はよく服し、東羅馬及び埃及と親交を結び、また羅馬法王ベネヂクト (Benedict) 二十二世の使節、希臘教の法主、土耳古の公使、ジェノワ(Genowa)の紳商等の來朝を受くるに至りぬ、殊に當時ジェノワ人は欽察汗國に往來して盛に商業を營み、阿速 (Azov) 海附近は東西貿易の要衝となれり。西紀一三四〇年月即別死し

て次子チニベッグ (Tinibeg) 立ちしが、數月にして第三子札尼別 (Janibeg) 之を弑して位を簒へり。**札尼別の治**　札尼別は金帳最後の名君にして英氣に富み、學者を優遇して之を薩來に招き、また希臘教を保護し露西亞諸侯に特權を與へしかば、月即別の世に入貢せざりし諸侯もまた入朝して所領安堵を求めたりといふ。時に伊兒汗國は不賽因の死後旭烈兀の血統絶えて内訌起りしかば、札尼別兵を進めてアゼルバイジアン (Azerbaijan) を取りしが、既にして其の子ベルヂベッグ (Berdibeg) の爲めに弑せらる、時に西紀一三五七年なり。**金帳汗の分裂とトクタミシの興亡**　札尼別の死後欽察汗國亂れて簒弑相踵ぎ、拔都の裔なる金帳の血統全く絶え、二十年間に十五汗の廢弑を見るに至れり。時にアラル海の北に拔都の兄斡魯朶 (Orda) の裔なる白帳汗あり、また繼承の爭ありて内亂起りしが既にして帖木兒(Timur) の察合台汗國を統一するに及び、拔都の弟脱哈帖木兒(Tuka-Timur)の裔トクタミシ(Toktamish)を援けて白帳汗となせり。是に於てトクタミシは西紀一三八〇年金帳汗ムハメッド・ブラク(Muhamed Bulak)を襲うて之を殺し、自立して金帳汗となり遂に欽察汗國を統一するや露西亞を征して金帳の主權を恢復せんと欲し、西紀一三八二年兵を率ゐる露西亞に侵入してモスコウを下し、ウラヂミル(Vladimir)、烈也贊(Riazan)を焚きて諸侯を威服せしかば、勢に乘じて帖木兒を侮り花剌子模の讓渡を要求して拒絶せらるゝや、西紀一三八五年兵を率ゐてデルベン

ドを越えタブリズを攻めて之を陷る、帖木兒其の恩義に背けるを怒り西紀一三九一年及び一三九四年二回欽察に攻め入りてトクタミシを擊破し、故の白帳汗ウルス（Urus）の子コイリジアク（Koirijak）を立てゝ金帳汗となせり。帖木兒東に歸るや西紀一三九八年トクタミシまた薩來に歸りしが、既にしてウルスの孫チムル・クトルグ（Timur Kutlugh）の破る所となりて不里阿兒（Bulghar）に退き、後西伯利亞の曠原に戰死しぬ。**金帳汗國の末路**　帖木兒の侵入後金帳汗の領土再び分裂して白帳、喀山（Kazan ヴォルガ河畔に據る）、哥里米（Krim 黑海の北に據る）三汗の攻爭絕ゆることなく、後白帳汗クチック・ムハッメド（Kuchuk Muhammed）立ちて金帳汗となりしも號令諸部に行はれず、其の子アーメッド（Ahmed）の時に至りモスコウ太公イヴァン三世露西亞の諸侯を併せ、喀山汗と結び哥里米汗メングリ・ギライ（Mengli Girai）と同盟してアーメッドに朝貢を斷ちければ、アーメッド大に怒り西紀一四八〇年兵を率ゐてモスコウに向ひしが、メングリ・ギライ薩來の虛を衝きて市街を破壞し、次で西紀第十六世紀の初めに至りメングリ・ギライ遂に薩來を取りて其の地を併すに及び、金帳汗國全く滅亡し露西亞は始めて蒙古の羈絆を脫するを得たり。

欽察汗世系





第四十七章　元代の高麗及び印度

高麗と元との關係　高麗の北部元に歸す　高麗は元の世祖以來之に服屬して其の侵凌を受くること甚だしく、高宗元宗の間和州は既に元の雙城總管府となり、元宗の時崔坦西京(平壤)を以て元に附き其の兵を請うて之を鎭するや、元は西京を改めて東寧府となし慈悲嶺を劃して界となせり。是に於て高麗の北部は全く元の有となり達魯花赤(Darugachi 斷事官)を高麗に置きて之を鎭せしめ、國政を聽斷し軍糧を徵し婦女を求むること已まず。**元の干涉**　元宗の子忠烈王はよく元に事へて屢〻往來し、また鷹坊を置き畋獵を事とし遊宴淫佚に耽りしかば人民頗る苦しめり。會〻元の諸王乃顏海都に應じて叛きしが敗れ、其の餘黨哈丹來り侵せしかば忠烈王師を元に請ふ、元乃ち那蠻歹大王及び薛闍干等をして之を援けしめ、力を合せて哈丹を破りぬ。既にして元の世祖死して成宗立ち忠烈王また元に請うて位を其の子忠宣王に讓りしに、忠宣王多く舊章を更改し專檀にして元の命を用ひざりしかば、成宗惡みて之を廢し忠烈王をして位に復せしめたり。後世子(忠宣王)元に赴きて宿衞し、成宗の死後愛育黎拔力八達と謀りて武宗を擁立し、定策の功を以て瀋陽王に封ぜられ、忠烈王の死後還りて位を嗣ぐ、時に西紀一三〇九年なり。然るに忠宣王其の國

に居るを好まず西紀一三一四年位を其の子忠肅王に傳へ自ら燕京に淹留せしが、元の英宗立ちて鐵木迭兒政を執るに及び、宦者伯顏禿古思の爲めに譖せられ吐蕃に流されて居ること四年、泰定帝立つに及び赦されて歸り燕邸に死せり。忠肅王元の干渉を受け常に鬱々として樂まず、西紀一三三一年遂に位を其の子忠惠王に讓りしが、忠惠王唯日に遊畋を事として國政を顧みざりしかば、元の順帝また忠肅王をして位に復せしめたり。後忠惠王元にありて丞相燕帖木兒と親しみしが燕帖木兒の死後丞相伯顏之を禮すること薄く、會〻忠肅王死し忠惠王歸りて位を襲がんことを求めしも寢めて奏せず、瀋王暠を立てんとして成らざりしかば、西紀一三三九年遂に忠惠王をして位を襲がしめしも、之を讒するものあるや斷事官頭麟等を遣はして王を執へ歸りしが、會〻伯顏貶せられ王釋されて國に歸るを得たり。然るに忠惠王位に復し荒淫無道なりしかば元また大卿朶赤を遣はし王を執へて歸り、之を揭陽縣（廣東省潮州）に流せしに途岳陽縣（湖南省岳州）に至りて死せり。忠惠王の後其の子忠穆、忠定の二王皆幼沖にして立ち母后制を專にして嬖臣事を用ひ、殊に忠定王は狂惑無道なりしかば元之を廢して忠惠王の弟恭愍王を立つ、時に西紀一三五二年なり。**元末の交涉**　恭愍王既に位に卽きて精を勵まし治を圖る。時に元は政衰へて豪傑四方に起り丞相脫脫之を征し、使を高麗に遣はして兵を召す、王乃ち廉悌臣、柳濯に命じ軍士二千餘人を率ゐて之を助けしめしが、元に屬從するを欲せず其の衰運に乘じ兵を發して鴨綠江以南雙城以北を收復し、遂に征東行省理問所を廢し、元の年號を停め、舊官制を復し、辮髮の俗を革め、更に印璫、姜仲卿等をして鴨綠江を渡て婆沙府（盛京省奉天府の西南境）を攻め破り、また柳仁雨をして雙城を陷れて咸州以北を恢復せしむ。是に於て元は斷事官撒迪罕を遣はして之を責めしめければ、王己むを得ず印璫を斬て之に謝し、使を遣はし上書して從前干涉の諸弊を除き竝に雙城、三撒等の地を收復せんことを請ひ、高麗また暫く元に服屬しぬ。時に元には紅巾の賊起り其の將毛居敬等兵を率ゐて鴨綠江を渡り義靜麟の諸州を陷る、之を紅頭軍または紅賊といふ、安祐、李芳實等擊て之を走らせしが既にして賊將潘誠、沙劉、關先生等兵十餘萬を率ゐ、再び鴨綠江を渡て朔州、泥城（平安道昌城府）に寇し**臣嶺**の柵を破りしかば、王は南幸して福州（慶尙道安東府）より尙州に至り賊軍遂に京師を陷る。後幾許ならず鄭世雲諸將を督して大に紅頭軍を破り、沙劉、關先生等を斬り賊遂に鴨綠江を渡て去れり。此の時に當り納哈出また元の衰弊に乘じ叛て瀋陽（盛京省奉天府）に據り、行省丞相と稱して北邊に寇せしが李成桂の破る所となり、後遂に好を高麗に通ぜり。**元の羈絆を脫す**　かくて高麗遂に元に服せざるを以て元また當時燕京に居れる忠宣王の庶子德興君塔思帖木兒を立てゝ高麗王となさんとし、丞相棚思監、宦者朴不花等高麗の亡命者崔濡と謀り、遙に恭愍王の寵臣金鏞と通じて內應せしめしも

遂に果さず、既にして棚思監及び朴不花罪を得て竄せらるゝに及び、順帝王の罪なきを知りて位に復せしめたり。是より後元益〻衰へて高麗との關係漸く薄く、西紀一三六八年明軍燕京に入り順帝遂に北走するに及び、高麗始めて元の壓制を免かるゝことを得たり。

元代の印度　ゴール朝の分裂後其の部將クツブ・ウッヂン（Kutub ud-din）の建設せし北印度の奴隷王朝は、元の太祖の西征以後屢〻蒙古兵の劫掠を受けて衰微し、西紀一二九〇年ジァラル・ウッヂン（Jalal ud-din）之を滅ぼしてキルジ（Kilji）朝を興し、其の姪アラ・ウッヂン（Ala ud-din）に至り雄資大略ありて殆ど全印度を統一する勢ありしが、其の死後版圖一時に分裂しぬ。既にしてアラ・ウッヂンの部將ギヤス・ウッヂン（Ghiyas ud-din）内亂を鎮定し、西紀一三二一年ッグラク（Tughlak）朝を興せしも、其の子ムハメッド（Muhamed）に至り屢〻波斯、支那に遠征を企てゝ成らず、府庫缺乏して叛亂相踵で起り其の死後ッグラク朝の勢威全く地に墜つ。會〻帖木兒（Timur）欽察汗國に勝てる勢を以て此の衰亂に乘じ、西紀一三九八年印度河を渡りて侵入し來り、明年遂に其の都デリー（Delhi）を陷れ殺掠を恣にして歸りしかば、後幾許ならずしてッグラク朝遂に衰滅せり。是等三朝の興亡を略叙すれば左の如し。

奴隷朝　西紀一二〇六年ゴール王ムハマッドの印度河畔の陣營中に襲殺せらるゝや、其の部將クツブ・ウッヂン（Kutub ud-din）デリーに於て自ら印度王と稱し、シンドより下ベンガルに至る地を統一して奴隷王朝を開きぬ。クツブ・ウッヂンもと土耳古の奴隷より起り、其の繼承者もまた武勇と智謀とにより王位に登れるもの多し、故に其の王朝は奴隷王朝と稱せらる。西紀一二一〇年クツブ・ウッヂン死して其の子アラム・シアー（Aram Shah）立ちしに、故王の奴隷たりしアルタムシ（Altamush）之を襲殺して王位を簒へり。奴隷王朝は創業の時より既に其の主權を危くする三大敵を有し遂に之が爲めに亡びぬ、（一）其の臣下たるイスラム教諸將卽ち諸州の知事、（二）印度人の叛亂、（三）中央亞細亞より侵入せる蒙古人の攻撃是なり。アルタムシは下ベンガル及びシンドの獨立せるイスラム教知事を征服せんとせしが、會〻中央亞細亞より蒙古人の侵入するに遭ひ纔に其の領土を失はざるを得て目的を達する能はざりき。此の時元の太祖は印度を通過せざりしを以て印度は幸に其の蹂躙の厄を免かるゝを得たり。アルタムシの晩年に當り印度人は一時紛爭を熄め奴隷王朝に屬せる諸州の知事はバンジァブ、西北諸州、オウド、ベハル、下ベンガル、アジメル、ガリオル、マルワ、シンドを包含するヴィンヂァ山以北の全印度を管轄しぬ。西紀一二三六年アルタムシ死して其の女ラジヤ・ベガム（Raziya Begam）嗣ぐ、女王學を好み勤勉活潑なりしが、もとアビシニア人にして奴隷たりし厩司を愛せる爲め諸將の憤怨を招き、在位三年にして廢せられ次

で死に處せられたり。其の後二代を經て西紀一二四六年アルタムシの末子ナシル・ウッヂン（Nasir ud-din）位に卽きしに、蒙古人また侵入せしかば宰相バルバン（Balban）はバンジャブに赴きて之を防ぎ、次でジュムナ河南に印度諸王と戰ひ、メワト（Mewat）にラジプト族を破りて再びマルワを取れり。西紀一二六七年バルバン遂にナシル・ウッヂンに代はりて位に卽き、勇猛なるも嚴峻に失して慈心なく、メワトの森林に據れるラジプト族を討ちて十萬人を虐殺し、また叛徒を鎭撫する能はざりしベンガルの知事を死刑に處せり。西紀一二八六年バルバン死して其の繼承者は毒殺せられ、西紀一二九〇年奴隷王朝遂に亡びぬ。

奴隷王朝世系（西紀一二〇六——一二九〇年）

1. クツブ・ウッヂン・アイバック（Kutub ud-din Ibak）……一二〇六
2. アラム・シアー（Aram Shah）……一二一〇
3. シアムス・ウッヂン・アルタムシ（Shams ud-din Altamush）……一二一〇
4. ロックン・ウッヂン・フィルズ・シアー（Rokun ud-din Firuz Shah）……一二三六
5. ラジャ・ベガム（Roziya Begam）……一二三九
6. モイズ・ウッヂン・バーラム・シアー（Moiz ud-din Bahram Shah）……一二四〇
7. アラ・ウッヂン・マスド・シアー（Ala ud-din Masud Shah）……一二四二
8. ナシル・ウッヂン・マームード・シアー（Nasir ud-din Mahmud Shah）……一二六六
9. ギヤス・ウッヂン・バルバン（Ghiyas ud-din Balban）……一二六七
10. カイコバッド（Kaikobad）……一二八六

キルジ朝　西紀一二九〇年奴隷王朝亡ぶるやキルジ（Kilji）家のジャラル・ウッヂン（Jalal ud-din）立ちてデリーの王位を嗣ぎ、其の版圖を擴張してデッカン（Deccan）に達せしめ、またマルワの頑强なる印度人と爭ひ、其の姪にしてカルラ（Karra）の知事たるアラ・ウッヂン（Ala ud-din）は騎兵を率ゐヴィンデャ山を踰えてビルサ（Bhilsa）の佛教寺院を掠め、ブンデルカンド（Bundelkhand）を荒らし、デッカン侵入の大企圖を立てゝ森林及び山地を通過し、忽然デオギリ（Deogiri）市に現はれて之を掠奪し、印度軍を破り多額の償金を得て歸りぬ。アラ・ウッヂン勇敢なるも暴虐にして叔父ジャラル・ウッヂンを殺し、西紀一二九五年代はりて王位に卽けり。時にグジェラトの印度人は一時其の獨立を恢復せしが、西紀一二九七年其の王カルン・ライ（Karun Rai）はアラ・ウッヂンの軍の爲めに破られて遁れ、美貌を以て有名なる其の妻カマラ・デヴイ（Kamala Devi）はアラ・ウッヂンに奪はれ、アンハルワラ（Anhalwara）は占領せられ、カムベイ（Cambay）は掠められ、グジェラト全部は再び征服せらるゝに至れり。此の頃また蒙古人の侵入ありしが、アラ・ウッ

ヂンはラ・ホール及びデリー城門の下に之を撃退し、次で一三〇五年また之を撃破して其の捕虜を虐殺しぬ。是より先き西紀一三〇〇年アラ・ウッヂンはジァイプル・ラジプト族を伐てリンチンブル(Rintimbur)を略し、西紀一三〇三年チトル(Chitor)の城寨を抜きてセソヂア・ラジプト(Sesodia Rajput)族の一部を服し、また其の部將はマルワ王を破りウジァイン(Ujain)、マンヅ(Mandu)、ダール(Dhar)、チァンデリ(Chanderi)等を服せり。かくてアラ・ウッヂン既にヴィンヂャ山以北の印度人を降せしかば更に南印度の征服を企圖し、西紀一三〇三年其の部將マリク・カフル(Malik Kafur)に命じ兵を率ゐてベンガルを通過し、テリンガナ(Telingana)の首府ワランガル(Warangal)に進軍し、三年の後マルワを通過してマーラタに侵入しデオギリ(Deogiri)を占領してラム・デオ(Ram Deo)を降し、更にカルナチック(Karnatic)に侵入して印度極南の地にイスラム教の禮拜堂を建立しぬ。然れども全印度平定の企圖は遂に成功するに至らず、クジェラト先づ叛旗を飜し、ラジプト族はチトルを恢復し、ラム・デオの子ハルパル・デオ(Harpal Deo)はデッカンを煽動して兵を擧げしめ、イスラム教の守備兵を驅逐するに至り、アラ・ウッヂンは憤悶の餘り西紀一三一五年に死せり。是に於て其の二子シァハブ・ウッヂン(Shahab ud-din)及びムバレク(Mubarek)相次で立ちしが、キルジ朝末路の五年間其の實權はクスル汗(Khusr Khan)の手に移り、功臣カフルは其の殺す所となり、ムバレクまた弑に遭ひ、クスル遂に王位を簒へり。然るにクスル汗また西紀一三二〇年遂に兵士の殺す所となりてキルジ朝茲に滅亡しぬ。

キルジ朝世系（西紀一二九〇——一三二〇年）

1. ジアラル・ウッヂン・フィルズ・シアー(Jalal ud-din Firuz Shah)……二九〇
2. ロックン・ウッヂン・イブラヒム・シアー(Rokun ud-din Ibrahim Shah)……二九五
3. アラ・ウッヂン・ムハマド・シアー(Ala ud-din Muhammad Shah)……二九六
4. シアハブ・ウッヂン・オーマル・シアー(Shahab ud-din Omar Shah)……三一六
5. クツブ・ウッヂン・ムバレク・シアー(Kutub ud-din Mubarek Shah)……三一七
6. ナシル・ウッヂン・クスル・シアー(Nasir ud-din Khusr Shah)……三二〇

ツグラク朝　キルジ朝の簒奪者クスル汗を殺せる軍隊の首領はギャス・ウッヂン・ツグラク(Ghiyasud-din Tughlak)といひ、もと土耳古の奴隷なりしが後パンジァブ國境の知事となれるものにして是に至り自立してツグラク朝を創め、都をデリーの東約二里の地に遷してツグラカバッド(Tughlakabad)と稱しぬ。既にして其の子ジュナ汗(Juna Khan)兵を率ゐてワランガルを征服しカカチ・ラジプト(Kakati Rajput)の王朝を滅ぼせり。西紀一三二五年ギャス・ウッヂン死しジュナ

汗嗣立してムハマッドと稱す、ムハマッド學を好み兵に長じ且つ克己心に富み、また星學を修め詩を能くし論理及び希臘哲學に通ず。然れども性殘忍刻薄にして無謀なる行爲多く、功名心に驅られて波斯を伐たんとし、また支那に遠征軍を發せしが、波斯に向へる軍隊は給與の不足せる爲め自國を劫掠し、支那に送れる遠征軍はヒマラヤ山中に於て殆ど全滅しぬ。ムハマッドまた南印度を征服せんとし兵を率ゐてヴィンヂヤ山を横ぎりデオギリに至りしが、糧食缺乏して引き還れり。かくてムハマッド其の財庫を盡くすに及びて銅貨を發行し、強ひて銀と同價ならしめんとせしに、外國の商人其の授受を拒みて貿易爲めに中絶せしかば、納稅の際回收して之を廢止したりといふ。此の間諸州頻に其の羈絆を脫せんと圖り、ベンガル先づ叛きて西紀一三四〇年イスラム教の獨立王國となり、カルナチックの印度王ブカ・ライ(Bukha Rai)は新都をヴィジァヤナガル(Vijayanagar)に建設し、西紀一三四四年ヴィジァヤナガル王國を創め、ハッサン・ガンガ(Hassan Ganga)は西紀一三四七年イスラム教の獨立王國をデッカンに建設す、之をバーマニ(Bahmani)王朝といふ。ムハマッドは是等の叛徒を伐たんとして南に向ひしが、既にしてグジェラト、マルワ、シンドに反亂起りしかば軍を旋して之に向ひ、遂に西紀一三五一年印度河畔の陣中に死せり。是に於て其の子フィルズ・シァー(Firuz Shah)立ちて仁政を布き、ベンガル及びデッカンに於ける諸王國の獨立を承認せしが、ツグラク朝は幾許ならずしてイスラム教徒の騷亂及び印度人の反亂の爲めに瓦解しぬ。次で最後の王マームード(Mahmud)の時西紀一三九八年帖木兒印度に侵入してデリーを陷れ、市民を虐殺し、戰利品を滿載して中央亞細亞に歸れり。帖木兒既に去るやマームードはグジェラトの隱栖より出でゝ西紀一四一二年に至るまでデリーに君臨せしが、有名無實にして其の死後西紀一四一四年に至りツグラク朝遂に滅亡しぬ。

ツグラク朝世系（西紀一三二一——一四一四年）

1. ギヤス・ウッヂン・ツグラク・シアー (Ghiyas ud-din Tughlak Shah) ……一三二一
2. ムハマッド・シアー・ツグラク (Muhammad Shah Tughlak) 一世……一三二五
3. フィルズ・シアー・ツグラク (Firuz Shah Tughlak)……一三五一
4. ギヤス・ウッヂン・ツグラク・シアー二世 ……一三八八
5. アブベクル・シアー (Abubekr Shah) ……一三九〇
6. ムハマッド・シアー・ツグラク二世……一三九〇
7. シカンダル・シアー (Sikandar Shah)……一三九四
8. マームード・シアー (Mahmud Shah)……一三九四
9. ナスラト・シアー (Nasrat Shah)……一三九五
10. マームード・シアー（重祚）……一三九九
11. ダウラト・ハン・ロヂ(Daulat Khan Lodi)…一四一四

第四十八章　元の制度　儒學及び文藝　歐亞の交通及び貿易

元の官制　初め蒙古の漠北に興るや遊牧の人民なりしかば、其の制度は甚だ簡單にして丞相は之を大必闍赤（Bitikchi）といひ、兵柄を掌どるものは左右萬戶のみなりしが、後西域を征服するや達魯花赤（Darugachi）卽ち斷事官を各城に置きて之を監治し、太宗の時支那を侵略するに及び始めて十路に宣課司を設け、金人の來りて歸するものには其の故官を授けたり。世祖は漠南軍事都督たる時より內治改良の志を抱き、漢人の材能あるものを延きて幕賓となし、位に卽くに及びて劉秉忠、許衡に命じて內外の官制を定めしめ、中書省を政務を總ぶる所となして中書令を首相となし左右丞相を其の副となし（後左右丞相は首相の權を有するに至れり）、其の下に平章政事、左右丞、參知政事あり、樞密院は宋と同じく兵柄を掌どる所となして樞密使を長となし、御史臺は黜陟を掌どる所となして御史大夫を長となし、其の他寺、監、衞、府ありて各〻掌どる所あり、外にあるものには行省、行臺、宣慰司、廉訪司あり、牧民官には路、府、州、縣に各〻官職あり、また工藝に關する官を設けたること甚だ多く、大都（燕京）と各路とに諸色人匠總管府あり、其の他また到る處に局を設けて織造、繡、染、氈、皮貨、窯、梵像、瑪瑙、玉石、油、漆等の製造に各〻專官を置けり。かくて諸官の長には必ず蒙古人を置き、漢人南人を其の次に置けり、卽ち次官には內外人を擇ばず其の材に就きて博く之を登庸しぬ。

法制　蒙古には初め法律なく百司の斷理訟獄に金律を循用して頗る嚴刻なりしが、世祖の時に至り右丞相何榮祖始めて公規、治民、禦盜、理財等の十事を綜して至元新格（名例、衛禁、職制、祭令、學規、軍律、戶婚、食貨、大惡、姦匪、盜賊、詐僞、訴訟、鬪毆、殺傷、禁令、雜犯、捕亡、恤刑、平反）と名づけ之を上つりしかば、帝は板に刻して頒行し百司をして之を遵守せしめき、而して其の法律は古制によらざる所ありと雖も刑名は同じく笞、杖、徒、流、死の五種に分れ、笞刑は七より五十七に至り、杖刑は六十七より一百七に至る、其の十の數より三を減じて七となす所以は、天地人各〻一を宥すとの意に基づけるなり。また徒刑は宋と大差なく流刑は南人は北地に遷し、北人は南地に遷すことゝなし、死刑は斬のみにして絞なかりき。

兵制　**國初の兵制**　初め蒙古の起るや其の軍隊には蒙古軍、探馬赤軍あり、蒙古軍は皆其の國人にして探馬赤軍は其の諸部族なりき、而して男子は年十五以上七十以下を悉く兵となし、十人を一牌となして牌頭を設け、馬に上れば戰鬪をなし馬より下れば屯して牧養をなす、また孩幼の稍

ふ長じたるものを籍して兵となし之を漸丁軍といひ、また獨戸軍（一戸より一人を出す）、正軍（二三戸より一人を出す）、匠軍（工匠を取りて兵となす）、答剌罕軍（蒙兵より成る）等ありき。**後中原を取るに及び**人民を發して卒となし之を漢軍といひ、年二十以上のものを限りて其の繼に充つ、宋の兵を得て新附軍と號し、また遼東の糺軍、契丹軍、女眞軍、雲南の寸白軍、福建の畬軍等の如き他に出戍せざるものあり、蓋し鄉兵なり、また別に礮軍、弩軍、水手軍等ありき。**世祖以後の兵制**　世祖の時に至り內には左、右、中、前、後の五衞を立てゝ宿衞を總べ、諸軍衞に親軍都指揮使を設け、外は萬戸（萬人長）の下に總把を置き、百戸の下に彈壓を置き、樞密院をして之を總領せしめ、若し方面に警ある時は行樞密院を設け、事止めば廢せり。また世祖は漢人、南人の兵器私藏を禁じて亂源を豫防しぬ。**火器の使用**　軍器は宋元の際に至り火器の使用起りしかば大に革まり、また戰術に異動を來すに至れり。是より先き火藥は唐の世既に破石、爆竹に用ひたるも戰爭に用ひたることなく、宋の太祖の時始めて火箭あり、眞宗の時始めて火球の名あり、而して金元の戰及び宋元の戰には往ゝ震天雷と稱する大砲を用ひしが、砲術は西域より傳來せるものなり。

稅法　元の稅法は概ね唐の制によれるものにして太宗の時より世祖の海內を一統せる時まで に定まりぬ。其の內郡より取るものを丁稅、地稅となし、唐の租庸調に倣へるものなり、また江南より取るものを夏稅、秋稅となし、唐の兩稅法に倣へるものなり。地稅は上田より每畝三升、中田より二升半、下田より二升、水田より五升を取り、丁稅は每丁粟一石、驅丁五斗、新戸の丁驅は其の半ばを徵し、老幼よりは徵せず、商稅は三十の一を取れり。

選擧制　太祖始めて中原の地を取るや耶律楚材の議により科擧を以て士を取りしも、未だ法となすに至らずして止み、また世祖の時に科擧の新制を議定せるも未だ行ふに及ばざりしが、仁宗の時に至り舊制を斟酌して其の條制を定め、三年每に考試をなすことゝなり、また鄉會試及び御試も行へり。當時進士を分ちて兩榜となし、蒙古、色目人を右となし、漢人、南人を左となして每試三場となし、第一場は蒙古、色目人に經問五條を試し、經義一道を試し、第二場は蒙古、色目人に策一道を試し、漢人、南人に古賦、詔、誥、章、表の內一道を科し、第三場は漢人、南人のみにして策一道を試せり。其の出身には別に蒙古國子學、回回國子學等の目あり、是れ前代になき所なり、而して蒙古人の科目出身者には從六品の官を授け、色目人、漢人、南人の科目出身者には一級を遞降して授けたり。後順帝の時科擧を罷めたるも幾許もなくしてまた行ふことゝなれり。色目人とは西域諸國の人をいふ、色目を異にする人卽ち外國人の義なり、また漢人、南人は俱に支那人をいふなり。是の如く元は國の內外、人種の異同を問はずし

て人材を任用せるのみならず、宿衞勳臣の家には其の職を世襲するものありしかば、情弊繾綿して選擧の法は完全に行はれざりき。

學制　元は太宗の時國子總裁及び提擧官を設け、侍臣の子弟に命じ入學して業を受けしめたるも、學制未だ備はらざりしが、世祖の時に至りて國學監を設け國子學を建てゝ學生百二十人を置き、蒙古人及び漢人を各〻半數宛となし、其の後諸路に學官を設けて各〻教授一人、學正一人、學錄一人、府及び上中州に教授一人、下州に學正一人を置き、各縣に小學を設けて教諭一人を置き、また蒙古國子學及び回回國子學を設けて蒙古人、色目人、漢人の官吏の子弟を入學せしめ、また諸路に蒙古字學、回回字學を設けて人民の子弟を教へ、また陰陽學、醫學を設けたり、而して各行省所在地に儒學提擧司を置きて諸路府州縣の學校を統轄せしめ、江浙、湖廣、江西に蒙古提擧學校官あり、河南、江浙、江西、湖廣、陝西にまた官醫提擧司ありき。是より先き私人の設立せる書院は南宋の時より頗る發達せしが、世祖の時に至り詔して書院（書院中教を掌どるものを山長といふ）を立つることを許せしかば、是に至りて內外の學制完備せり。

元の儒學　初め宋金互に敵視せしかば宋儒の學說は久しく北方に傳はらざりしが、元の太祖の時金の軍資庫使姚樞を得て之を重用し、次で太宗の時南侵するや姚樞に命じ軍に從ひて儒釋道醫卜凡そ一藝あるものを收めしめ、大儒趙復を得て還りければ是より宋儒の學說始めて北方に傳はり、姚樞もまた始めて程朱の書を見るを得たりといふ。次で郝經、許衡、劉因の諸儒輩出しぬ、郝經字は伯常、世祖に仕へて宋に使し、賈似道に拘はれたるも屈せず忠節を以て顯はる、許衡字は仲平、世祖に仕へて信任せられ、學德最も高く門流甚だ盛にして世に魯齋先生と呼ばれ、元儒の大宗と稱せらる、劉因字は夢吉、靜修と號す、初め經學を修めて訓詁註釋の說を究めたるも意に滿たず、後周邵程朱の書を得一見して之に服す、是より朱子の學を祖述し諸學文章を兼ねて一代の大家と稱せらる、世祖詔して之を徵すや出でゝ仕へしが、幾許もなく辭して歸りぬ。同時に宋の遺儒に馬端臨及び金履祥あり（馬端臨に就いては前に述べたれば略す）、金履祥字は吉父、朱子の婿黃幹の再傳の弟子にして金華山中に隱れ後仁山の下に遷りて講說す、世祖の晚年徵されしが辭して歸り、後翰林學士となりしが泰定帝の時また病を謝して歸る、其の學朱子を宗として陸子の說を雜ふ、北方の許衡に次げる名儒たり。また成宗の時には蕭斛、杜英、順帝の時には陳櫟、胡一桂、許謙、黃澤等出でゝ皆一代の大家と稱せられたり。

元の詩文　蒙古はもと文字なく畏兀兒（Uigur）文字または漢字を借りて用を辨ぜしが、世

祖の時に至り喇嘛八思巴に命じ始めて蒙古文字を製しぬ、故に元は金宋の文學を傳承したるも蒙古語及び蒙古文字を公用して支那の言語文學に重きを置かず、加ふるに國運甚だ短かゝりしを以て充分なる文運の發達を見るに至らざりき。然れども此の間また一代の文豪と稱すべきものなきにあらず、宋の宗族にして元に仕へたる趙孟頫は字を子昂といひ、書畫を能くせるのみならず詩文また清邃奇絶にして元代文學の氣運を開き、次で虞集、楊載、范梈、揭傒斯の四大家輩出して益〻之を盛にせり。虞集字は伯生、道園と號す、初め吳澄に就きて學ぶ、學問洽博にして一代の文宗と稱せらる。楊載字は仲弘、初め趙孟頫により取れりといふ。范梈字は亨父、其の人格高きが爲め詩文また遠清逸宕、恰も其の人の如しと稱せらる。揭傒斯字は曼碩、其の詩は清麗婉轉にして神骨秀削、體裁最も備はれり。四家に次で歐陽玄あり、字は原功、また文を以て鳴る、揭傒斯と共に遼金二史の撰修に力を盡くしぬ。また四家と前後して流麗の詞に巧なりしものを馬祖常（字は伯庸）、薩都剌（字は天錫）の二人となす、就中薩都剌は詩文共に秀絶にして殊に絶句に長ぜり。元末に至り著名なるものに楊維貞あり、字は廉夫、鐵崖と號す、元亡びてまた仕へず、最も樂府、小詞に長じて常に新機軸を出しぬ。其の他黃溍（字は晉卿）、柳貫（字は道傳）、吳萊（字は立夫）の徒出でゝ明初文學の胚胎をなせり。

元の戲曲及び小說　其の勃興

元の文學は到底唐宋の隆盛に及ばず、其の詩文また唐宋に比すれば頗る遜色ありと雖も、元代が支那文學史上に一新紀元を開きたるものは戲曲及び小說の勃興せることなり。支那は歷代儒學を尙びしかば戲曲、小說の如き娛樂的文藝の發達甚だ遲かりしが、元代に至り蒙古民族及び諸外國人により て新思想の注入せられたる結果、遂に戲曲小說の勃興を來せるものとす。**戲曲**　漢の世樂府の一體起り宋に及んで詞餘となりて益〻其の發達を示し元に至りて遂に戲曲を大成しぬ。戲曲に南曲、北曲の別あり、金元二朝の中國に入るや其の用ふる所の胡樂は其の音嘈雜凄緊なりしかば、中國人の詞は北人の耳に快からず、是に於て別に新聲を作れるもの之を北曲といひ、中國人もまた北曲の聽くに堪へざるを以てまた新體を創め之を南曲といへり。元の戲曲は甚だ多く其の數五百餘種に上ると雖も、就中最も傑出せるものは北曲の西廂記と南曲の琵琶記となす。西廂記は王實甫の作と稱せらる、其の材料を唐の元稹の會眞記に採れる一部の情史にして男女離合の情緒を描寫せるものなれども、其の詞采は千古の絶調と稱せらる。琵琶記は高則誠の作る所にして其の友王四が舊妻を棄てゝ姻を權門に通ぜるを諷せるものなりといふ、蓋し孝婦貞妻の行路難を敍せるもの端なれども、其の文辭は西廂記の婉麗なると異なりて清雅冷艷の氣を帶べり。要するに兩者各〻

長短あり之を對比論評するは甚だ難しと雖も、共に千古の傑作たるは疑を容るべからず。王實甫、高則誠以外に元代第一流の戲曲家として有名なるものには關漢卿、馬致遠、喬夢符等ありき。**小說**　小說の起原は遠く周の稗官、莊周の寓言、漢の虞初にあり、もと神仙、變異、街談、巷說を記述するに過ぎざりしが、唐の世に至り傳奇と稱して之を作るもの多く、宋の世に至り更に愈〻衆く、元の世に至りては諸種の新思想蒙古人及び諸外國によりて注入せられたる結果、人心をして奇異を聽くを好むに至らしめ、學者また其の耳にせる異聞を記錄し、漸く其の盛を致して遂に小說の勃興を見るに至れるなり。かくて元代に出でたる小說甚だ多しと雖も、就中水滸傳を白眉となし演義三國志之に次ぐ。水滸傳の作者は詳かならずと雖も施耐庵の作と稱するもの正しきが如し、其の內容は宋の徽宗の世に宋江といふもの其の徒三十六人を以て河朔の間を橫行して盜をなせることを、正史の實錄により構成せるものにして是等の豪傑をして各〻其の獨得の性格を現はし、驚天動地の快事をなさしめたる作者の手腕は實に賞揚すべきものなり、加ふるに其の文辭雄渾爽銳讀者をして壯絕快絕の感懷を起さしむるに至ては支那小說中稀に看る所なりといふべし。演義三國志の作者また詳かならず、羅貫中の作と稱せらるゝも確實ならず、其の內容は正史三國志により演義せるものにして脚色文辭共に水滸傳に比し大に遜色ありと雖も、また稀世の一大小說たるを失はざるなり。次で明の世に至り小說益〻盛にして西遊記、金瓶梅の二大小說出づるや、水滸傳、演義三國志と共に四大奇書と稱せらるゝに至れり。

元の史學　元の順帝の時脫脫（Tukhta）等に命じて宋史、遼史、金史の三史を撰修せしめ、三年に及ばずして完成しぬ、是より先き世祖の時既に編輯せる三史の舊稿あり、故に是の如く短日月間に完成するを得たりしなり。宋史は本紀四十七卷、志百六十二卷、表三十二卷、列傳二百五十五卷、すべて四百九十六卷あり、頗る疎升蕪蔓なりとの譏あり（明の柯維騏が此の書を略抄せる宋史新編二百卷は却て其の要を得たるものとせらる）。遼史は本紀三十卷、志三十三卷、表八卷、列傳四十五卷、中に國語解一卷を附し、すべて百十六卷あり、遼の書史記錄は滅亡の當時兵燹にかゝりて蕩然泯滅し、脫脫等の史を修むる時考證すべきもの少なかりしかば、疎略なる所甚だ多し（故に清の厲鶚は遼史拾遺二十四卷を撰し他書を參引して其の闕けたる所を補へり）。金史は紀九卷、志三十九卷、表四卷、列傳七十三卷、すべて百二十五卷あり、叙事最も詳核、文筆また極めて老潔にして遼に宋元二史の上に出づと稱せらる。

元の科學及工藝　科學の發達　元の世は名儒文豪に乏しからざりしが將相大臣は皆胡人よ出でゝ學士の待遇重からざりしかば、文學經術の隆盛は唐宋の世に及ぶ能はずと雖も、世祖の時盛に外國人を任用せしかば中央亞細亞、西亞細亞及び歐羅巴より來りて仕ふるもの多く、天文、

數學、醫術、砲術、建築術より測天機其の他の機械に至るまで西方より陸續傳來しければ、科學の發達進歩著るしくして支那學術の上に一新時期を開くに至れり。かくて郭守敬（字は若思）は世祖の時に出で水利、曆數、儀象、制度の學に通じ、命を受けて新に授時曆を作りて曆法を改治し、また諸種の測儀を創作し、天文曆數に關する諸種の書を著はし、同時に李治（字は仁卿）あり數學を究めて測圓海鏡を著はし、また波斯の天文學者札馬剌丁（Jamala ud-din）は測天機を將來して天文學に貢獻せる所多く、波斯人阿老瓦丁（Alai ud-din）及び亦思馬因（Ismail）は砲術を傳へたり。**醫學の進歩**　支那の醫術は是より先き南北朝の頃印度醫學の影響を受けて多少進歩する所ありしも、隋唐五代を經て宋に至る數百年間寥として聞ゆる所なく、漸く金に至りて勃興の機運を示し元に及び始めて稍〻整備するに至れり。かくて金元の際に李杲（字は明之、東垣と號す）出でゝ內外傷辨論、脾胃論を著はし、久しく衰頽して振はざる醫學に新なる機運を與へ、次で元に及び李震亨（字は彥修、丹溪と號す）出でゝ格致餘論、局法發揮、金匱鉤玄を著はしぬ。是に於て世人此の二人を竝稱して朱李といひ以て其の術を重んずるに至り、是より醫學漸く研究せらるゝに至れり、是れ蓋し當時傳來せし亞拉比亞及び歐羅巴醫術の影響與かりて力ありしならん。**工藝の發達**　元以前は歷代重農輕商の弊ありて商工業の發展を妨げしが、元の興るや外國を侵略して版圖を擴張せる結果交通頻繁となり通商盛に行はれしかば、內地の商工業頗る發展するに至りぬ、殊に元は政府自ら貿易を營みつ且つ官設工場を立てゝ官用に供するものを製造したるが如きは、工藝進歩の一班を知るに足るべし。かくて元は梵像提擧司（彫刻繪畫を掌どる）、出臘提擧司（出臘鑄造の事を掌どる）等の署場を設け、繡繪綉紋綿紗羅瑪腦金銀木石油漆窯冶等の如きも局を設けて製造し、また地方に織染提擧司十六ヶ所を置きて染絲綿織布帛等の事を掌どらしめたるを見れば、產業の盛なりしことを知り得べしと雖も、國祚僅に百年に及ばずして滅亡せしかば、隆盛に赴きつゝありし商工業は頓挫して遂に完全なる發達をなし得ざりしなり。

元の道教　道教は宋の南渡以後頗る振はず、元の太祖の西域にあるや道士邱處機（長春眞人）を山東より招きたることあるも、不老長生の術を得んが爲めにして敢て之を尊崇したるにあらず、憲宗の時道佛兩家をして互に辯論せしめ道家勝つ能はざりしかば其の僞經を燒き、また佛教寺院の道流に占領せられたるものを返さしめたることあり、世祖以後は喇嘛教元室の尊信を受けて勢盛なりしかば道教頗る振はざりき。然れども元室は歷代道士を優遇し、太祖は邱處機に道教を總領して到る處に道觀を建つるを許し、世祖は張氏に眞人の號を加へて江南諸路の道教を總領せしめ、また張留孫の如きは世祖以來五代に歷仕して樞機に參し大に信寵せられたり。元の世に行はれた

る道教には正一教、眞大道教、太乙教、全眞教の四派あり、正一教は張氏の傳ふる所にして專ら江南に行はれ、眞大道教は金末の道士劉德仁に始まり、五傳して酈希誠に至り憲宗より眞大道教の名を賜はり、太乙教は太乙三元法籙の術を傳ふるによりて名づく、金の道士蕭抱眞に始まり五傳して李居壽に至り、世祖より太乙掌教宗師の印を賜はり、全眞教は宋末の道士王重陽に始まり、其の弟子邱處機に至り太祖の尊信を得て江北に根據を固めたり、而して邱處機の弟子宋披雲始めて道藏を開雕したりといふ。

元の喇嘛教　**喇嘛教の起原**　佛教は元の世に至りて大に衰へ喇嘛（Lama）教之に代はりて勢力を得たり、喇嘛教は吐蕃卽ち西藏（Tibet）に興れる一種の佛教にして專ら祈禱禁呪をなし、其の僧侶は紅衣を着くるが故に紅教（Samar）ともいふ。吐蕃は唐の太宗の時國王棄宗弄贊（Chitsun lun btsan）深く佛法に歸依し、卽位の初め使者十六人を印度に遣はして佛典を求めしめ、且つ佛教の主義に基づきて國憲刑法を更定し、其の後玄宗の天寶年間に至り棄隷蹜贊（Khri lde gtsug-brtan-mesag tsons 吃嘍雙提贊）王また使を印度に遣はして榜葛剌（Bengal）より善海大師（Santarakhuta）を招き、其の言に從ひて北印度より瑜伽（Yoga）派の高僧巴特瑪撒巴々々（Padma Sambhava 蓮華生上師）を招きぬ。是に於て巴特瑪撒巴々々は多數の陀羅尼（Darani）及び祕密修法を齎して吐蕃に來り、其の國俗に適せる一種の密教を創む、是れ卽ち喇嘛教なり、喇嘛とはサンスクリット語の憍多羅（Uttara）と同じく上者の義にして長老を呼ぶ語なりしが、遂に吐蕃佛教の通稱となれりといふ。**其の隆盛**　是より喇嘛教盛に行はれて勢力を生じ國王と雖も抑制せらるゝに至りければ、西紀九〇〇年の頃朗達爾瑪（Lang Dbarma）王之を憂ひて其の破滅を圖り、佛塔寺院を破却し僧侶を還俗せしめしが、在位僅に三年にして喇嘛バル・デルジェ（Pal-derje）の弑する所となり、教勢再び恢復して朗達爾瑪の孫巴勒科爾贊（Palkor-btsan）の時には寺院を再建し、前代以來印度に遁逃せる僧侶また漸次歸り來り、西紀第十一世紀の頃には迦濕彌羅（Kashmira）及び印度の僧侶また踵を接して至り、教勢益〻增長して喇嘛は遂に國政を左右するに至れり。**元と喇教**　西紀一二五三年元の憲宗の弟忽必烈兵を率ゐて吐蕃に侵入せる時、喇嘛扮底達（Pandita）の威權旺盛なりしかば、忽必烈之と和して國王唆火脫を降し、兀良哈台（Uriangkhatai）を留めて諸夷の未だ降らざるものを伐たしめ、扮底達の姪八思巴（Phagspa）を伴ひ還りぬ。次で忽必烈位に卽きて世祖となるや吐蕃の地の險遠にして其の俗の獷狷なるを憂ひ、喇嘛を任用して之を統御せしめ、また喇嘛八思巴を帝師となして吐蕃の地を領せしめ、其の命令をして詔勅と竝び行はしめたるより威權の盛なること竝ぶものなく、歷代の帝王皇后皆帝師に就きて佛戒を受け、后妃公

主と雖も皆膜拜するに至れり。元は初め佛教を奉ぜしが世祖一たび喇嘛を帝師となせしより喇嘛教大に行はれ、八思巴の後喇嘛相次で帝師となり其の勢力益〻強大となりて弊害百出しぬ、卽ち官吏も喇嘛僧を逮捕する能はざるを以て彼等は時に民田を奪ひ財物を侵佔し、姦惡の徒は其の勢に附きて罪網を免かれ得るを以て賞罰の途廢し、また喇嘛僧は納租の義務なきを以て農民は其の部民と稱し田租を輸せざるものありければ歲入漸く減じ、また彼等は歷代元室の尊信を受け近侍に營結して布施を强請するものあるに至りて、朝廷供養の費甚だ夥しく順帝の時に至りて最も甚だし。故を以て國庫益〻缺乏を告げ勢ひ人民に厚斂せざるを得ず、人民は其の負擔に堪へずして皆亂を懷ふに至り、蒙古人の覇絆を屑しとせざる漢人諸方に崛起して元室遂に滅亡せり。

元の回教　イスラム教は唐の世一たび支那に入りしも盛に行はれず、唐末に及び遂に其の迹を絶ちしが、天山南北兩路の地方には盛に流傳して遂に佛教に代はるに至り、回紇人最も之を信奉せしかば支那にては之を回教と稱しぬ。かくてイスラム教は宋末に至るまで再び支那に流傳せざりしが、其の後元の太祖の金を攻めたる時には其の軍中に畏兀兒卽ち回紇人の如きイスラム教を奉ずるものあり、また太祖の西征するに及びイスラム教徒の來りて仕ふるもの多く、次で太宗憲宗の宋を攻めたる時にもイスラム教徒の從軍するものあり、世祖の支那を一統するに及び盛に西域人を任用せしかば、蒙古の王族將相中にも其の教を信奉するものありて支那に流傳し、殊に支那本部の西邊に盛に行はるゝに至れり。

元の基督教　**羅馬法王及び佛蘭西王の使僧派遣**　基督教は唐以後全く迹を支那に統ちしが、元興るに及び再び流傳してまた行はるゝに至れり。元の勃興せる頃歐羅巴人は西亞細亞のイスラム教徒に對して既に數回の十字軍を起せしが、會〻元は太祖太宗の時西征して到る處イスラム教國を討滅せしかば、基督教徒は蒙古人と同盟するを便となすに至り、羅馬法王インノケント（Innocent）四世先づプラノ・カルピニ（Joan du Plano Carpini）に命じ、西紀一二四五年より一二四七年に至る間に欽察汗拔都を薩來に訪ひ、更に元の定宗を喀喇和林に訪うて蒙古の勢力を探らしめ、次で佛蘭西王ルイ（Luis）九世は西紀一二五三年フランシスコ（Francisco）派の僧ルブルク（Gulielmus de Rubruquis）を遣はして拔都及び其の子撒里答（Sartakh）を訪ひ、更に元の憲宗を喀喇和林に訪うて基督教の弘布を圖らしめき。後フランシスコ派の僧モンテ・コルヴィノ（Joan du Monte Corvino）また羅馬法王ニコラス（Nicholas）四世の命を受け、印度を經て西紀一二九三年海路より支那に達し、世祖の許可を得て布教に從ひ漸次信徒を得て六千餘人に達し、教會堂をハンバリグ（Khanbaligh）卽ち燕京に建立しぬ。**基督教の傳播**　是に於て羅馬法王クレメント（Clement）五世はモ

ンテ・コルヴィノをカタイ（Cathay）の大僧正に任じ、且つ其の傳道を助けしめんが爲め副僧正以下の僧職を置くことを許せり。當時基督教會は燕京のみならず泉洲杭州其の他の地方に建立せられ、信徒は頓に其の數を增し多數の宣教師また相踵ぎて支那に來れりといふ。次で西紀一三一六年より一三二八年に至る間にポルデノン（Pordenon）の僧正オドリック（Friar Odoric）また欽察、波斯、シリア、印度を經て海路より支那に至り、廣州、泉州を訪ひ遂に杭州に達し燕京に入る、實に元の文宗の世に當れり。西紀一三三六年元の順帝は伊太利人アンドレアス（Andreas de Perouse）をして親書を羅馬法王ベネヂクト（Benedict）十二世に致さしめ、翌年其の返書を得たりといふ。次で西紀一三四〇年フランシスコ派の僧マリニォリー（Joan du Marignolli）は羅馬法王の使節として支那に來り、西紀一三四二年燕京に入り留まること三四年にして歸り、次でニコラス・デ・ボンネット（Nicholas de Bonnet）其の後繼者として燕京に到着しぬ。然るに當時支那は元室の勢威衰へて群雄四方に割據し、國内騒擾せしかば宣教漸く困難に陷り、次で元亡びて東西の交通止むに及び、基督教もまた遂に廢絶するに至れり。

音樂と書畫　**音樂**　元は蒙古より興れるを以て其の初めは音樂未だ備はらざりしが、世祖の時に至り宋周臣に命じて樂工を領せしめ、また王鏞に命じて大成樂を作らしめ、後登歌、文武の二舞を大廟に用ひ、また社稷の樂章を撰定しぬ。次で成宗の時に郊廟の曲舞を製し、仁宗の時にまた太常に命じて樂工を補綴せしかば、樂制大に備はるに至れり。**書畫**　書は元の世を通じて趙孟頫、鮮于樞、鄧文、原明を最も著明となす、就中趙孟頫、鮮于樞はまた畫に巧なるを以て名を得たり。趙孟頫字は子昂、書畫文章經濟を能くし、其の畫は山水木石花竹人馬に妙を得、高克恭字は彥敬、房山と號す、初め米芾及び其の子友仁に學び、後李成、董源、巨然の風を學びて山水を畫きぬ。次で陳仲仁、顏暉、張嗣成等の大家出づ、鮮于樞また畫に巧なるを以て著はる。陳仲仁字は元長、山水人物花鳥を能くし、顏暉字は秋月、道釋人物を寫すに長じて筆法奇絶八面生動の致ありと稱せられ、張嗣成は太玄と號し、巧に龍を畫き兼ねて山水を能くし、また卿書を善くせり。後黄公望、王蒙、倪瓚、吳鎭あり、元末の四大家と稱せらる。黄公望字は子久、大癡道人と號し山水に長ず、初め董源、巨然の風を學びしが、晩年に至り其の法を變じて自ら一家を成す。王蒙字は叔明、黄鶴山人と號し、巨然の風を學びて山水を善くし墨法秀潤なるを以て著はる。倪瓚字は元鎭、雲林と號し、初め董源の風を學びしが晩年に至り造詣愈〻深く、古法を一變して天眞幽淡を宗となし、林木平遠竹石を畫き、清疎澹遠風致絶倫殊に市朝塵埃の氣なしと稱せらる。吳鎭字は仲圭、梅花道人と號し、巨然の風を學びて山水を善くし、また花鳥に巧なりき。

歐亞の交通及び貿易　**原因**　元時代に東西の交通頻繁となりし二大原因は(一)空前絶後の大帝國興れる爲め所在に割據せし小國悉く滅亡せしかば交通往來自由となりしこと、(二)政治上及び軍事上の目的を以て新に官道を開き、宿驛を設け、守備隊を配置せしかば、旅客の危險困難を減少せしこと是なり。是に於て東西の交通は其の面目を一新し、西亞細亞、印度、波斯及び歐羅巴の商人の海陸兩方面より蒙古及び支那に來るもの多く交通往來頗る頻繁となれり。**陸路**　其の陸路によるものは西亞細亞及び歐羅巴より一は中央亞細亞、天山南路を通過し、一は西伯利亞の南部より天山北路を通過して喀喇和林、燕京に至れり。**海路**　其の海路によるものは波斯、印度の海岸より泉州、杭州の諸港に達しぬ。故に泉州の如きは當時世界第一の貿易港となり、外國人の來りて居住するもの萬を以て數ふるに至れりといふ。**元朝の通商策**　是に於て元は世祖の時市舶司を泉州、上海、澉浦、溫州、廣東、杭州、慶元の七港に設け、輸出入の貨物に關稅十分の一を課せしが、盧世榮の財賦を掌どるに及び、船を具へ本を給し人を選び海外に赴きて貿易せしめ、獲る所の利益を十分して其の七を官に取り其の三を貿易者に與ふることゝなし、人民の海外に私航して貿易するを禁ぜしが盧世榮の死後之を廢せり。**著名なる旅行家**　此の時代に歐羅巴及び西亞細亞より蒙古及び支那に來れる旅行家及び宣教師の著名なるものを擧ぐれば、プラノ・カルピニ、ルブルク、モンテ・コルヴイノ、オドリック、マリニオリの如き宗教家以外に、小アルメニア（Armenia）王の弟ハイトン（Haython）は西紀一二五五年蒙古に來りて憲宗に謁し、有名なる伊太利人マルコ・ポロ（Marco Polo）は西紀一二七五年支那に來り世祖に仕へて留まること十七年に及び、モロッコ（Morocco）の亞拉比亞人イブン・バッタ（Ibn Batuta）は順帝の時西紀一三四六年より一三四八年の間に支那に來れり。其の他亞拉比亞、波斯、中央亞細亞等の學者、軍人、技術家、伊太利、佛蘭西の學者、畫家、技術家、職工等の來りて元の朝廷に仕へたるもの頗る多く、之が爲めに西方の天文、曆法、數學、砲術、建築術、工藝等は支那に傳へられ、支那の磁石盤、活版術等は西方に傳へらるゝに至れり。

第四十九章 解說

木華黎（Mukhali） 蒙古の將、札剌兒（Jalair）部の人、世、斡難（Onon）河東に居る、沈毅にして智略多く射を善くす。初めより元の太祖に從て功あり、命を受けて遼東を警備す。太祖西征の議を決するや、木華黎を召し還して謂て曰く「太行の北は朕自ら經略す、太行の南は卿其れ之を勉めよ」と、太師となして王爵を授け征金の都督となし、遊牧の兵二萬及び遼人金人を以て編成せる軍を附す。木華黎乃ち濟南に入り東平を陷れ、河を渡りて西し延安を攻め鄜延等を侵す。西紀一二二三年河中より師を帥るて還り、解州聞喜縣に至りて病篤し、遺言して曰く「吾遺憾なし、唯恨む汴京未だ克たざるのみ」と、言訖りて死す、年五十四。元の英宗至治の初め魯國王に追封し、忠武と謚せらる。

哲別（Chebe） 蒙古の將、別速特部の人、もと泰赤烏部に屬し嘗て太祖と戰ひしが、敗れて遁れ窮困して遂に太祖に歸す、太祖其の勇を惜み釋して殺さず、初め什長より累遷して千戶となす。太祖の乃蠻を伐つや先鋒となり、金を侵すや烏沙堡を拔き居庸關に入れり。次で命を受けて曲出律を擊殺し、西遼の故地を收めて還る。太祖の西征するやまた軍に從ひ到る處功あり、次で速不台と共に花剌子模王ムハメッドを追蹤してカスピ海の西に至り、更に高加索山を踰えて欽察部を伐ち、露西亞の南部に入りて諸侯の連合軍を破り、クリムに入りて軍を旋し、東歸の途中疾を得て死せり。

速不台（Subtai） 蒙古の將、兀良哈部の人、早く太祖に從ひ、驍勇射を善くし權略あり、太祖の蔑里乞を伐つや前驅となり、奇計を設けて之を滅ぼせり。後太祖の西征に從ひて花剌子模を征し、ムハメッドを追うてカスピ海の西に至り、高加索山を踰えて欽察及び露西亞の南部を伐て還る。太祖の西夏を伐つやまた速不台をして將たらしめ、遂に之を滅ぼせしが會〻太祖死して軍を旋せり。太宗位に即き禿滅干公主を以て速不台に妻はす、次で太弟拖雷に從て金を征し遂に之を滅ぼせり。太宗また諸王拔都、皇子貴由、姪蒙哥等に命じて再び西域を征せしむるや、速不台先鋒となり露西亞に入りて諸城を拔き、更に匈牙利に侵入して之を取る、會〻太宗の訃至るや、速不台拔都に勸めて還らしむ。既にして貴由立て定宗となり、朝會のもの皆家に還る、速不台また西紀一二四六年を以て蒙古に歸り、次で禿剌(Tela)河上の故鄕に還て死す、年六十。後河南王に追封し、忠定と謚せらる。

耶律楚材 字は晉卿、契丹の東丹王突欲八世の孫、金の尙書右丞履の子なり、博く群籍を究め旁ら天文地理律曆術數に通ず、また金に仕へて中都行省員外郎となる。元の太祖金を伐て中都（燕京）を陷るるや、楚材を召し之に謂て曰く「遼金世〻讐たり、吾汝の爲めに之を報ず」と、楚材對て曰く「臣の祖父以來北

面して之に事ふ、既に臣子となる、豈に敢てまた二心を懐き君父を讐とせんや」と、太祖其の言を重んじ命じて左右に處り顧問となす。太祖の西征に從ひ帷幄に參して劃策する所多く、また亞拉比亞曆を得て金の大明曆の誤を訂し、庚午元曆を刻して之を上つれり。太祖嘗て太宗に謂て曰く「楚材は實に天の我が家に賜へるものなり、爾後軍國の事悉く之に任ずべし」と。太宗即位するや楚材を擧けて中書令となす、楚材また身を以て君國の事に當る、凡そ元朝蒙古の風を變じて漢土の文物制度を折衷し、立國の基礎を建てたるは楚材の力多きに居るといふべし。太宗死して慈昭皇后乃馬眞氏制を稱するに及び、楚材屢諫めて聽かれず遂に憂を以て死す、年五十五、時に西紀一二四三年なり。之を譖するものあり曰く「楚材相位にあること二十年、天下の貢賦半ば其の家に入る」と、后近臣に命じて之を覆視せしむれば、唯琴玩十餘及び古今書畫金石遺文數千卷のみ。文宗の至順元年廣寧王に追封し、文正と諡す。著はす所堪然居士集十四卷あり。

曲出律（Khuchluk）　また屈出律とも書す、乃蠻部長太陽汗の子、太陽汗元の太祖の勢盛なるを憂ひ、衛拉特（Wirat）及び蔑里乞（Merkit）の餘衆を糾合し、遙に塔々兒（Tatar）と結びて太祖を夾撃せんとせしに、太祖機先を制し西紀一二〇四年杭海山（Khangai 杭愛山）に逆撃して大に之を破り、太陽汗を擒殺せしかば曲出律は蔑里乞部長脫脫と共に也兒的石（Irtysh）河上に奔り、後共に東して蒙古を攻めしが太祖の擊破する所となりて脫脫は戰死し、曲出律は遁れて西遼に投ぜり。時に西遼は德宗の孫直魯克位にあり、曲出律を納れて之を款待し、妻はすに其の女を以てし國政に與からしむ。然るに西遼は國勢既に衰微して

羈屬往々離叛するものありしかば、曲出律遂に花剌子模王ムハメッドと謀を通じて內外相應じ、西紀一二一一年直魯克の出獵するを窺ひ、兵八千を伏せて之を擒にし、シール河を界として西遼の地を分割せり。是に於て曲出律父の讐を報ひんと欲し、蒙古が金を伐ちて西顧の暇なきに乘じ、柯耳魯を破り畏兀兒を伐ち進んで蒙古の虛を衝かんとせしかば、太祖は哲別を遣はして之を擊破し、曲出律奔りて巴答哈傷（Badakshan）に至り殺され、西遼の故地は蒙古に入れり。

札蘭丁（Telal ud-din）　花剌子模王ムハメッドの子、驍勇にして膽略あり、呼羅珊（Khorassan）に封ぜらる。蒙古軍の花剌子模に侵入するや、ムハメッド敵せざるを知り退て那黑沙不（Nakhshab）に向ひ、將相を會して軍國危急の大事を議す、札蘭丁建議して敵をアム河に禦がんと請ひしも行はれず、切齒扼腕自ら留て敵と戰はんと請ひ苦諫泣下る、ムハメッド聽かずして巴里黑（Balk）に赴けり。是に於て札蘭丁は封地呼羅珊に赴き、哥疾寧（Ghazni）に入りて兵を募る、太祖之を聞きて來り伐ち、札蘭丁其の前軍を破りしが、會〻諸將相和せずして去るものあるに及び、遂に敵すべからざるを知り、印度河上に退けり。太祖乃ち追擊して之を破るや、札蘭丁免かれざるを知り甲を脫して印度河に投じ泳いで遁る、太祖追うて河岸に至り蒙古兵の河に投じて之を捕へんとするものを止め、顧みて諸子を招き之を見せしめて曰く「嗚呼是れ卿等の龜鑑なり、是の如き子の父たるものまた幸ならずや」と。札蘭丁遂に河を渡り、泳ぎ從ふもの四千人を合せ、デリー（Delhi）に向て奔り、奴隸王朝の主アルタムシに頼れり。太祖東に歸りて死し太宗立ちて金を

伐つや、札蘭丁デリーより出でて波斯に入り、故地を恢復して勢また振ひしが、既にして蒙古軍來り伐つに及び、敗れて西北に奔り阿蘭(Alan)、欽察等諸部の來り襲ふを破り、次で亦思法杭(Ispahan)に入りて亡父の墓を建て自ら波斯可汗と稱す。然るに蒙古軍また來り伐つに及び、札蘭丁遁れてクルド(Kurd)の山中に入り土人の殺す所となる、時に西紀一二三一年なり。

朮赤(Juchi)　元の太祖の長子にして母は光獻翼聖皇后孛兒帖(Bute)なり、初め孛兒帖孕める時蔑兒乞人來り襲ひ、太祖は不兒罕山中に匿れ、孛兒帖遂に捕へられしかば、太祖援を克烈部長汪罕及び札只剌部長札木哈に請ひ、夜に乘じて蔑兒乞を襲ひ孛兒帖を奪ひ還りしが、既にして子を擧げ朮赤と名づく、朮赤とは蒙古語客の義なり、是を以て朮赤諸弟に輕ぜられ察合台と最も協はず、察合台之を罵りて蔑兒乞種といふに至れり。或はいふ、孛兒帖の姉は汪罕の妃なるを以て太祖の訴ふるを聞き、汪罕蔑兒乞に說きて孛兒帖を返さしむ、孛兒帖未だ掠へられざる時既に孕むこと數月、歸途にありて子を生み倉卒飮哺せしむるものなく、麪を水に和して食餌となし、左裾に包で歸る(一說に襁兒の具なきを以て麪を搏て籃形の如く し騎に置て載せ歸るともいふ)、太祖大に喜で曰く「是れ不速の客なり」と、故に朮赤と名づけたりといふ。朮赤幼より父に從て艱苦を嘗め其の征戰必ず預からざることなし、性卞急驍勇善く戰ひ將士多く其の能に服す、殺を嗜まず頗る德望あり。初め命を受けて斡亦剌、乞兒吉思、失必兒等西北の諸部を征して之を降し、太祖の金を伐つや朮赤また從て功あり、次で乞兒吉思の叛を討ち謙河(イェニセイ河の上流)を氷渡して北行し、悉く諸部を征服して歸る。後太祖西征するや朮赤また軍に從ひ、兵に將として花剌子模の諸城を下せしが、玉龍傑赤(Urgheni)を攻むるや朮赤察合台と釁隙を生じて城陷らざるもの七ヶ月に及ぶ、太祖改めて窩濶台に命じ諸軍を總制せしめて遂に之を陷る。時に太祖哲別速不台の二將に命じカスピ海の西に循て欽察を征せんとし、朮赤に命じてアラル海とカスピ海との間に駐て遙に聲援をなさしむ。然るに朮赤諸弟と睦ましからず、また其の所封の地遠く異域にあるを以て常に怏々として樂しまず、既にして西域悉く定まり太祖北に歸てシール河に至り、屢〻之を召して來り會せしめんとせしが朮赤疾を以て行かず、次で太祖東に歸るやまた朮赤を召し、未だ到らざるにまた命じて不里阿兒、欽察、斡羅思、撒拜柯思等未定の地を討平せしめんとせしが、朮赤疾と稱して行かず後幾許ならずして死す、年四十九、時に西紀一二二五年なり。

拔都(Bathu)　朮赤の次子にして太祖の嫡孫なり、兄斡魯朶と相友愛し父に從て西北軍中に駐まる。西紀一二二五年朮赤死するや太祖弟斡赤斤(Utigen)に命じ往て其の喪を見且つ嗣子を定めしむ、斡魯朶其の才拔都に如かざるを知て位を之に讓らんことを願ひ、遂に拔都を定めて嗣となす。既にして太祖死し斡赤斤馳せ歸るや、拔都また兄斡魯朶、弟昔班、唐古忒、別兒哥、別兒哥察耳(Berkejar)、脫哈帖不兒(Tuhtamur)と東に來て喪に會せり。時に拔都の封地未定なるを以て太宗即位の後西紀一二三五年フリルタイを開きて西征の議を決し、拔都を總帥となし翌年大軍を率ゐて進發せしむ（詳細は第四十一章に說明しあ

り、就て見るべし)。拔都もと貴由と隙あり、貴由は太宗の皇后脫列哥那(Turakina)の出なり、太宗の死後皇后政を攝して己の子を立てんとす、然かも太宗の遺詔あるにあらず、故を以て拔都足疾に托して行期を遷延し、屢〻之を促すに及んで終に子弟をして往てフリルタイに會せしむ。貴由立て定宗となり三年西巡して葉密爾(Emil)河に至らんとす、實は拔都を伐たんとせるなり。是に於て拔都恐れて東に來り迎謁せんとせしが、定宗途に死せるを以てまた來らず。時に元の宗王中拔都最も長ず、拖雷の子蒙哥の位に即てるは拔都の力多きによるなり。拔都斡耳朶をヴォルガ河の下流に建てゝ薩來といひ、每年春ヴォルガ河の東岸に沿うて不里阿兒の斡耳朶に至り、秋は南して薩來に駐まる、之を金斡耳朶といふ。次で喀山(Kazan)城をヴォルガ河の東岸に建て、また薩來を黑海の北撒吉剌(クリム半島の古名ソルガトSolgat)ならん)の地に建て、其の子撒里答(Partak)をして之に居らしむ。西紀一二五二年拔都將を遣はしてまた孛烈兒(Poland)に侵入せしめ、大に掠略して還りしが西紀一二五六年に至りヴォルガ河畔の薩來に死す、時に年四十八。拔都人を遇する恩あり、自ら財を私せず能く衆心を得たり、故に賽因汗(Sain Khan)と稱せらる、賽因は好の義なり。

拖雷(Tului)　元の太祖の第四子、常に太祖に從て兵事を治め功あり、太祖死に臨みて部兵を分つや、拖雷幼子を以て得る所最も多く、また蒙古本部の地を領す。次で太宗を佐けて金を征し、西紀一二三二年太宗に從て歸國するや、太宗途上に病を得、其の癒ゆるを待て北に歸りしが、此の年十月拖雷病で死す、

時に年四十、謚して英武皇帝といひ其の廟を睿宗と稱せしが、世祖の世に至り景襄皇帝と改め、武宗の時更に謚を加へ廟に耒詞を獻れり。拖雷の妃を唆魯禾帖尼(Sürkükteni)といふ、其の出に男子四人あり、長は蒙哥、次は忽必烈、旭烈兀、阿里不哥となす、定宗の死後蒙哥立て憲宗となり忽必烈嗣で世祖となる、是に於て帝位は拖雷の統に歸せり。拖雷よく父兄に事へ最も友愛に富む、元史の傳に曰く「壬辰(西紀一二三二年)五月、太宗不豫、拖雷禱二於天一、請二以レ身代一、取二巫覡祓除水一飲レ之、居數日疾癒、乃從二太宗一北還、九月至二阿剌合的思之地一得レ疾薨」と、元朝祕史及びラシッド・ウッヂン(Rashid ud-din)のヂァミ・ウト・テウァリク(Djami ut Tewarikh)の說もまた大同小異なり、柯劭忞の新元史また之を是認す。是の如く拖雷其の兄に代はりて死せしかば、其の餘慶により子孫帝王となれりとの傳說行はる、然れども世祖以下元朝の諸帝皆拖雷の子孫なれば、其の祖先を稱揚するは情の然るべきことなるに注意せざるべからず、アライ・ウッヂン・アッタ・ムルク・ヂュヴェニ(Alai ud-din Atta mulk Djuveni)のタリク・イ・ヂハン・クシャイ(Tarikhi Djihan Kushai)によれば「拖雷支那征伐より歸り其の嗜む所の酒を飲みて度を過ごし、爲めに病むこと二三日にして死せり、汗(蒙哥)は深く之を悼み終身以て悲みとなし、其の醉ふ每に之が爲め歎聲を絕たざりき」とあり、此の說或は眞に近からんか。

旭烈兀(Hulagu)　拖雷の子、憲宗世祖の弟にして阿里不哥の兄、伊兒汗の祖なり。初め旭烈兀憲宗の命を受けて西紀一二五三年西征の途に上り、天山の北麓よりアム河畔の柯提(Kesh)に至り、カスピ海の

南に木剌夷（Mulahida）を伐ち、クヒスタン（Kuhistan）を平らげて西紀一一五六年イスマイル（Ismail）派の教主魯兀乃丁（Rokn ud-din）を降し、次で西紀一一五八年八吉打（Bagdad）を攻めて之を陷れ、哈利發モスタシム（Mostassim）を擒殺してアッバス朝を滅ぼし、また親ら大軍を率ゐて西に進み、シリアを討て西紀一二六〇年アレッポ（Aleppo）を陷れ的迷失吉（Damascus）を降せり。會、憲宗の訃音至りければ其の領內に歸らんと決し、アレッポより引き返へせしが、迷思耳（Misr）即ち埃及の軍シリアを侵すに會して其の意を果さず、タブリズ（Tabriz）に都を奠め伊兒汗と稱してアム河以西波斯、小亞細亞を統領し、專らシリア、迷思耳に對して劃策する所ありしが、既にして欽察汗別兒哥（Berke）と釁隙を啓き、打耳班（Derbend）附近に相攻伐して勝敗未だ決せず、西紀一二六五年二月旭烈兀遂にチャガツ（Chagatu）河畔の冬陣中に死せり、時に年四十八。

阿里不哥（Arikbukha）　拖雷の子にして憲宗世祖及び旭烈兀の弟なり、憲宗南征するや阿里不哥に命じて喀喇和林等の地を留守せしむ、然るに憲宗軍中に死し序を以てし賢を以てするも世祖當に立つべきに、阿藍荅兒（Alendar）、渾都海（Kuntukai）等阿里不哥を立てんと謀り、西紀一二六〇年阿里不哥遂に喀喇和林の西按垣（Altai）河畔に大汗と號しぬ。是に於て世祖と阿里不哥との間に嗣立の爭起り、爭亂五年の久しきに亘りしが阿里不哥勢蹙まりて西紀一二六四年降りければ、世祖は諸王四人、將軍三人の委員を設けて其の罪を訊鞫せしめ、謀臣十人を誅して阿里不哥の死を免し、次で使を遣はして之を伊兒汗旭烈兀、欽察汗別兒哥、察合台汗阿魯忽（Alugu）に告げしめ、其の承認を得て事全く定まる、時に西紀一二六六年なり。然るに阿里不哥は其の後一ヶ月にして死し、太祖及び拖雷の墓側に葬られたり。

賈似道　字は師憲、天台の人、宋の理宗の時父涉の蔭を以て嘉興司倉に補せらる、其の姉理宗の寵を受けて貴妃となりしかば、似道擢んでられて太常丞軍器監となる。似道少くして無賴なり、日に妓樓に遊び夜は西湖に遨遊す。諸官を累ね淳祐十年端明殿學士を以て移りて兩淮を鎭し知揚州を兼ぬ、時に年三十。寶祐二年同知樞密院事を加へ臨海郡公に封ぜられ、威權日に盛なり、六年樞密使兩淮宣撫となる。開慶元年元の憲宗南伐して蜀を攻むるや、宋は似道に命じて漢陽に軍し鄂州を援けしめ、軍中に即て右丞相に拜し茂國公に封ず。鄂州將に陷らんとするや似道大に恐れ、密に使を元軍に遣はして臣と稱し幣を納れんとす、忽必烈許さず鄂州を攻むること益〻急なり、會〻憲宗死して阿里不哥大汗たらんとせしかば、忽必烈和を許し江北の地と歲幣銀絹各〻二十萬を納むるを命じて軍を北に還しぬ。然るに似道之を宋に報ずるに實を以てせず、却て大勝を以てせしかば、理宗大に喜びて少傅を加へ、其の歸るや少師に進み衛國公に封ぜらる。度宗の時太師に叙せられ、軍國の重事一に其の手に出づ、是より似道の權勢中外を壓し、已れに忤ふものを斥け一時正人朝に絕ゆ。既にして忽必烈使を遣はして約を迫まるや、似道事の露はるゝを恐れ之を抑留す、忽必烈乃ち伯顏をして大擧南侵せしむ。度宗死して恭宗立つや元軍屢〻江南に迫まる、似道大に舟師を起して蕪湖に至り、また人をして幣を輸し臣と稱せんと請ひしが、忽必烈許さず似道大に敗れ

て還る。是に於て似道遂に黜けられて高州團練使となり、縣尉鄭虎臣の拉殺する所となる、時に德祐元年（西紀一二七五年）なり。

郝經　字は伯常、澤州陵川の人、母に事へて至孝、氣節を尙び學を好む。元の世祖召して國政を諮ふ、主文統之を忌み世祖に勸めて經を宋に使せしめ、陰に李璮に屬して經を害せしめんと欲す。景定元年經翰林侍讀學士を以て國信使となり、宋に至て世祖の卽位を告げ且つ前日請和の議を徵するや、賈似道謀の泄るゝを恐れ經を眞州の忠勇軍營に拘留す。經屢〻上書して和議の利害を極陳し、且つ入見及び歸國を請ひしが報ぜず居る七年にして從者の死するもの半に過ぐ。後元の師宋を伐つや宋恐れ、德祐元年禮を以て經を歸す、宋にあること十六年なり。然るに經途に病み闕に至りし時病劇しく、幾許ならずして死す、年五十三、謚を文忠と賜ふ。著はす所續後漢書、易春秋外傳、太極演原古錄、通鑑書法等あり。

張世傑　范陽の人、初め元將張柔に從て杞に戍せしが、罪を獲て遂に宋に奔る、呂文煥召して小校となす、後累官して保康郎、節度使知平口に至り、越國公に封ぜらる。元軍臨安に迫まるや文天祥と共に戰を主張せしが、陳宜中の爲めに妨けられて果さず、後端宗を立て次で帝昺を奉じて厓山に遷る。防戰遂に利あらず陸秀夫帝を負うて水に投ずるに及び、世傑小舟を以て楊太后を奉じて脫し去り、占城に赴き土豪の防ぐ所となり廣東に歸りしが、太后既に死せるを聞き、兵を收めて海陵山に至り颶風に遇ひ舟覆りて死せり。

陸秀夫　鹽城の人、初め進士に擧げられ累官して禮部侍郎に至る。端宗の福州に立つや、端明殿學士

僉書樞密院事に遷る。帝死して群臣多く去らんと欲す、秀夫士心を激し帝昺を立てゝ恢復を圖り、左丞相に任ぜられ樞密使を兼ぬ。次で首相に拜するに及び、張世傑と共に政を秉りて內外の事に盡悴し、忽遽流離の中と雖も尙ほ日に大學を進講す。祥興二年二月元軍と厓山に戰て敗れ、免かるべからざるを知るや、先づ其の妻子を驅て海に入れ、次で帝を負うて海に投ず、時に年四十四。

文天祥　字は履善、一の字は宋瑞、吉州盧陵の人、理宗の時進士の第に魁たり、刑部左司郎權直學士となりしが、度宗の時賈似道に忤ひて致仕す、後また起て知贛州兼江西安撫使となる。恭宗の時元軍入寇するや天祥詔に應じ慨然起て孤兵を提け、臨安に至りて知平江府兼督府參謀に任ぜられしが、廷議旣に降るに決し天祥をして元軍に使せしむ。天祥乃ち往きて元將伯顏に謁し、辭氣慷慨議論屈せず、伯顏怒りて歸さゞりしが後夜潛に遁れて歸り、屢〻元軍と戰ひしが元將張弘範の爲めに五坡嶺に執へられて燕京に送らる。元主屢〻降を勸むるも天祥屈せず正氣の歌を作りて志を述べ、遂に燕京の柴門に斬らる、時に元の至元十八年にして天祥年四十七なり。其の衣帶中の贊に曰く「孔曰成レ仁、孟曰取レ義、惟其義盡所ニ以仁至一、讀ニ聖賢書一所レ學何事、而今而後庶幾無レ愧」と。

伯顏（Bayan）　蒙古巴鄰部の人、世〻其の部の千戶たり、初め父曉古台と共に旭烈兀に從ひ西域を討つ、後歸りて禁中に留められ、國事に參與し中書左丞相に拜せらる、裁決流るゝが如し。世祖の宋を伐つや史天澤と共に中書左丞相行省荊湖に拜し、天澤病で死するに及び獨り其の任に當り遂に宋の恭宗を降

す、功により同知樞密院事に拜す。次で北平王の子昔里吉(Siréki)の叛を平らけ、知樞密院事に進み喀喇和林を鎭す。後宗王明里鐵木兒(Melik Timur)叛するや、また伯顏に命じて之を討たしめ直に降す。既にして海都叛して入寇す、伯顏之を喀喇和林に防ぎ遂に之を破れり。世祖死する時伯顏遺命を受けて成宗を輔翼す、成宗乃ち太傅を加へ、軍國の重事江南三省を錄せしむ。會〻伯顏疾あり至元三十一年十二月死す、年五十九。成宗の大德八年淮南王に加封し、忠武と謚す。

張弘範　字は仲疇易州定興の人、元の世祖に仕へて行軍總管に任ぜられ宋を伐つ、弘範兵を率ゐて漢江を徇へ、鄂を略し長驅して金陵に至る。次で轉戰して宋室を追ひ、五坡嶺に文天祥を擒にし、舟師を以て厓山に宋を滅ぼす。是に於て厓山の陽に石を磨し功を紀して歸り、入朝して宴を賜ひ慰勞甚だ厚し。既にして病作り至元十七年死す、年四十三、淮陽王を加封し獻武と謚せらる。

劉秉忠　字は仲晦、初名は侃、後僧となりて子聰と名づく、其の先は瑞州の人、世〻遼に仕ふ。年十七にして府令史に補せられしが、刀筆の小吏たるを悅ばず去て僧となる。後僧海雲と共に元の憲宗に見え數〻顧命を受く。博學にして最も易に精し、世祖之を悅び遂に留めて大計に參せしめ、太保參豫中書省事に拜せられ、劉氏に復して名を秉忠と賜ふ。秉忠奏して國號を大元と定む、易の乾元に取れるなり、元初の成憲皆其の手裁する所にかゝる。至元十一年死す、年五十九。世祖其の功を嘉して趙國公に封じ、謚して文貞といふ。著はす所藏春散人集十卷あり。

高麗の忠烈王　高麗第二十五代の王、初名は諶、後に昛と改む、元宗の長子なり、西紀一二七五年位に即く。王は太子たる時より元に赴きて世祖の女齊國大長公主を娶り、後屢〻元に朝して歡心を迎へ、國內に令して辮髮となし元服を着けしむ。西紀一二七三年世祖日本を侵して壹岐對馬を取り、肥筑の海岸に寇して敗るゝや、忠烈王更に兵を出すを請ひ、西紀一二八一年金方慶をして兵四萬を率ゐて元軍に從ひ、九州を侵さしめて大敗す。後請うて位を世子忠宣王に讓りしが、一年ならずして復位を命ぜらる。在位三十四年にして死す、年七十三。時に西紀一三〇八年なり。

阿剌罕（Arakhan）　蒙古の札剌兒氏、其の父祖以來多く戰功あり、萬戶を食む、阿剌罕其の後を嗣ぎて封を襲ふ。元の世祖の宋を征するや、伯顏と共に將となりて軍功あり。宋の滅亡後江東宣撫使となり、次で左丞相に拜せらる。至元十八年世祖の命を受け、總督となりて日本に侵寇せしが、途次慶元に於て病死せり、

阿塔海（Atakhai）　孫都思の人、至元の初め中書右丞に拜し、樞密院事を兼ぬ。世祖宋を伐つや伯顏に從ひて南下し、各所に轉戰して功あり。至元十八年世祖兵を發して日本に寇するや、將軍阿剌罕俄に死せしかば、代はりて其の事を總べしも、未だ發せずして全艦覆沒の難に遇へり。二十一年世祖また阿塔海をして占城を征せしめしが、遂に功を成す能はずして還る。死して昌順郡王に封じ、武敏と謚せらる。

范文虎　もと宋の將にして呂文德の婿、殿前副指揮使に累遷す。元と戰ひて功ありしが呂文煥襄陽を

以て降るや、共に降り元の將となりて宋を滅ぼし、左丞相に拜せらる。至元十八年命を受けて日本を侵し、颶風に遇うて船壞れしが、幸にして生還するを得たり。二十四年諸王乃顏反し世祖親征するや、文虎に命じ衛軍五百に將として鎭せしむ。後病を以て死せり。

阿合馬（Ahmad）　普通に波斯人と稱するも實は中央亞細亞のシール河畔フェナケット（Fenaket）の人なり、財賦の事に通じ元に仕へて世祖の信任を得、鐵冶を興し鹽稅を增して頗る成績を擧げ遂に平章中書政事に拜し、また製國用司の事を領す。次で平章尙書省事に任ぜられて天下の戶口を括し、藥林權茶に至るまで遺す所なく專ら聚斂を事とするに至り、加ふるに威刑を示し賄賂を貪りしかば遂に中外の怨を受け、至元十九年益都の千戶王著の鎚殺する所となれり。既にして世祖樞密使孛羅に詢ひ始めて阿合馬の姦を知り、命じて其の墓を發き棺を剖て屍を戮し、通元門外に棄てゝ、犬に食はしめ、また其の家を籍沒し其の子四人を誅し其の黨與を黜けたり。

海都（Kaidu）　元の太祖窩濶台の孫にして合失（Kashi）の子なり、太宗の時拔都の西征に從ひ別軍を率ゐて波蘭に向ひクラカウ（Krakau）を取り、シレジア（Silesia）に入りて歐北諸侯王の聯合軍をワールスタット（Wahlstadt）に破り、東南に轉じてモラヴィア（Molavia）を侵しオルミウッツ（Olmütz）を攻めて拔く能はず、匈牙利に入りて拔都の本軍に會せり。既にして太宗の訃信至り蒙古軍東に引き還るや、海都また還りて其の領地に入りしが、後幾許ならず定宗死し拖雷の子蒙哥立ちて憲宗となりしかば、太宗の子孫悅ばずして叛を謀るものあり、憲宗之を平らげ其の他の諸王を遠地に移して分遷するや、海都また海押立（Kayalik）に遷さる、是より其の封地の險遠なるを恃みて頗る跋扈の志あり。後憲宗死して世祖嗣で立ち阿里不哥僭號するや海都は阿里不哥に附きて世祖に抗せしが、阿里不哥遂に敗れて降るに及び海都は也迷里（Emil）河畔に退きて兵力を養ひ、世祖屢〻徵せども至らず、西紀一二六八年諸王を誘うて遂に亂を作せり。海都權智人に過ぎ籠絡を善くせしかば諸王之に應ずるもの多し。是に於て世祖は察合台の曾孫八剌（Borak）を察合台汗となし、拔都の孫忙哥帖木兒（Mangu Timur）を欽察汗となして海都に備へしに、八剌は忙哥帖木兒と共に皆海都と連和し海都を仰ぎて大汗となせり。獨り伊兒汗阿八哈（Abaka）は世祖の弟旭烈兀の子なるを以て海都に抗せしも、其の死後繼承の爭起りて海都を拘制する能はざりしかば、海都は八剌の死後其の子都哇（Dua）を察合台汗となし、兵を併せて東の方元を侵し、滿洲吉林及び遼東地方にある太祖の諸弟の子孫を誘うて世祖を夾擊しぬ。然るに世祖は伯顏をして海都を喀喇和林に扼せしめ、親ら滿洲を平定せしかば海都西に去りしが、西紀一二九四年世祖死して其の孫成宗位に即くや海都また屢〻入寇し、遂に大擧して元に迫まりしに成宗の姪海山（Kaisan）喀喇和林を守り逆擊して大に之を破りしかば、海都遂に志を得ずして退き歸途に死す、時に一三〇一年なり。

合贊汗（Ghazan Khan）　伊兒汗國第七代の主にして阿魯渾（Arghun）の子なり、西紀一二九五年位に即きイスラム教に歸依して佛教を排斥せしが基督猶太の兩教徒を苦しめず、憲政を改革して文教を興

し賞罰を正うし貪暴を禁ず、蒙古諸汗中の賢君と稱せらる。合贊また羅馬法王ボニファチオ（Bonifacio）八世と同盟して十字軍に加はり、埃及を伐ちシリアを恢復して大に國威を張り、また東羅馬皇帝アンドロニコス（Andronicos）と婚を通じ、英吉利王エドワルド（Edward）一世と使聘を通ぜり。西紀一三〇五年合贊病に罹り其の起たざるを知るや、遺言して位を弟ウルジァイツ（Uljaitu）に讓り次で死す、合贊の世は實に伊兒汗國最盛の時代にして是より後國勢漸く衰ふるに至れり。

月即別汗（Uzbeg Khan）欽察汗國第七代の主にして拔都五世の孫なり、西紀一三一三年叔父脫脫（Tukhta）に嗣で位に即く、時に年僅に十三なりしが豪邁にして雄略あり、在位二十八年の間內はよく露西亞の諸候を威服し、外は伊兒汗と難を搆へ、また東羅馬及び埃及と親密なる關係を結べり、故に拔都、別兒哥（Berke）及び後のトクタミシ（Toktamish）と共に欽察汗國の著名なる君主と稱せらる。月即別またイスラム教を尊崇して其の僧侶學者を優遇せしが、然かも希臘教を保護し加特力教の宣教を許し、また貿易を奬勵せしかば、羅馬法王及び希臘教主の使節、ジェノワ（Genova）の紳商等來朝するに至り、欽察汗國は此の時を以て隆盛の極に達せり。西紀一三四〇年死す、年四十。

趙復　字は仁甫、德安の人、儒學を以て世に重んぜらる、其の徒稱して江漢先生といへり。宋の理宗の端平三年元の太宗其の子濶端をして南侵せしめ、姚樞に命じ軍に從て儒釋道醫卜凡そ一藝あるものを收めしむ。元軍の德安を陷るゝや趙復既に獲られ、北行するを欲せずして死を求む、姚樞之を止めて曰く「徒に死するは益なし、吾に隨て北せば他なきを保すべし」と、遂に伴うて燕京に至り名益、著はれ、就て學ぶもの百人に及べり。是より北方始めて經學を知り、姚樞また程朱性理の書を覩るを得たりといふ。

姚樞　字は公茂、雪齋と號す、柳城の人、後洛陽に徙る、少うして學を力む。初め金に仕へて軍資庫使となりしが、元軍金を攻め許洲破るゝに及び楊惟中の爲めに獲らる、元の太祖姚樞を見て甚だ喜び特に重きを加ふ、太宗また之を重んじ燕京行省郎中を授く、軍に從て南侵し趙復を伴ひ還り、是より程朱の學を講ず。後職を解き家を携へて輝州に徙り、家廟を作りて孔子及び宋儒の像を列ね、小學四書及び諸經傳註を刊し以て學者に惠む。世祖太弟たる時之を召し待つに客禮を以てし治道を詢問す、後翰林學士に拜せらる。至元十七年死す、年七十八、文獻と謚す。

許衡　字は仲平、懷州河內の人、家世〻農を業とす、後蘇門山に移居す。天下方に兵爭を事とするの時慨然として道を以て己が任となす、性平正篤實にして講學を好む、其の文また質樸なり、世に魯齋先生と呼ばれ元儒の太宗と稱せらる。世祖位に即き許衡を以て國子祭酒に任ず、既にして病を以て謝して歸り、屢〻書を上りて政事を切論す。至元十八年死す、年七十三、四方の學者訃を聞き號哭せりといふ。遺命して謚を請ふなく、また碑を建つるなからしむ。成宗大德の初め文正と追謚す、武宗の至大二年魏國公に追封せられ、仁宗の皇慶二年詔して孔子の廟に從祀す。

劉因　字は夢吉、保定容城の人、初め經學をなし訓詁註釋の說を究む、嘆じて曰く「聖人の精意殆ど

此に止まらず」と、周邵程朱の書を得るに及び一見して即ち曰く「我もと是あるべきを謂ものなり」と、其の學の長ずる所を論じて曰く「邵は至大なり、周は至精なり、程は至正なり、朱子は其の大を極め其の精を盡くし、之を貫くに正を以てするなり」と、諸葛亮の靜以修ノ身の語を愛し居る所を表して靜修といふ。世祖の至元十九年詔して之を徵し、右贊善大夫に擢でられしが、次で繼母の老を以て辭し歸り、俸給一も受くる所なし、後また集賢學士を以て徵せしが書を宰相に上つりて力辭す、世祖之を聞て曰く「古に所謂不召の臣あり、其れ斯の人の徒か」と遂に强ひず、至元三十年死す、年四十五。

金履祥　字は吉父、蘭溪の人、幼より敏睿、孝行を以て稱せらる、長ずるに及び王栢及び何基の門に遊ぶ、何基は黃幹に學び、黃幹は親しく朱熹の傳を得たるものとす。宋の末策を獻ぜしも用ひられず、德祐の初め史館編修を以て召されしも辭して就かず、宋の將に亡びんとするや遂に意を進取に絕ち、金華山中に屛居し後學を訓廸して諄切倦むことなし、後仁山の下に遷て講說す、學者よりて仁山先生と稱す。成宗の大德七年死す、文懿と諡す。著はす所大學疏義、尙書表註、論孟考證、中庸標註、通鑑前編、仁山文集、濂洛風雅等あり。

吳澄　字は幼淸、撫州崇仁の人、黃幹三傳の弟子なり、宋末進士に擧けられて第せず、布水谷に隱居して讀書著述を事とし遂にまた出でず。世祖の至元中召されて京師に至りしが母の老を以て辭し歸る。武宗の至大元年召されて國子監丞となり、皇慶元年司業に陞り、次で集賢直學士を拜し、英宗即位の初め翰林學士に遷り、泰定中老を以て致仕す、朝廷其の功德を褒して資善大夫を加へ金織文綺を賜ふ。是より家居して徒に授く、四方來り學ぶもの千人に下らず、少暇あれば即ち書を著はす、居る所草屋數間、程鉅夫題して草廬といふ、故に學者稱して草廬先生となす。其の著はす所周易纂言、春秋纂言、書纂言等あり、また皇極經世書、老子、莊子、太玄經、樂律、八陣圖、郭璞葬書等を校正せり。文宗の至順三年死す、年五十八、臨川郡公に封ぜられ文正と諡す。吳澄嘗て學者の爲めに言ふ「朱子の道は問學の功多きに居り、陸子靜は德性を尊ぶを以て主とす、問學は德性に本づかざれば其の弊必ず言語訓釋の末に偏せん、故に學は必ず德性を以て本となす」と、是を以て議者遂に吳澄を以て陸氏の學となすに至れり。

元好問　字は裕之、遺山と號す、大原秀容の人、其の父德明金に仕へ文學を以て名あり、好問また仕へて內鄕令より尙書省左司員外郎に官す、詩文を以て名を海內に藹かすもの三十餘年、金亡びてまた仕へず野史亭を構へて著作吟咏以て自ら任じ、金史を修めんとして中州集百餘卷及び金源君臣言行錄を作る。宋の理宗寶祐五年死す、年六十八。其の才の雄に學贍なる金元間に於て詩文共に大宗たり、其の詩は興象深邃風格遒上なり、古文に至ては繩尺嚴密衆體悉く備はる、今世に行はるるものに元遺山全集四十卷あり。

趙孟頫　字は子昂、松雪道人と號す、宋の太祖の後にして湖州の人、年十四父の蔭を以て入りて仕へ宋亡びて家居す。世祖の至元二十三年御豪侍御史程鉅夫詔を奉じ遺逸を江南に訪ひ、孟頫を得て見ゆ、兵部郎中を授かり集賢直學士に遷る。仁宗の延祐三年翰林學士承旨榮祿大夫に累官し、英宗の至治二年死す、

年六十九、魏國公に追封せられ、文敏と謚す。孟頫才氣英邁神采煥發、五朝に歷事して厚眷を受く、詩文清邃奇逸、また書畫を善くし經濟の學に通ず、著はす所尙書注、琴原、樂原、松雪齋集あり。其の書は篆籀分隸眞行艸共に古今に冠絶し、其の畫は山水木石花竹人馬に妙を得たり。

虞集　字は伯生、道園と號す、宋の虞允文五世の孫にして臨川に居る。成宗大德の初め京師に至り國子助敎に除せられ、集賢修撰に遷り、後翰林直學士に拜せられて國子祭酒を兼ね、經史中の心德治道に切なるものを取て日々進講し、凡て顧問を承くれば必ず事に隨て規諫し、一時の大典冊咸な其の手に出づといふ。順帝の至正八年死す、年七十七、仁壽公を贈り、文靖と謚す。性孝友にして學問博洽、平生の詩文稿を存するもの十の二三に過ぎずといふ、其の著に道園學古錄五十卷あり、今世に存するものに道園全集七十六卷あり。

楊載　字は仲宏、福建浦城の人、後杭州に徙る、年四十にして仕へず、趙孟頫翰林にあり其の作る所の文を得て之を推重せしより文名隱然として京師を動かす、戶部賈國英數〻之を朝に薦め、布衣を以て翰林國史院編修となり、武宗實錄を修む。延祐二年進士に登り、承務郎儀州路同知浮梁州知事を授かり、寧國路總管府推官に終る。英宗の至治三年死す、年五十三。其の著に楊仲宏詩集八卷あり。元史にいふ「其の文章は氣を以て主となす、而して詩に於ては最も法度あり、其の詩出でゝより一に宋末の陋を洗へり」と、固より溢美の言にあらず。

范梈　字は亨父、一に德機といふ、淸江の人天資朗異卓然自立す、初め北遊して燕京に居り、人の薦を以て左衛敎授となり、後翰林院編修に遷り、出でて嶺海廉訪使照磨となり、諸官に歷仕して天曆二年湖南嶺北道廉訪使經歷を授けらる、母の老ひたるを以て未だ任に赴かず、明年母を喪ひ毁を以て遂に死す、時に至順元年にして年五十九なり。著はす所燕然藁、東方藁、豫章藁、侯官藁、江夏藁、百丈藁あり、范德機詩集七卷は其の詩を蒐めたるものなり。

揭傒斯　字は曼碩、龍興富州の人、父來成は宋の鄕貢進士たり、傒斯五經に通じ能く文を屬す、其の詩は淸麗婉轉にして神骨秀削なり、仁宗延祐の初め薦を以て國史院編修を授けられ、經世大典及び遼金二史を與かり修む、また文宗の時太平政要策を編して上つる、後累遷して翰林院侍讀學士に至り、順帝の至正四年官に死す、年七十一。豫章郡公に追封せられ、文安と謚す。其の著に揭曼碩詩集三卷あり。

薩都剌　字は天錫、直齋と號す、もと色目人なり、其の祖を薩剌布哈、父を傲剌齊といふ、世勳を以て雲代を鎭め雁門に居る、故に世稱して雁門の薩都剌といふ。泰定四年の進士なり、累遷して御史となりしが、權貴を彈劾せしを以て京口錄事長に左遷し、次で燕南架閣官より閩海廉訪知事に遷り、河北廉訪經歷に進む。詩を嗜み書を善くす、其の詩は最も情に長じて流麗淸婉なり。晩年武林に寓居するや、常に瓢を笠に挂け芒鞋を踏みて深山幽谷に逍遙し、頗る閒適の趣を極む。其の詩集に雁門六卷あり。

楊維楨　字は廉父、諸暨の人、氣度高曠、山水の間に周遊す、早歲吳山の鐵冶嶺に屏居して萬卷樓を

築き、鐵崖を以て自ら號し、また鐵笛子と號す。其の文辭秦漢にあらざれば學ばず、晩年に至り天下の才俊贄を投じて文を求むるもの虛日なし。著はす所三百餘卷、其の詩集に楊鐵崖詩集二十六卷あり、元亡びて明の太祖諸儒を召し禮樂を纂するに及び、維楨が前朝の老文學なるを以て使を遣はし幣を奉じて其の門に詣らしむ、維楨遂に謝して就かず、洪武三年死す、年七十五。

郭守敬　字は若思、順德邢臺の人、父榮五經に精し、守敬また父の資を受けて水利に習ひ曆法に精しく巧思人に絕す、初め劉秉忠に就て學ぶ。中統二年張文謙の薦により世祖に上都に見えて水利の六事を面陳し、命を受けて西夏瀕河五州の諸渠を興復す。至元の初め劉秉忠曆法改訂の必要をいひしが、未だ其の議を用ふるに及ばずして秉忠死し、十三年江南略〻平らぎ天下混一するや、世祖其の言を思ひ遂に新曆を改修するを議し、局を立て守敬と王恂とに詔して較定せしめ、張文謙と張易とを以て之を領せしめ、許衡をして其の事に參預せしむ。是に於て守敬曆の本は測驗にあるをいひ、諸種の測儀を創作して測驗をなし、十七年に至り其の較定せる新曆を上つるや、世祖詔して之を頒行し名を授時曆と賜へり。然るに曆既に頒つと雖も推步の式、立成の數尙ほ未だ成書あらざるを以て守敬乃ち比次編類し、整齊分抄して推步七卷、立成二卷、曆議擬稿三卷、轉神選擇二卷、上中下三曆註式十二卷となし、二十二年太史令に陞り遂に其の書を奏上す。守敬また時候箋註二卷、修改源流一卷、儀象法式二卷、二至晷景考二十卷、五行細行考五十卷、古今交食攷一卷、新測二十八舍雜坐諸星八宿去極一卷、新測無名諸星一卷、月離攷一卷を著はし竝に之を官に藏せり。次で昭文館大學士、知太史院事となる。仁宗の延祐三年死す、年八十六。

李治　元史に李冶とするは誤なり、施國祁の禮耕堂叢說、元の王惲の中堂紀事、金の少中大夫程震の碑に皆李治に作れり、李治にあらざる證となすべし。字は仁卿、眞定欒城の人、金の進士、高陵主簿を授けられ、辟して知鈞州事となす。金亡びて北渡し講學著書を事とし算數に精通す、道德文章を以て自ら守り、老に至て衰へず。世祖其の名を聞き召して官に拜せんと欲せしが、固辭して受けず封龍山下に居り學徒益々衆し。至元の初め再び學士を以て召され、職に就き暮月老病を以て辭し去る。年八十八にして死す、其の著に敬齋文集、壁書彙削、泛說、古今難、測圓海鏡、益古衍疑、敬齋古今黈等あり。

八思巴 (Phagspa Lodoi Gyaltshan)　吐蕃の人、喇嘛扮底達 (Pandita) の姪、生れて七歲經を講ずる數十萬言、よく其の大義に約通す、國人之を號して聖童といふ。年十五の時元の世祖に謁す、世祖與に語て大に悅び伴ひ還りて日に親幸せられ、中統元年世祖位に即き八思巴を尊び國師となして玉印を授け、教門の事を統領せしむ、時に年二十二。次で八思巴に命じて蒙古新字を製せしめ、至元六年之を天下に頒行す、功を以て帝師大寶法王の號を授く、時に年三十一。至元十一年八思巴請うて西に還り、其の弟亦憐眞を以て帝師を嗣がしむ。至元十六年八思巴四十二歲を以て吐蕃に死す、詔して皇天之下一人之上宣文輔治大聖至德普覺眞智佑國如意大寶法王西天佛子帝師を贈る。著はす所に彰行知論あり。

邱處機　字は通密、長長春眞人と號す、登州棲霞の人、西紀一一四八年生まる、弱冠家を出でて全眞

敎の開祖王重陽に師事し、磻溪龍門に往する十三年、力を積み久しく學んで道乃ち成り登州に還る、金宋屢々使を遣はして徵聘せしが行を果さず、會々元の太祖其の名を聞き西征の途使者劉仲祿を遣はして之を迎へしむ、時に西紀一二二一年なり。是に於て眞人其の弟子李志常等を從へ劉仲祿と共に先づ蒙古に入り、怯綠連（Kenlen）河に進み、更に土剌（Tula）河岸に沿ひ、カラコルム嶺を過ぎてウルムチ（Urumtsi）に達し、次で畏兀兒の地を經て阿力麻里（Almalik）に向ひ、イシク・クル（Issik Kul）湖の北方を通ずる道路によりてサイラム（Sairam）、ホージェンド（Khojend）を過ぎ撒麻耳干（Samarkand）に至る。此の時撒麻耳干には太祖の使節あり、之を迎へてケシ（Kesh）及び鐵門關を經てバルク（Balkh）に護送す。太祖之を引見して長生の藥を問ふ、眞人答へて曰く「衞生の道あるも長生の藥なし」と、太祖其の誠實を嘉みして之を軍中に留む。既にして眞人老齡を以て東歸を請ひ、西紀一二二四年山東の故山に還り、次で西紀一二二七年死す、年八十。明年李志常其の紀行二卷を錄して西遊記といふ、實に當時の蒙古、中央亞細亞、波斯、印度北境の地理を研究すべき好史料なり。

プラノ・カルピニ（Joan du Plano Carpini）　西紀一一八二年伊太利のウムブリア（Umbria）に生まる、長じてフランシスコ派の僧となり獨逸西班牙に布敎す。會々蒙古軍東歐羅巴に侵入して到る處を蹂躙し歐羅巴全土震撼するや、羅馬法王インノケント四世は使者を蒙古に派して基督敎國を侵擊するなからんことを請ひ、且つ蒙古の國情及び勢力を探らしめんと欲し、六十五歲なるカルピニを一行の長となして發せしむ。是に於てカルピニはボヘミアの僧スチプン（Stepien）等と西紀一二四五年四月法王の駐輦地リヨン（Lyons）を發し、ボヘミアに入りて其の王ヴェンチェスラフ（Venceslav）を訪ひ、ブレスラウ（Breslau）に於て波蘭の僧ベネヂクト（Benedict）を一行中に加へて通譯たらしめ、先づ欽察汗國に向ひキエフ附近カネフ（Kanev）に至るや、スチプン倒れて進む能はざるを以て玆に留め、更に進んでドニエプル（Dnieper）及びドン（Don）兩河を渡り、ヴォルガ（Volga）河畔に達して西紀一二四六年四月薩來に入る。時に拔都はカルピニ一行を引見して法王の親翰及び進物を受け、更に進んで蒙古に赴き大汗に謁すべきを命ぜしかば、カルピニまた東に進み驛站より驛站に送られてウラル（Ural）河を渡り、カスピ海及びアラル海の北を過ぎてシール河を渡り、西遼の故地を通過しズンガリア（Zungaria）地方の湖沼に沿うて乃蠻の故地を過ぎ、オルホン（Orphon）河畔に至り七月遂に喀喇和林に達せり、實に日を重ぬる百六日、二千哩を跋涉したりといふ。時に定宗新に立ち此の歲八月即位の禮を行ひ、支那蒙古の文武諸官、亞細亞歐羅巴の諸王侯及び使節等來朝して之を賀す、カルピニまた是等の來朝者と共に八月二十四日即位式に臨み、次で定宗に謁し十一月に至り定宗の返翰を得て歸途に就き、西紀一二四七年六月九日キエフに達し、次で獨逸に向ひライン（Rhine）河を渡り、再びリヨンに赴きて法王に謁し定宗の返翰を呈せり。是に於て法王其の功を嘉みし、カルピニをダルマチア（Dalmatia）のアンチヴァリ（Antivari）の大僧正に任ぜしが、西紀一二五二年八月一日年七十を以て死せりといふ。カルピニの拉丁文を以て此の旅行報告を記せるもの今尚ほ存し、歐羅巴人

最初の東方紀行として尊重せらる。

ルブルク（Guilielmus de Rubruquis）　西紀一二二五年佛蘭西の北方聖オーメル（St. Omer）の北東八哩半なるルブルク（Rubrouck）村に生まれたりといふ、然かも其のフランシスコ派の宣教師として東方に赴くまでの事蹟詳かならず。初め佛蘭西王ルイ九世のキプロス（Cyprus）島にあるや、西紀一二四八年の末波斯及びアルメニアを鎮せる蒙古總督宴只吉帶（Ilchikadai）の使節の來聘を受けしかば、ロンジュメル（Longjumel）の僧正アンドリュー（Andrew）等に命じ、進物及び返翰を齎らして宴只吉帶及び蒙古の大汗を訪はしめ基督教弘布の許可を得んとせしに、アンドリュー等西紀一二四九年の末蒙古に至れば定宗既に死して憲宗未だ立たず、攝后斡兀立海迷失（Ogul Gaimish）の返翰を得て歸り來り、遂に其の目的を達する能はざりき。既にしてルイはバレスチナ旅行中欽察汗國より歸れるネストリウス教僧の言を聞き、拔都の子撒里答（Sartakh）が基督教を信ずるを知りルブルクに命じて先づ撒里答に謁し布教の許可を與へんことを請はしむ。是に於てルブルクは西紀一二五三年四月バレスチナを發す、隨ふもの僧徒二人あり、先づコンスタンチノプルに至り次でクリム半島に向ひ、スダク（Sudak）に上陸し進んでヴォルガ河畔三日程を距る撒里答の營に達し、之に謁してルイの親翰を呈せしに撒里答はルブルク等一行を拔都の帳殿に送りぬ。然るにルブルクの拔都に謁しルイの親翰を呈して來意を述ぶるや、拔都はルブルク等の在國を許可するのは大汗蒙哥の指揮を仰がざるべからず、よりてルブルク自ら入朝して之を請願すべしと告げ、事を與へて出發せしむ、時に同年九月十五日なり。ルブルク乃ちヴォルガ河畔を去て東に進み、康里、西遼、畏兀兒、乃蠻の故地を經て同年十二月二十七日喀喇和林の南數日程なる大汗の廷に達し、次で憲宗に謁してルイ及び拔都の親翰を呈し、在留布教の許可を得んことを請ひしが、憲宗は唯三ケ月間滯在の許可を與へたるのみ。次でルブルクは憲宗に從ひて喀喇和林に赴き、茲には嘗て捕はれ來りし佛蘭西人、匈牙利人、露西亞人、阿蘭（Alani）人、グルジア（Georgia）人、アルメニア人其他多數の基督教徒の居るを見たりといふ。ルブルク蒙古に留まること五ケ月憲宗よりルイに與ふる親翰（畏兀兒文字を以て蒙古語を綴りたるもの）を得て西紀一二五四年六月歸途に就き、遂に欽察汗國の境に達し轉じて高加索の途を取りアルメニア、波斯、小亞細亞、シリアを通過してアッカ（Akka）の寺院に還りぬ。爾るに是より先き一年ルイ既に佛蘭西に歸りしかば、ルブルクは西紀一二五五年八月トリポリ（Tripoli）に至り書を佛蘭西に送りて之を報告せるもの今尚ほ存してルブルクの旅行記と稱し尊重せらる。此の後ルブルクの事蹟は明かならず、唯マルコ・ポロのヴェネチアに歸れる西紀一二九三年に未だ生存し居たることを知り得るのみ。

マルコ・ポロ（Marco Polo）　伊太利ヴェネチア（Venice）の人にして西紀一二五四年生まる、其の父ニコロ・ポロ（Nicolopolo）及び叔父マフェオ・ポロ（Maffeo polo）は西紀一二五七年の頃商業の目的を以てコンスタンチノプルに赴き、次でクリミアを經て薩來に至り欽察汗別兒哥（Berke）に謁し、更にカスピ海の北岸を回りて不花剌（Bokara）に達し留まること三年、會々蒙古の使節波斯より歸るに遇ひ、其の一行に加

はりて蒙古に赴き、次で燕京若しくは上都に至りね。世祖乃ち兄弟を引見し歐羅巴諸國の情勢を聽きて大に喜び、羅馬法王に送る自署の親書を兄弟に與へ、大汗の使節として歐羅巴に赴かしむ、蓋し科學及び技藝に長ぜる一百人を聘用せんが爲めなりきといふ。ボロ兄弟は西紀一二六九年ヴェネチアに歸りしが當時羅馬に法王なく、後グレゴリオ（Gregorio）十世新に立つに及び、漸くドミニコ派（Dominican）の僧二人を伴ひ出發せしも、既にして二僧長途の苦を恐れて去りしかば再びヴェネチアに歸り、遂にニコロの子マルコ・ボロを伴うて西紀一二七一年十一月蒙古に向て出發しぬ。かくて一行はアルメニア、シリア、波斯を經てアム河を渡り、パミール（Pamir）を越え天山南路を過ぎ、西紀一二七五年春遂に上都に達せしに、世祖は其の不成功を責めず却て之を厚遇し、殊に年少なるマルコ・ボロが孜々として蒙古の言語風俗を學ぶを見て之を寵用せり。次でマルコ・ボロは喀喇和林、大理、緬國、安南、占城、南印度等に使し、揚州都督に任ぜられて職にあること三年、益々世祖の信任を得て樞密副使に累進しぬ。然るにボロ等支那に留まること既に十七年の久しきに及び、此の間屢々西歸の許可を請ひ世祖之を許さゞりしが、會々世祖の女と波斯の伊兒汗阿兒渾（Arghun）との婚約成り、海路により公主を送らんとするや蒙古人航海を恐れて躊躇するを見、世祖遂にボロ等に命じて護送の任に當らしめければ、西紀一二九二年の初めザイトン（Zaiton 刺桐）即ち泉州を發し、占城、爪哇、蘇門答剌、印度南岸、錫崙等を經て波斯灣に入り、公主を波斯に護送しぬ（時に阿兒渾既に死せしかば公主は其の子合贊（Ghazan）に嫁せりといふ。）ボロ等既に其の任務を果せるを以て更に鄉里に向ひ、タブリズ、トレビゾンド（Trebizond）、コンスタンチノプル、ネグロポント（Negroponte）等を經て西紀一二九五年末ヴェネチアに歸れり。既にしてヴェネチアとジェノワ（Genova）との間に戰起り、マルコ・ボロまたダンドロ（Dandolo）の下に屬して出陣せしが、西紀一二九八年ドリア（Doria）の帥るるジェノワ軍とクルゾラ（Curzola）に戰ひ、敗れて擒にせられジェノワの獄中に繫がるること一年、此の間其の東方見聞談を同檻せるピサ（Pisa）人ルスチチアノ（Rusticiano）に語りしが、後年遂に一部の書籍となりて行はる、是れ即ち有名なるマルコ・ボロ旅行記なり。マルコ・ボロは西紀一二九九年赦されてヴェネチアに還り、西紀一三二四年を以て死す、時に年七十。

モンテ・コルヴィノ（Giovanni di Monte Corvino）　普通にジァン・ヅ・モンテ・コルヴィノ（Joan du Monte Corvino）と稱せらる、西紀一二四七年伊太利に生まる、長じてフランシスコ派の僧となり、西紀一二七四年には東羅馬皇帝ミハエル・パラエオロゴス（Michael Palaeologos）の命を受け、羅馬法王グレゴリオ（Gregorio）十世の許に使して希臘拉丁兩教會の合同を圖り、次で西紀一二七五年より一二八九年に至る間には西亞細亞及び波斯方面に於ける布教に盡力しぬ。西紀一二八九年コルヴィノ再び法王廷に赴き法王の使節として波斯の伊兒汗、蒙古の大汗及び附近の諸王侯に向て派遣せられ、タブリズに赴き次で波斯の諸市を過ぎて印度に入り、マドラス（Madras）地方にありて西紀一二九一年十二月故國に書を送り、西紀一二九三年海路より支那に達しカンバリグ（Khanbaliq）即ち燕京に赴き、元の世祖の許可を得て教會堂を建

立するに至り、西紀一三〇六年にはコロン（Cologne）の僧アーノルド（Arnold）來りて共に布教に盡力せり。是に於てコルヴィノは西紀一三〇五年一月及び一三〇六年二月書を送りて極東及び印度に於ける羅馬教會の發展を報告するや、法王クレメント（Clement）五世は其の功を嘉みして西紀一三〇七年コルヴィノをカタイ（Cathay）の大僧正に任じ、且つ其の傳道を助くる爲め副僧正以下の僧職を置くことを許し、更に七人の僧侶を派遣せしが西紀一三一一年更に三人の僧侶を派遣せしが、到着せるものは僅に一人に過ぎざりきといふ。コルヴィノまた泉州及び杭州に赴きて教會堂を健立し、西紀一三二八年を以て燕京に死せり。

オドリック（Friar Odoric）　西紀一二八六年伊太利ボルデノン（Pordenone）市附近のヴィラ・ヌオヴァ（Villa Nuova）に生まる、長じてフランシスコ派の僧となり、後東洋に布教を命ぜらる。是に於てオドリックは西紀一三一六年トレビゾンド、エルゼルム（Erzerum）を經てタブリズ及びスルタニア（Sultania）に赴き、次でシラズ（Shiraz）、八吉打、ホルムズ（Hormuz）を訪ひ、ホルムズより海路印度に向ひボムベイ（Bombay）附近のタナ（Thana）に上陸す、時に西紀一三二二年の初なり。オドリックまたマラバル（Malabar）、クィロン（Quilon）を經て錫崙に渡り、次でマドラス（Madras）附近のマクラプル（Mailapur）に赴き聖トーマス（St. Thomas）の廟を訪へり。オドリックは更に印度より海路支那に向ひ蘇門答剌、爪哇、渤泥、占城を經て西紀一三二三年廣東（Chin-Kalan）に達し、是より陸路泉州（Zayton）に至り更に山路を踰えて杭州（Cansay）を訪ひ、次で燕京（Khanbaliq）に入り茲に三年間滯在したりといふ、思ふに老齡のモンテ・コルヴィノと會見せるならん。後オドリックは陸路によりて歸途に就き、先づ吐蕃に入りてラッサ（Lhasa）を訪ひ、支那土耳其斯坦を經て中央亞細亞に入り、次で波斯の北部に出でたり。然るに是よりヴェネチアに歸れる行路詳らずと雖も、恐らくタブリズを經て龔日の往路をたどりしならん。今世に傳ふるオドリックの旅行記は彼が國に歸りてバヴァ（Padua）の僧院に住み、西紀一三三〇年五月其の實歷談をなせるものに基づき、ソラニヤ（Solagna）の僧正ウィルレム（Willem）の之を拉丁文に筆錄せるものなり。次でオドリックはアヴィニョン（Avignon）の法王廷に赴かんとしピサに至りて病に罹り、其の鄉里の都ウヂネ（Udine）に還りて遂に死す。時に西紀一三三一年一月なり。

マリニォリー（Giovanni di Marignolli）　普通にジァン・ヅ・マリニォリー（Joan du Marignolli）と稱せらる、西紀一二九〇年頃フィレンツェ（Firenze）の貴族の家に生まれ、長じてフランシスコ派の僧となる。西紀一三三八年阿蘭（Alani）の一貴族元の順帝の使節としてアヴィニョンの法王廷に來るや、法王ベネヂクト（Benedict）十二世はマリニォリー以下四人の僧侶を使節となし、法王の返翰を齎らして支那に赴かしむ。是に於てマリニォリー一行は西紀一三三八年十二月アヴィニョンを發しナポリ（Napoli）に於て元の使節に會し、翌年五月コンスタンチノプルに達して約二ヶ月間滯在せる後黑海を渡りカッファ（Kaffa）に上陸して欽察汗國の都薩來に赴きぬ。時に金帳汗月即別（Uzbeg）大に一行を優遇し、西紀一三四〇年の春に至り阿

力麻里(Almalik)に向て轉送せしめき。阿力麻里は西紀一三三九年西班牙の宣教師七人の虐殺せられし所なりしが、マリニォオリー等は玆に多數の改宗者を得て教會堂を建立し、西紀一三四二年更に支那に向て進み、西紀一三四二年五六月の交遂に燕京に達して順帝に謁したりといふ。かくてマリニォオリーは燕京に留まること三四年にして泉州に赴き、西紀一三四七年十二月支那を去て海路より印度に向ひ翌年春クィロンに上陸し、次でマドラス附近の聖トーマス廟を拜し更に瓜哇に赴き、既にしてマラバルに向ひしが海上颶風に遭ひ、錫嵓の西北岸ベルワラ(Beruwala)に漂着してサラセン人の酋長ホージア・ジァハン(Khoja Jahan)の爲めに捕へられ、元帝の恩賜物及び其の他將來せる貴重品を奪はれ、玆に止めらるゝこと四ケ月にして漸くホルムズに航し、八吉打、毛夕里(Mosul)、アレッポ(Aleppo)、的迷失吉(Damascus)、イェルサレムを經て西紀一三五三年漸くアヴィニョンに歸り、法王インノケント六世に元帝の親翰を呈したりといふ。翌年獨逸帝カール(Karl)四世の伊太利を訪ふや、マリニォリーを擧げて宮廷說教官となし、法王もまた之をビシニァノ(Bisignano)の僧正に任じぬ。次でマリニォリーは西紀一三五四年より一三五五年の間獨逸帝と共にプラーグ(Prague)にあり、西紀一三五六年にフィレンツエの使節として法王廷に赴き、西紀一三五七年にはボロニャ(Bologna)にありしが、然かも是より以後其の消息を知る能はず、隨て其の沒年を知るに由なし。

イブン・バツタ(Ibn Batuta)　本名はアブ・アブダラー・ムハメッド(Abu Abdullah Muhammed)、西紀一三〇四年モロッコ(Morocco)のタンジール(Tangiers)に生まれたる亞拉比亞人なり。西紀一三二五年二十一歳にしてモロッコのフェズ(Fez)を發し、先づ麻嘉(Mecca)に巡拜し次で波斯に赴き、メソポタミア、亞拉比亞を經て阿弗利加の東海岸に至り、轉じて小亞細亞よりカスピ海沿岸に赴き薩來を訪ひ、花剌子模、不花剌、阿富汗斯坦を經て印度に入り、更に海路支那に向ひ蘇門答剌、瓜哇を經て泉州(El Zaitun)に至り次で杭州(Elkhansai)に赴けり、實に西紀一三四七年より一三四八年に至る間にして元の順帝の時に當る。イブン・バツタ杭州にありて元朝の衰亂を聞き再び泉州に還り、次で蘇門答剌の船に乘じて歸路に就き、更に印度の南海岸を過ぎて亞拉比亞に達し、西紀一三四九年フェズに歸れり。既にしてまた西班牙の南部に赴き、次で西紀一三五二年深く阿弗利加內地に入りニゲル(Niger)河畔のチンブクツ(Timbuktu)に至り、西紀一三五四年フェズに歸りぬ。其の全行程七萬五千哩を超え、二十八年を費したりといふ。西紀一三七八年死す、時に年七十五。現存する其の旅行記はイブン・バツタが王命により上つれるものにしてムハメッド・イブン・ジュザイ(Muhammed Ibn Juzai)の筆錄する所にかゝり、西紀一三五五年十二月十三日を以て成れるものとす。

サマルカンド(Samarkand)　古代の希臘人は之をマラカンダ(Marakanda)といひ、支那の唐代には康國、颯秣建といひ、元史には撒麻耳干、薛迷思干、尋思干、樽思干とあり、亞拉比亞人、波斯人はセミスカント(Semiscant)といひ、西部土耳其斯坦の首府なり。古くより中央亞細亞の有名なる都府にして

西遼の德宗之を陷れしことあり、後花剌子模王ムハメッド玆に都せしが、元の太祖の爲めに陷れらる、後帖木兒起りて玆に都せり。

ウルゲンヂ (Urghendj)　元史に玉龍傑赤とあり、花剌子模の舊都にしてムハメッドに至り都をサマルカンドに遷せり。蒙古軍の花剌子模に侵入するや、西紀一二二一年朮赤之を攻め次で窩濶台之を陷れて破壞しぬ、之を古ウルゲンヂといひ、其の遺址はアム河の河口にありて兩岸に跨る。新ウルゲンヂはヒヴァ (Khiva 基華) の北東に當りてまたアム河の河岸にあり。

寬田吉思海　カスピ海 (Caspean Sea) をいふ、田吉思は土耳古語デンギス (Dengis) の對音にして海をいふ、ブレットシナイデル (Bretschneider) 氏の說に寬は蓋し畏兀兒 (Uigur) 語に海の義なるクアン (Kuan) の對音なるべしといへど首肯する能はず、何となればブレットシナイデル氏の說に從へば寬田吉思は畏兀兒語土耳古說の合成語にして海々となるを以てなり、予思ふに寬は恐らくカスピ海の東南岸の地グルカン (Gurkan) またウルカン (Urkan) の對音にして寬田吉思はグルカンの海或はウルカンの海なるべし、グルカンの地は希臘羅馬の古典に記せるイルカニア (Hircania) の地にして古代の希臘人及び羅馬人はカスピ海をイルカニアの海ともいへり、故に波斯人もまたグルカンの海或はウルカンの海といへるならん、果して然らばグルカンの海或はウルカンの海を土耳古人が轉訛してカンの海或はクアンの海といへるものと考ふるを得べきなり。

大和嶺　元史に哲別、速不台の二將大和嶺を踰えて欽察部を征したること見ゆ、大和嶺は高加索山をいふなり、土耳古語に山をダハ (Dagha) 或はタハ (Tagha) といふ、高加索山の東麓よりカスピ海に至る地方にダヘスタン (Daghestan) あり、故に大和嶺は高加索山の東部をいふならん。

喀喇和林、和林、黑林　(Karakorum, Kharakholin)　支那にては和林、黑林と書す、蒙古にては喀喇和林 (Karakorum) といふ。蒙古語のカラ (Kara) は黑の義、コルム (Korum) は陣營の義なり。黑林は元來蒙古語のカラツン (Karatun) の譯なり、波斯の蒙古史家ラシッド・ウッヂン (Rashid ud-din) は之をカラウン・カブヂァル (Karaun Cabdjar) といふ、黑林徑の義なり。其の地は今の外蒙古喀爾喀部の杭愛山東オルフォン (Orphon) 河岸にあり、もと唐時代に回紇の毗伽可汗の故城なり、其の地に和林河あるを以て名づくといふ、ラシッド・ウッヂンはカラコルム (Karakorum) 山の名より出でたりといふと雖も信じ難し、和林河はまた喀喇和林河ともいへば、此の河名より地名の起りたりといふを穩當とす、然れども今此の河名なし、思ふにオルフォン河の支流コクチン・オルフォン (Kokchin Orphon) の古名ならん。元の大祖初め玆に居を定めしが未だ都としたるにはあらず、元史によれば太宗の七年即ち西紀一二三五年二月和林を會同の所となして之に城き萬安宮を作る、城の周五里(我が一里弱)とあり、此の時始めて蒙古の都となりしが如し。かくて太宗、定宗、憲宗は皆玆に都し、世祖に至り西紀一二六〇年都を燕京 (今の北京) に遷して大都といへり。是より和林は唯蒙古地方の政治的中心たるに止まりしが、後元亡びて蒙古人の支那を去るや、

また一時都を玆に置けり。其の址は今オルフォン河の東半里の地にある額爾德尼招（Erdenitso）寺院即ち光顯寺の地ならんといふ。

蔡州　今の河南省汝寧府なり、金の哀宗蒙古軍に汴京を圍まれ遁れて蔡州に據りしが、西紀一二三四年宋蒙古の連合軍攻めて遂に之を陷れ金は滅亡せり。

薩來（Sarai）　欽察汗拔都が南露西亞のヴォルガ（Volga）河の支流アクツバ（Akhtuba）河畔に建設せる都なり、拔都は每年秋期玆に來りて駐まれといふ。薩來には新古の二市ありて其の位置に就き異說あり、露西亞人グレコリエッフ（Gregorieff）敎授は古薩來の遺址をアクツバ河（ヴォルガ河の下流三角洲より溯ること百里以上にして河は數條の支流に分岐す、其の東なるアクツバ河といふ）の左岸なるツァレフ（Tsarev）市附近に於て發見したりといひ、且つ新薩來の名は西紀一三一〇年以後鑄造せられたる古貨幣により知らるゝのみなれば、新薩來は恐らく古薩來の一部に新設せるものならんといひ、英吉利人ヘンリー・ユール（Henry Yule）大佐は之に反して古薩來をアストラカン（Astrakhan）市の西北セリトレンノイエ・ゴロドック（Selitrennoye Gorodok）附近にありといひ、新薩來はツァレフなりといへり。以上の兩說は是非の判定を下す能はず、故に兩者を擧げて識者の判斷に委することゝしたり。新薩來が札尼別汗（Janibek Khan）若しくは其の父月即別汗（Uzbeg Khan）の時に建設せられたることは、札尼別の發布せる貨幣の鑄造地を新薩來と刻せるにて知るべし、札尼別は西紀一三四一年より一三五七年まで欽察汗たりし人なり。其の後薩來は西紀一三九五年帖木兒（Timur）の命によりて焚かれ後再建せられしが、西紀一四八〇年遂に露西亞人の爲めに破壞せられたりといふ、是れ蓋し新薩來ならん。但し以上述べたる新古の薩來は拔都の時黑海の北クリム半島に建てたる薩來とは別なり、故に欽察汗國に薩來といへる地は少なくとも三ヶ所ありたりと知るべし。

不里阿兒、孛烈兒、馬札兒、涅迷思（Bulgar, Polen, Magyar, Niemitz）　是等の名稱は皆元史に記せり、不里阿兒（Bulgar）は勃牙利（Bulgaria）人の祖先にして土耳古族なり、もと亞細亞より移りてヴォルガ河の沿岸に住み、河名によりて不里阿兒と稱し、後今の勃牙利に轉徙せるものなり。孛烈兒は波蘭人にしてスラヴ（Slav）族なり。馬札兒（Magyar）は土耳古族にしてもと亞細亞より露西亞の南部に移り、後更に今の匈牙利（Hungary）に轉徙せるものにして今の匈牙利人の祖先なり。涅迷思（Niemitz）は獨逸人をいふ、もと中古の露西亞人は其の國境の獨逸人をニェミチイ（Niemitsy）と稱せり、啞者の義にして言語の通ぜざるを以ていへるなり。

鄂州　今の湖北省武昌府なり、元の憲宗南征して宋を伐つや忽必烈鄂州を圍みしが、會〻憲宗合州の攻圍中に死し阿里不哥蒙古にありて大汗と稱せしかば、忽必烈遂に賈似道の請を聽き和を許して鄂州の圍を解き北に還れり。

上都　もと開平といひ元の世祖之を上都と名づく、今の直隸省宣化府獨石口東北の地なり。元の憲宗

死して阿里不哥喀喇和林に自立するや、忽必烈急に宋の和を許して北に還り、此の地に至り少數のフリルタイに推されて大汗の位に即き世祖となる、時に西紀一二六〇年なり。かくて上都は一時元の都たりしが、後世祖燕京に都を遷すに及び、此の地は元帝の避暑地となれり。

八吉打（Bagdād）　宋史及び諸蕃志には白達、元史の憲宗本紀には八哈塔、地理志には八吉打、劉郁の西使記のは報達、元朝祕史には巴黑塔惕に作る、皆同音異字にしてアッバス朝の都バグダードをいふなり。此の都は西紀七六二年アッバス朝第二代の哈利發アルマンソル（Almansor）の建設にかゝり、初めはチグリス（Tigris）河の西岸にありしが後年其の對岸に遷し、新市を八吉打と稱して哈利發の居城となし、舊市は市外となりてカルシ（Karshi）と稱せらる。かくて八吉打はアッバス朝歷代の都城たりしが、第三十七代の哈利發ムスタシム（Mustasim）の時に至り、西紀一二五八年旭烈兀の爲めに陷られアッバス朝遂に亡べり。

タブリズ（Tabriz）　波斯アゼルバイジャン（Azerbaijan）州の都にしてウルミヤ（Urumia）湖の東四十哩アジ河（Aji Chai）の河畔にあり、西紀一二五八年伊兒汗旭烈兀茲に都を奠めて伊兒汗國を建つ、然れども旭烈兀は晩年多くマラガ（Maragha）に居住せり。

厓山　今の廣東省新會縣南方の海島なり、宋の將に亡びんとするや陸秀夫、張世傑等帝昺を奉じて之に據る。時に張世傑大船千餘を連結し一字陣をなして海中に碇泊し、中艫外舳貫くに大索を以てし四周樓棚を起して城堞の如くし、帝昺を奉じて其の間に居り死計をなす。西紀一二七九年元將張弘範至り舟師を以て海口に據る、張世傑部下を率ゐて旦夕大に戰ふ、二月に至り張弘範其の軍を四分し自ら一軍に將として相去る數丁、諸將に令して曰く「宋の舟師西厓山に艤す、潮至れば必ず東に遁れん、急に之を攻めて去るを得しむる勿れ、吾が樂の作るを聞かば乃ち戰へ、令に違ふものは斬らん」と、先づ北面の一軍を麾き早潮に乘じて戰ひ張世傑の破る所となりて退く、午潮上るや元の軍中樂作る、宋軍以て誓く懈るとなして備を設けず、是に於て張弘範舟師を以て其の前を犯し南面の軍之に繼ぐ、宋軍南北より敵を受け兵士皆疲れてまた戰ふ能はず、張世傑事の去るを知り乃ち精兵を抽きて中軍に入り諸軍大に潰え、元軍宋の中軍に薄まる。會〻日暮風雨起りて昏霧四方に塞り咫尺を辨ぜず、張世傑乃ち維を斷ち十六舟を以て港を奪うて去る。陸秀夫帝の居る所の舟に走る、舟稍〻大にして且つ諸舟環結す、出走するを得ざるを度り乃ち先づ其の妻子を驅て海に入れ、帝を負うて同じく溺る、後宮諸臣從て死するもの甚だ衆し、餘舟尙ほ八百ありと盡く張弘範の得る所となる、越えて七日屍海上に浮ぶもの十餘萬人、中に帝の屍及び詔書の寶を得たりといふ。是に於て宋遂に亡ぶ、實に西紀一二七九年二月なり、之を厓山の戰といふ。

襄陽　今の湖北省襄陽府なり、後漢の末劉表之に據るや劉備曹操に逐はれて來り、隆中に諸葛亮を得て謀主となし三國鼎立の計を聽く。南宋の末呂文煥之を守りて元軍を防ぎしが、西紀一二七三年樊城陷りて元兵悉く襄陽に集まるに及び、呂文煥宋廷の援兵到らざるを知り、堅守六年の節を棄てゝ遂に元に降れり。

ザイトン（Zayton, Zaiton, Zaitun）　マルコ・ポロ、オドリック、イブン・バツタ等の書中に記せる支那のザイトンは泉州なり。泉州城の異名を刺桐城または瑞桐城といへることは、方輿勝覽に「州城留從效重加版築、旁殖刺桐、環繞、名曰桐城、如先ゝ葉後ゝ花、其年五穀豐登、否則反ゝ是、故謂之瑞桐ニ」（留從效は初め南唐に仕へ後宋の太祖に仕ふ）と記するを以てザイトンを刺桐または瑞桐の對音と見て誤なかるべし。然るに一部の學者中にはザイトンを漳州に比定するものありと雖も首肯すべからず、但し泉州及び漳州の二港は今尚ほ南洋貿易の要港にして共に廈門（Amoy）灣に於ける樞要の地なるが故に、漳州をザイトンに比定するは多少の理由なきにあらざるも、泉州が唐宋以來外國貿易港として著名なるを見れば、ザイトンの泉州なるは疑なかるべし。

ハンバリッグ（Khanbaligh, Khanbalik, Canbaluc）　汗の居所の義にして大都即ち燕京をいひ今の北京なり。當時の外國人の著書には燕京或は大都といはずして皆ハンバリック、ハンバリック・カンバルックと記せり、蒙古人を初め外國人は皆かく呼びしならん。

フリルタイ（Kuriltai）　蒙古の諸王族、諸將及び蒙古所屬の諸部の酋長、諸國の君主等により組織せらる大聚會なり、初めには帝位即ち蒙古大汗の選擧を議せしが、後には之を擴張して宣戰講和等の大事を議するに至れり。かくてフリルタイによりて選立せらるゝにあらざれば何人も大汗たるを得ず、若し此の禁を犯すものは死刑に處せらるべく、また公選によりて大汗たるものは太祖の一族中教育最も完く知識最も博く才能最も勝れたる超拔の人に限る定めなりき。然れども此の結果として一定の繼承法あらざりしかば、元は繼承の際爭亂屢〻起りまた擁立の功を恃みて大臣の專恣を招くに至れり。

金帳、白帳、青帳　欽察汗拔都の居所は金帳（錦繡を以て作る）の帳殿即ち天幕なるが故に金幹耳朶（Sira Orda）といひ、其の兄斡魯朶は白帳を用ひて白幹耳朶（Ak Orda）といひ、弟昔班は青帳を用ひて青幹耳朶（Koek Orda）といひければ、是より金帳汗、白帳汗、青帳汗の名稱起れるなり。

木剌夷（Mulahida）　元史の太祖本紀には木剌夷、太宗本紀には木羅夷、憲宗本紀には汝里奚、郭侃傳には木乃兮、劉郁の西使記には木乃奚に作る、皆ムラヒダ（Mulahida）の同音異字にしてイスラム教の一派イスマイル（Ismail）派の教徒をいふ、迷へる者の義なり。歐羅巴人は之をアッサッシン（Assassin）即ち暗殺派ともいへり。此の派はもとイスラム教の一派シイ（Shii）より出で埃及、シリアにもあり、波斯にてはエルブルズ（Elburz）山中可疾云（Kazvin）の北方ルドバル（Rudbar）に山寨を構へて住み、またクヒスタン（Kuhistan）即ち呼羅珊（Korassan）の南部一帶の地乃沙不耳（Nishapur）、哈烈（Herat）、エズド（Ezzud）、亦思法杭（Ispahan）の間にも居り、ズゼン（Zuzen）、ツン（Tun）にも居り、またマザンデラン（Mazanderan）の低廉（Dilem）にも據り、世襲の君侯を戴き生き神として尊崇し其の命ずる所は神意にして違ふべからずとなせり。初めイスラム教は教祖摩訶末（Muhammed）の死後スンニ（Sunni）、シイの二派に分裂し更に數十の分派を生ぜしが、シイ派は摩訶末の女ファチマ（Fatima）の夫アリ（Ali）及び其の子孫を正

統となし、世〻アリの子孫を戴き之をイマム(Imam)と稱して哈利發に對しぬ。アリの後第六代のイマムたるジァファル・ウス・サヂク(Jafar us Sadiq)の時一旦長子イスマイルに其の職を襲がしむることゝ定めしが、イスマイル酒に耽けりて行正しからざりしかば、改めて第二子ムサ・ガジム(Musa Kazim)に讓りぬ。是に於て若し最初の宣言正しくして不可改とすれば、イスマイルの行修まらずと雖も之をイマムとなさゞるべからずと說ける一派起り、イスマイルの子を奉ずるに至れり、之をイスマイル派の發端となす。其の後イスマイル派は西紀第十一世紀の末セルジュック朝の明君マリク・シアー(Malik Shah)が賢相ニザム・ウル・ムルク(Niam ul Mulk)に任じて國勢盛なる時イラク・アジェミ(Irak Ajemi)に入りて勢力を得るに至れり。其の基を開きたるものはハッサン・サバー(Hassan Sabah)といひ、宰相ニザム・ウル・ムルクの同窓の友にして純粹の亞拉比亞人なり、初めイスマイル派の宣教師となりて低廉に居り大志あり、其の南方エルブルズ山中阿剌模忒(Alamut)城を取りて之に侯たらんと欲し、謀を設けて西紀一〇九〇年九月其の守將を逐ひ玆に據りて其の附近を平らけ、またルドバルを取り其の他は遊說或は謀略を以て之を併せ、降らざる時始めて兵力を用ひたり。次で尼沙不耳の南方クヒスタンに向ひ宣教師を派遣して之を取るや、マリク・シアー兵を發し之を征討せしが會〻死して罷む。ハッサン・サバーが是の如く成功せるは剌客を用ひたるによる、其の部下の信徒はハッサン・サバーはイマムなれば其の命に從はざるべからずとなし、セルジュック朝の宰相ニザム・ウル・ムルクの如きも其の毒手に斃るゝに至りぬ、實にマリク・シアーの死に先だつこと三週間前な

り、是に於て諸將常に鎖帷子を着けて警戒したりといふ。後算端(Sultan)サンジァール(Sanjar)之を伐たんとせしに、其の臥床の前の地に刃を剌し書を遺せるものあり、曰く「ハッサン・サバーは算端に好意を表するが故に算端の胸を剌すべかりし劍を以て地に剌したり、ハッサンは身山中にありと雖もよく遙に左右の手を勞して此の事あらしむ」と、サンジァール大に驚き遂に出征を罷めたりといふ。西紀一一二四年五月ハッサン・サバー死に臨み子なきを以て其の朋友にして勳功ある蘭巴撒耳(Lembesser)の城主キア・ブスルグ・オミッド(Kia Busurg Omid)を招きて位を傳へぬ。オミッドの時剌客を養ふこと益々盛にして唯にイスマイル派に反對するもの〻死せしのみならず、苟も之に好意を表するものは借りて以て私忿を洩すを得るに至り、サンジァールの宰相アブル・ナッスル(Abul Nassur)、哈利發モスタルシッド(Mostarshid)及びラシッド(Rashid)の如きもまた其の剌客の暗殺する所となれり。其の剌客を養成する法はイマムの居城中に宮室苑囿を築きて華美壯麗を極め音樂を設け美人を置き、十二歳より二十歳までの膽略ありて死を畏れざる青年を擇びて日に天堂福地の快樂を說き、ハシシ(Hashish)酒を飲ましめ醉うて昏迷するに乘じ之を其の宮殿に入れて快樂を縱にせしめ、其の後また醉はしめて之を出し醒むれば其の遇ふ所を詢ひ、靡訶末の所謂天堂福地も之に過ぐるものなし老を此の鄕に過ぐすは快ならずやと說き、よりて剌客の任務を授け事成らば其の故處に復し事成らずして死するも魂魄天に昇りて樂を享くべしといふが故に、皆踊躍して命を奉じ或は商賈となり或は奴僕となりて其の志を行へりといふ。ハシシ酒は麻葉の液汁を釀して造れるが故に

此の刺客をハシシン（Hashishin）と稱せしが、歐羅巴人は之を訛りてアッサッシン（Assassin）といひ、是を以て暗殺の語となすに至れり。西紀一一三八年オミッド死して其の子モハメッド立ち、二十五年を經て其の子ハッサン之に嗣ぐ。從來イスマイル派は埃及のファチマ朝の算端をイマムとして之に屬せしが、ハッサンに至り獨立して之を仰がず、自ら見えざるイマムの代理者にして算端の代官にあらずといひ、西紀一一六四年八月信徒を集めて埃及と關係を絕つ宣言をなし、爾來己れをイマムと信ぜよと告げ、大宴會を開きて酒を飲み縱に樂しむべきを命じぬ。元來飲酒はイスラム教の禁ずる所なれば他のイスラム教徒は之を目してムラヒダ即ち迷へる者といふに至れり。西紀一二〇一年モハメッド死して其の子ジェラル・ウッヂン・ハッサン（Jelal ud-din Hassan）立ち、先代の行動を非難して頗る改良する所あり、西紀一二二一年ハッサン死し其の子阿剌丁（Alai ud-din Mohammed）僅に九歲を以て位に即く。既にして元の太祖西征してアム河を渡るや阿剌丁使を遣はして款を納れ、太宗即位の時使を遣はして之を賀し、定宗の時其の使また至りしが禮せられずして去れり。後憲宗位に即き其の弟旭烈兀をして西征せしむるや、先づ木剌夷を鏖くし然る後哈利發を屈して蒙古の大汗に從はしむるを命ず、蓋し嘗て木剌夷刺客の狂暴を開けるを以てなり。是に於て旭烈兀進んで木喇夷を伐ち、西紀一二五六年阿剌丁の子魯兀乃丁（Rokn ud-din Kurshah）を擒殺して遂にイマム家を滅ぼせり。

蒙古文字　初め蒙古には文字なかりしが太祖の乃蠻を征するに及び、乃蠻人の使用せる畏兀兒（Uigur）文字を採用するに至り始めて文字あり、後また漢字を借りて其の用を辨ぜしが、世祖の時に至り喇麻八思巴に命じ蒙古新字を製せしめて之を頒行しぬ、是れ即ち今世に傳ふる蒙古文字なり。元史に曰く「命製二蒙古新字一、字成上レ之、其字僅千餘、其母凡四十有一、其相關紐而成レ字者、則有二韻關之法一、其以二二合三合四合一而成レ字者、則有二語韻之法一、而大要則以二諸聲一爲レ宗、至元六年詔頒二行天下一、凡璽書頒降、並二用蒙古新字一、各以二其國字一副レ之」と、是に由りて之を觀れば蒙古新字頒行したるは至元六年即ち西紀一二六九年なるを知るべし。其の書法は縱に書して左より右に及ぼす、もと畏兀兒文字を基礎とせるものなり、但し畏兀兒文字はもとネストリウス教僧侶がシリア文字を基礎として作れるものなれば、蒙古文字もまたシリア文字の系統に屬し、多少サンスクリット文字及び西藏（Tibet）文字の影響を受けたる所あるを認むべし。

書籍の印刷と活版術　支那古代の書籍は皆寫本にして之を印刷せるものなかりしが、明の陸深の河汾燕閒錄に「隋文帝開皇十三年十二月八日、勅廢像遺經、悉使レ雕レ板、此印書之始也」といへるを見れば、印書の術は隋の時に起れるが如し、然るに隋の費長房の歷代三寶記によれば、此の時天下の廢像遺經を復修せることあるも、雕板の事實を記さず、故に陸深の說の誤まれるを知ると雖も、唐の世に至りて佛典雕印の風漸く盛になり旁ら他の書籍に及び、次で五代の時に至り始めて經籍を印行せるを見れば、印書の術は隋末唐初に起れるを認め得べし、而して宋の李攸の五代會要に後唐の明宗の長興三年二月宰相馮道等奏

して判國子監田敏に命じ石經の文字により九經を校正して印板に附せんと請へることを記せるによれば、經籍の印行は五代の時を以て初めとすべきなり。かくて宋の世に至り書籍の印刻盛に興りしが、此の間に活版もまた起りぬ、宋の沈括の夢溪筆談によれば宋の仁宗の慶曆中布衣畢昇始めて活板を作りたるが如し、其の法は膠泥を用ひて字を刻し、薄きこと錢脣の如くし、毎字一印となし火に燒きて堅からしめ、先づ一鐵板を設け其の上に松脂蠟を以て紙灰の類に和して之を冒し、印せんとすれば則ち一の鐵範を以て鐵範の上に置き、乃ち密に字印を布きて鐵範に滿つるを一板となし、持して火に就きて之を煬す、藥稍〻鎔くれば則ち一平板を以て其の面を按ずれば、則ち字平かなること砥の如しといへり。胡元瑞の筆叢によれば今藥泥を以て之をなすものなし、惟木を用ひて活字となすといひ、また元の王禎は木字に易へたることを傳へ、明の陸深は鉛字を用ひたることを記せるも、其の沿革は詳に知る能はず。然るに明の世に至り始めて銅の活字を用ひ、清の世に至りてて銅活字の使用最も盛に行はれ、また高宗の時棗木の活字を以て武英殿聚珍板を印刷せり。歐羅巴に於ては西紀第十五世紀の初めハールレム（Haarlem）の人コステル（Lawrens Tansson Coster）木板の印刻を發明したるも未だ書籍を印刷するに至らざりしが、西紀一四三六年に至りマインツ（Mainz）の人ヨハン・グーテンベルヒ（Johann Gutenberg）始めて金屬の活字を發明し、西紀一四五〇年に至り始めて活字印刷興り、次でストラスブルグ（Strasburg）の人ペテル・シェーフェル（Peter Schoefer）之を改良して活字の鑄造を發明するに及んで弘く行はれ、西紀一四六二年以後歐羅巴諸國に傳播するに至れり。之を要するに歐羅巴は支那に於ける木板印刻の發明に後るゝこと約八百年、活字印刷の發明に後るゝこと約四百年なりといふべし。

交鈔　交鈔は紙幣なり、南宋の高宗の時始めて之を用ひ、其の初めは輕便なるを以て人民皆之を便となし漸く流通するに至り、金にても廢帝亮（廸古乃）の時之を發行し錢貨と竝び行はれしが、遂に交鈔の濫發によりて其の價格大に下落し、民力困弊して國用また窮乏するに至れり。元に至り大宗始めて交鈔を造り世祖また中統交鈔を造り次で至元交鈔を造り、毎年印造する所數十萬より數百萬に上りぬ。其の法は絲を以て本となし絲鈔一千兩を以て銀五十兩に代へ（即ち至元鈔1貫＝銀$\frac{1}{2}$兩＝金$\frac{1}{20}$兩の割合なり）、諸物の價は竝に絲の例に從ふ定めなり。かくて初めは各路に平準行用庫を立てゝ金紙の交換をなし、また回易庫を立てゝ故鈔と新鈔との交換を許し、また丁錢、田賦には皆交鈔を以て納むるを許せしかば盛に天下に流通せしが、後回易庫を閉ぢて交換を罷め且つ僞造するもの多かりしかば交鈔の信用地に墜ち、物價騰貴して鈔の價格下落し經濟上の一大擾亂を起せり。

色目人　色目人とは西域諸國の人をいふ、色目を異にする人即ち外國人の稱なり、是等の外國人の世、元に仕へたるものを色目世臣といふ。元は諸官の長には必ず蒙古人を任じ、次官以下には內外人を擇ばず之を任用するを例とせしかば、科擧の法永く行はれず、仁宗の時に至り舊制を斟酌して法を立て三年毎に考試をなすことゝし、進士を分ちて兩榜となし蒙古色目人を右となし漢人南人を左となす、其の出身には

國子學、蒙古國子學、回々國子學等の目ありき。蒙古色目人とは蒙古人及び色目人をいふなり。

漢人、南人、蠻子　金及び元は支那を取りたる後漢人、南人の別をなせり、金は先づ遼の地たる支那北邊の人民を取りて漢人となし、次で宋の河南山東の人民を取りて南人となし、元は金の地たる河南山東以北の人民を取りて漢人となし、次で南宋の地の人民を取りて南人となせり。またマルコ・ポロの旅行記の中に南宋をマンジ（Manzi）と稱せるは、當時南人を蠻子と異名せるによるなり。

高麗の儒學文藝及び佛教　儒學は國初未だ盛ならざりしが成宗に至り經學博士を置きて其の力を盡さしめ、文宗の時に至り崔沖九齋を作りて諸生を教育し海東の孔子と稱せられ、王もまた國子監に詣り孔子を拜し百王の師として之を尊崇しぬ。睿宗は學生を宋に遣はし、また學士と經籍を講論し、學校を設け生員を置き、禮樂を以て俗を成さんと圖り、仁宗は諸生の老莊の學を修むるを禁じ、尚書戶部をして五典を民に教へしめ、閭里の兒童に論語孝經を頒賜し儒臣をして經を講ぜしむること睿宗の時と異ならざりき。其の後學問漸く衰へて詞賦文章頗る盛なりしが、忠烈王の時に至り大成殿を作りて先聖に謁し儒學再び興隆せり。然れども未だ程朱の學を講ずるものあらざりしが、忠肅王の時白頤生元に赴き程朱の學を修めて歸り、李齋賢、朴忠佐之に從ひて學び、權溥は朱子の四書集註を刊行し、禹倬は程氏易傳に精しくして生徒に教授するに及び、性理の學始めて行はるゝに至れり。其の後李穡、尹澤、權近、李仁復、金九容、鄭夢周、朴尙衷、朴宜中、崇李仁等の學者輩出して性理の學益〻盛なりしが、著書は僅に尹彦頤の易解、權近の入學圖說、五經淺見錄の類に過ぎざりき。文藝　光宗の時科擧を以て士を取りしより文學漸く興りしが浮華盛にして實德衰へ、成宗に至りて學校を建て修書院を置きしが、顯宗南幸の亂ありて未だ振はず、文宗の時崔沖九齋を作りて儒學を教授する旁ら詩文を課し、科擧に應ぜんとするもの皆就いて學びしかば、是より文學翕然として起るに至れり。仁宗肅宗睿宗の諸王は屢〻群臣と宴を設けて詩を賦し、毅宗に至り其の風益〻盛にして武將の憤怨を招き、王は遂に弑逆の禍に遭ひ文冠を戴くものは皆殺され、文運の一大災厄を招きぬ。其の後李奎報、琴儀、李公老、兪昇旦等の如き詩文に巧なるもの輩出せしが、文運一時衰頽して學者は一時僧侶に就き章句を習ふに至れりといふ。忠烈中宣の二王は皆文學を好み、忠宣王は元に赴きて名儒學士と交遊し、李齊賢其の間に周旋して文名最も盛なりき。恭愍王以後に至りては鄭道傳、尹紹宗、權近等の如き文學の士多く輩出し、其の詩文また觀るべきもの甚だ多く、其の盛況決して中葉以前の及ぶ所にあらず。然れども高麗一代深く力を著述に用ひて書籍を完成せるものは僅に數十種に過ぎず、歷史にては金富軾の三國史記を最も著名とし、詩文にては李奎報、李崇仁、李穡、鄭夢周等の集の如き最も後世に行はる。書籍の印行は其の初めを詳にせずと雖も、成宗の時大藏經を刊行するに宋本及び契丹本を求めて校合せり、後世之を高麗本といふ、以て印制の術夙に行はれたるを知るべし。また恭讓王の時書籍院を置き鑄字を印行したりといへば、當時既に活字印板の行はれたること明かなり。佛教　太祖深く佛教を信奉し即位の初め印度の僧摩睺羅、喇哩嚩日羅の來るを迎へ、且つ國を有つを以て佛力となし、其の訓戒を述ぶるに當り

て佛事をいふこと多く、成宗は僧徒を以て國師、王師となし、德宗以後の諸王は大抵菩薩戒を受け、また道場を設け、寺院に幸し、僧侶に布施すること歷世擧げて數ふべからず、仁宗以後の諸王は灌頂の禮を行へり。是より先き成宗の時僧三十餘人を宋の杭州に遣はして永明寺の智覺禪師に就きて學ばしむ、之を高麗に於ける禪宗の始となす。文宗の時其の子煦、寵を僧とせしに、煦性聰慧にして始めて華嚴を修め旁ら儒術に涉り、後宋に入りて法を求め還るに及び釋典經書を遼宋より購ひて刊行し、始めて天台宗を傳へ其の寂するや大覺國師を贈らる。是に於て佛敎益〻興隆し禪宗最も行はれたり。

蒙古時代に於ける波斯の文藝　伊兒汗朝の時に於ける波斯の文藝中歷史は蒙古人の征服に關するものあるを以て特に顯著なるもの多し、即ちイッズ・ウッヂン・イブン・ウル・アチル（Izz ud-din Ibn ul-Athir）はアル・カミル（al-Kamil）即ち全史を著はして世界の初めより西紀一二三〇年までの史實を記し、アライ・ウッヂン・アッタ・ムルク・ヂュヴェニ（Alai ud-din Atta mulk Djuveni）はタリク・イ・ヂハン・クシャイ（Tarikh i Djihan Kushai）即ち世界征服者の歷史を著はして成吉思汗の花剌子模征服及び旭烈兀の木剌夷討滅の史實を述べ、ラシッド・ウッヂン・ファズル・ウルラ（Rashid ud-din Fazl Ulla）はジァミ・ウト・テワリク（Jami ut Tawarikh）即ち歷史全集を著はして蒙古侵入以前の波斯史を記し、ミルコンド（Mirkhond）はラウザット・ウス・サファ（Rauzat us Safa）即ち清眞の園を著はして太古より西紀一四七一年までの世界史を述べたり。また地理學にはヤクート（Yakut）ありてムジァム・ウル・ブルダン（Mujam ul Buldan）即ち諸國地理辭典を著はし、科學者にはツス（Tus）のナシル・ウッヂン（Nasir ud-din）ありて宗敎、哲學、數學、物理、天文に通じ、旭烈兀に勸めて天文臺をマラガ（Maragha）に建てしめたるを以て著はる。また詩人にはジァラル・ウッヂン・ルミ（Jalai ud-din Rumi）、サヂ（Sadi 本名はムシァルリフ・ウッヂン Musharif ud-din）、ハフィズ（Hafiz 本名はシァムス・ウッヂン・モハメッド Shams ud-din Mohamed）、ジァミ（Jami 本名はアブヅル・ラーマン Abdur Rahman）等ありて千古の傑作を出せり。

第二期　明の太祖の一統より滅亡に至る

第五十章　明の太祖の一統　成祖の遠略

明の太祖の一統　**明の太祖**　朱元璋は字を國瑞といふ、濠州鍾離の人、父は世珍、母は陳氏、四子を生む、帝は其の季子なり、十七歳の時父母及び三兄を失ひて僧となりしが、二十五歳の時郭子興に從ひて興り、漸次に東南を平定し遂に師を移して北伐し、元を滅ぼして帝業を成し、金陵（今の南京）に都す、兵を起してより十五年の後なり。**元裔の討滅**　太祖即位の初め元の順帝は尚ほ上都にありて帝號を有し、擴郭帖木兒は大原に據りて山西陝西甘肅の兵を併せ、機を見て大都を復せんとし、明玉珍の子明昇は四川に據りて夏帝と稱し、元の宗室梁王巴匝剌瓦爾密（内蒙古多倫諾爾 Doron Nor の東）に奔らし（西紀一三六八年）、徐達は兵を率ゐて西し、悉く陝西を平らぐ。然るに常遇春は軍中に死し、李文忠代はりて其の軍を領せしが、時に順帝尚ほ應昌にあり、擴郭帖木兒兵を擁して西北邊に寇せしかば、太祖は徐達、李文忠に命じ道を分ちて北伐せしめしに、西紀一三七〇年順帝死して太子愛猷識里達臘立ち、擴郭帖木兒に命じて明軍に當らしむ。是に於て徐達は沈兒峪（甘肅省安西縣北）に至り、伐ちて擴郭帖木兒を和林に走らし、李文忠は應昌を衝き、愛猷識里達臘を破りて北に走らし、其の后妃、嫡子、諸寶物を獲たり（西紀一三七〇年）。太祖屢、書を贈りて擴郭帖木兒を招きしも應せず、兵勢頗る盛にして屢、邊境に寇せしが、西紀一三七五年病みて死し、次で一三七八年愛猷識里達臘も死して其の子脫古思帖木兒（Tukus Timur）嗣ぎ、納哈出（Nahachu）をして吉林地方の蒙古諸族を召集して遼東を侵さしめければ、太祖は西紀一三八七年馮勝を征虜大將軍となし、傅友德、藍玉を副帥となし、兵二十萬を率ゐて納哈出を征せしめ、金山（奉天府開原縣西北）に至り、之を擊破して納哈出を降しぬ。翌年藍玉進んで脫古思帖木兒を捕魚兒海（Buyur 克什克騰の西北）に破り、皇子妃嬪等百餘人、官屬三千、男女七萬、馬牛駝羊十五萬を獲たり。時に脫古思帖木兒は纔に遁れ、太子天保奴（Tienpaonu）と奔つて和林に赴き丞相咬住（Guiaochu）の許に投ぜんとし、圖拉（Tula）河に至るや、其の臣也速迭兒（Yessudai）の襲ふ所となり、衆散じて十六騎を餘すのみ、既にして咬住來り迎へしが、會、大雪に遭うて發するを得ず、也速迭兒の兵猝に至り、脫古思帖木兒は天保奴と共に殺さる、時に西紀一三八八年なり。是に於て蒙古の部屬悉く解散し

て漠南、滿洲の地は明の版圖に歸し、元は全く崩壞して國を成すに堪へず、後五傳して坤帖木兒（Gun Timur）に至り鬼力赤（Kulichi）の殺す所となり、遂に國を韃靼（Tartar）と稱するに至れり。**四川の討平**　是より先き夏主明玉珍死して其の子明昇嗣ぎ、明の招諭に應せざりしかば、太祖は西紀一三七一年湯和、傅友德を遣はし兵を發して之を討たしめ、湯和は瞿塘より、傅友德は秦隴より進み、連戰敵を破りて重慶に逼まるや、明昇遂に表を奉じて降り、蜀の地悉く平らげり。**吐蕃の擊攘**　初め徐達の陝西を平らぐるや鄧愈は臨洮に克ち、使を遣はして吐蕃の諸族を招諭せしが、後吐蕃の所部往々朝貢使を邀阻するものありしかば、西紀一三七七年太祖は鄧愈に命じて之を討たしめ、兵を三道に分ち窮追して崑崙山に至り、兵を留め諸要害を戍りて還りぬ。**雲南の討平**　時に元の梁王把匝剌瓦爾密雲南に王たり、其の地の險遠を恃みて明の招諭に應せず、遙に蒙古に應じて邊患をなしければ、太祖は西紀一三八一年傅友德、藍玉、沐英を遣はし步騎三十萬を率ゐて之を征せしめ大に之を破る、把匝剌瓦爾密遂に支ふる能はざるを度り、走つて晉寧州の忽納喆に至り、妻子を驅つて滇池に赴かしめ、尋で其の左右丞相と共に自殺せり。是に於て藍玉、沐英は更に進んで大理、金齒等雲南西部の諸蠻を降せしかば、支那は遂に明の一統に歸す、時に西紀一三八二年なり。此の間また南方諸蠻の屢〻叛けるものありと雖も皆平定して海內大に

治まれり。

大祖の治績　太祖は即位以來意を內治に注ぎ、律令を改刪して大明律を制定し、郊社宗廟の禮を定め、胡俗を禁じて衣冠を唐代の舊に復し、郡縣に令して學校を建てしめ、科擧の法を再興し、學士を重んじ、廉吏を貴び、鈔法を立てゝ元代の幣制を矯め、また兵權を朝廷に收め、丞相專恣の源を塞がんが爲め吏、戶、禮、兵、刑、工の六部の尙書をして政務を分掌せしめ、地方には布政使、按察使を置き、知府、知州、知縣を其の下に直隸せしめ、租稅を輕減して士民を撫し、更に遼東、大同、開平、甘州、貴州、洮州等邊要の地に行都指揮使を置きて國防を嚴にしぬ。太祖また前朝の失に鑒みて嚴に內官の朝政に關與するを禁じ、后妃を誡めて政に預らしめず、以て母后臨朝の弊を防ぎ、また宋元二朝が郡縣制を布きて帝室孤立の弊を招きたるに懲り、封建の制を布き、諸子二十四人を要地に分封して藩屛となし、外は邊塞を守り、內は夾輔に資せしが、之に領土を與へて民に臨ましめず唯秩祿を賜ひ護衛を附するのみ、故に周漢の制と異なれり。然れども太祖は猜忌にして刑罰を嚴にし、屢〻文字の獄を起して多く文臣を誅戮せしが、また其の功臣の多く武人にして己の死後に變を作すを恐れ、先づ胡惟庸の獄を起し、次で藍玉の獄を起し、前後牽連して數萬人を戮し、悉く老臣宿將を除きければ、後年靖難の役起るに及び、惠帝の爲め一

人のよく拒ぐものなきに至れり。

明初の封建　太祖は宋元の孤立して亡びたるに懲り、名城大都を擇びて豫め諸子を王となし、其の壯なるを待つて藩に就かしめたり。かくて西紀一三七〇年には先づ諸子九人を封じて王となし、棡を秦王（西安に都す）に、樉を晉王（大原に都す）に、棣を燕王（北平に都す）に、橚を周王（開封に都す）に、楨を楚王（武昌に都す）に、榑を齊王（青州に都す）に、梓を潭王（長沙に都す）に、檀を魯王（兗州に都す）に、従孫守謙（帝の長兄の子文正の子）を桂林に封じ、次で西紀一三七八年には椿を蜀王（成都に都す）に、柏を湘王（荊州に都す）に、桂を代王（大同に都す）に、櫟を肅王（甘州に都す）に、植を遼王（廣寧に都す）に封じ、後また西紀一三九一年に封じたるもの十人あり、即ち慶王㮵（寧夏に都す）、寧王權（大寧に都す）、岷王楩（岷州に都す）、谷王穗（宣府に都す）、韓王松（開原に都す）、鄖王棟（安陸に都す）、伊王欒（洛陽に都す）にして前後すべて二十四王ありき。其の制は祿を萬石となして相傳官屬を置き、三千人以上一萬九千人以下の護衞兵を附し、冕服車旗邸第は天子より下ること一等となし。公侯大臣も伏して拜謁せしむ、唯其の爵を列しても民に臨まず、藩を分ちても地を賜はざるは周漢の封國と異なる所なり。然れども燕晉二王の如きは北方の守禦となりて、邊寇を防ぎ諸將を節制せしかば、隱然勢力を有して朝廷と對峙するに至り遂に禍亂の基をなせり。

明初封建表

1、秦王樉	西安	9、靜江王守謙	桂林	17、岷王便	岷州		
2、晉王棡	太原	10、蜀王椿	成都	18、谷王穗	宣府		
3、燕王棣	北平	11、湘王柏	荊州	19、韓王松	開原		
4、周王橚	開封	12、代王桂	大同	20、潞王模	潞州		
5、楚王楨	武昌	13、肅王楧	甘州	21、安王楹	平凉		
6、齊王榑	青州	14、遼王植	廣寧	22、唐王桱	南陽		
7、潭王梓	長沙	15、慶王㮵	寧夏	23、鄖王棟	安陸		
8、魯王檀	兗州	16、寧王權	大寧	24、伊王欒	洛陽		

胡藍の獄　太祖は性殘忍にして猜忌する所多く、屢〻文字の獄を起して文臣を誅戮せしが、また己の死後諸功臣の專恣ならんことを恐れ、前後二大獄を起して老臣宿將を誅戮しぬ、之を胡藍の獄といふ。**胡惟庸の獄**　胡惟庸はもと寧國の令たりしが李善長の政を秉る時之に賂ひ、遂に召されて太常卿となり累遷して右丞相となり政を總ぶるや、生殺黜陟を專にして威福を恣にし、賄賂を貪り權を弄して畏忌する所なく、遂に異謀を企つるに至り、密に人を遣はし海に入りて倭